

希臘神學は神を以て凡ての靈物と等しく万物の中に遍滿するものと考へ、羅甸神學は神を以て遠隔の天上に超然たる者と想像せり。

甲神學は降生に導き乙神學は贖罪に反對なる刑罰の思想に陥らしむ。  
(誤謬の見解)

吾人の頗る遺憾とする所は羅甸神學が第五世紀より西方に於て盛行はれ、假令大に寛和し其殻を碎きしよせよ尙ほ今日の基督教中に其  
余勢を逞ふするとは是なり。

左の諸項に於て吾人は古代教會の信仰は其真正の意義に於て如何に廣濶、寛大、且倫理的なりし、如何に慈仁なりしか、又聖書の最古最良の解釋の如何に完全に吾人の道義官能と和合せしかを示さんとす。

吾人は諸教父を知り又は此人々が宇宙神教ユニヴァルサルイズムに對して與ふる證據の勢力を正算せんとするに先ち、精神上彼等の位置に己れを置きて之を考

へざるべからず。抑も教會は道德腐敗の世界に産れ出でしが、當時其腐敗を知覺する者誠に僅々に過ぎず、末年の羅馬帝國の嚴格なる歴史家すらも尙ほ時勢に汚染して其著書の紙面は之を反譯し能はざる形象を以て充たせり、吾人の幸にも想像し能はざる最醜最汚の肉慾は諸方に暴威を逞ふしたれば、吾人の敢て測り知るべからざる此腐敗にても尙ほ最終の贖罪あることを確定せんには、薄弱ながらも福音の眞髓として大希望の最堅なる信仰を要するなり、加之教會は古代に於ての特異の意義に於て戰闘的にして、無慈悲なる迫害に對しては時々、否、常に生死の争闘に陥りたり、當時斯の如き状態なりしが故に、殘虐なる迫害者又は憎むべき肉慾に耽りたる者は縱令悔改むるに及ばずして此世を去るも、來世に於て尙ほ救済を得るの觀あるを教ゆるは、十字架に對して殆ど反逆の所業の如く考へられたるや疑なきが如し、是等の事情を

熟慮せば當時諸教父が大希望<sup>○</sup>に就て同感<sup>○</sup>を表したる微細なる記載<sup>○</sup>に  
 すらも尙は非常なる重量<sup>○</sup>の付着する理<sup>○</sup>を見るを得べし、是れ此等の章  
 句を讀むに當り常に心に銘すべき事實なり、當時憐愍の情の何物たる  
 を未だ十分に知らざりしとを考ふるに當り特に然りとす、吾人の考ふ  
 る所を以てすれば當時憐愍を以て一の義務と考へざりしが如し、古代  
 に在ては其不徳大なりし故に隨て其刑罰も亦甚だ殘忍なりしなり、初  
 代の諸教父記して曰く當時劇場の猛獸が無罪の人も有罪の者も齊し  
 く之を噛み裂きて手足各々處を異にするの慘劇を演ずるに當り、深窓  
 に養育せられし淑女すらも尙は喝采を興へたりと。又記して曰く十字  
 架上にて活きたる人の苦悶に堪ゑざる慘狀に當時の通觀にして之を  
 見るを非とする者あるとなし、又記して云く各司法大臣は躬ら拷問者  
 にして殆ど各重罪裁判所は小教法拷問所なり、上等社會の家庭は基督

信徒の中にも各々奴隸を群集し、主人の僻心若くは女主一片の叱斥  
 に依り奴隸に酷鞭を加へ其身体を毀傷し之を呵責せしとありしと、凡  
 て此等の事實を充分思量し來れば斯の如き時代に於て宇宙神教<sup>ユニヴァーサルリズム</sup>の思  
 想たる上天より神託を受くるよあらざるよりは興らざるべしとの確  
 信を起さざるを得ず、今日罪人は殆ど病人の看護せらるゝか如く其苦  
 痛より保護せらるゝの時に當り、最善の人にして失落者の言ふべから  
 ざる禍難を見ると冷淡にして對岸の大災視するが如くならんには、余  
 の特に問はん<sup>ユニヴァーサルリズム</sup>とす宇宙神教は教父時代の如き場合に於て如何して能  
 く自ら起るを得しかど。

尙一步を進めて考へんに、或論者は曰く大希望の事は聖書中に其痕跡  
 を見ず、又人間自然の心中にもあるとなし、又前條述たる如く人々憐愍  
 の何者たるを知らず又教會最愛の感動を公言するを禁じたるの時に

在て此の如き思想は尙ほ之なきなりと。然るに實に數多の古代教父中には此思想を有する者甚だ多く、屢々廣濶なる形態を以て各々の墮落せし靈魂をも包括せしめたり。果して然らば渠等は何處より之を發見せしや。論者は確言して曰く舊約全書之を教へず、新約全書亦之を禁ず、當時流行の信仰も之と調和せず、如斯き時代又在て福音書の明瞭なる意義とも全く異なれりと。然らば諸教父は何處より之を輸入せしか。吾人の再び問はんは、果して然らば此思想は何地より湧出し來りしや。吾人は諸教父が其著書に證明する如く單に此を聖書の中より引來りしとを疑ふを得んや。論者又曰く教父の教ふる所は大希望の問題と屢々矛盾あるを免れずと。吾人は之に答へて云はんは、此等の矛盾は其存する者を見るに(イ)吾人が境遇上預想せし所に適合するものにして(ロ)其多分は外形上矛盾の如く見ゆれども是れ曖昧誤解し易き語

句より起れるものなり、(ハ)而して其眞に之れある場合に於ては彼著明なる隱匿教義オフトリンゴリサアに依て充分に説明せらるものなり。今是等の説を明瞭に述べんとするは當り、先づ其最後のものより始めんと欲す。元來隱匿教義を以て説明するに不便と考ふる眞理を隱伏する義務に限るは一般の風習なり、余は又教父自身の語によりて此主義の尙ほ極端に走りたるの有様を示さんとす、即ち敬神の假定的權威の危険なりし時には虚偽を以て明白なる義務なりとまで辨護するに至りたり、是れ注意して觀るべき限界なり。

此教義を論ずるに當り所謂 *fons pie* (信心なる虚偽)の主義は古代の立法に重要なる地位を占めしとを記憶せざるべからず、ブレトリーの如き大教師といへども尙ほ虚偽を以て道德醫治の一種となせり、此教義又フ井ーロの探るところと成り、遂に神學の生産地たるアレキサンドリ

アに傳播するに至れり、斯る教義の結果として顯出したるものは初世紀に於て甚だしかりき、即ち不經の福音書及び偽書の群集するあり、其他詐偽の神巫、大會議の決議書及び條例、諸福音書、作話等の偽物枚舉に遑わらず、或は猥りに他人の著作に或説を挿入し、之に添加し附會し或は毀傷し、或は全く贋造せる者さへあり。卓越なる一學者は古代の無罪なる時代の事を語りて善良なる目的の爲には渠等は全書を贋造するに少しも躊躇せざりしと云へり。——DALLEUS, *De usu Pat.* 有名なる學者カサウボン氏甚だ強く語て曰く、教會の初代に於ては上天の眞理を裨補する爲よ、自作の虚誕を以てするとを天晴なる行爲と考へし輩の多く存在せしを見て余は非常に感激せり、彼輩は此等の虚誕を呼んで善良なる目的を以て案出せる義務と稱せり、此の如き根源よりして其時代及び次の時代に於て主耶穌及び其他の聖徒の名義を以て出版せられ

たる著作六百種の多きに至れり。——*Encyc. i. N. x, Baronii. App. in Ann. Moysi* ム曰く第四世紀に於て殆ど一般に採用せし誤謬は詐偽を爲し虚言を吐くも若し之に依り宗教を旺盛にするを得ば是れ一の徳義なりと云ふに在り、*Eccles. Hist. i. p. 357.* 是れ初世に行はれたる教法を公平に穿ちたる言と謂つべし、エピフニヤス曰く「加特力教徒は聖路加の福音書より(耶穌歎きたり)との一句を削去せり」と *Ancor. xxxi.* 吾人は加特力教徒と聖書其物に就てすらも最も欺騙の行を爲すに躊躇せざりしと考ふべき明白なる證據として此語(或は眞ならざるべしと雖ども)を引用したるなり、紀元四百十九年カーセージに於てファーステナス氏はサーデガの教典を以て恰も「ナイシア」の大會議にて決定せられたる眞正の教典の如く唱へたり、此より僅々三十年后に至りてレオ氏亦同様の欺騙を爲したり、クリソストムの朋友なるカシヤン氏は心靈的戒

律集の著者なるが、其著書中或章の首に驚くべき語を掲げたり、曰く「使徒すらも虚偽は屢々許すべきものにして而して眞實も却て傷害を來すとあるを吾人に教ゆ」と——*Col. xvii. 20.* 聖クリンストムは詐偽 (*apate*) を心靈的醫藥なりとして公然之を辨護せり——*De sacer. lib. i. and ii.* 而して又渠は欺騙を企て之を實行して己れの親友ベシル氏を機檻に陥れて之に按手禮を授け、其成功したるを悦び自己の詐偽を聖書より引證して辨護せり、又渠は加拉太書二章の記事に於て聖保羅と聖彼得は單に虚托せるなりと主張せり、是れオリジン以來通例の説にして聖ゼロームの甚だ熱心に確定する所たり、渠はオーガスチンに書を送て實に斯く言へり、曰く “*Tu veritatis tue saltem unum adstipulatorem proferre debebis.*” —— *Ep. lxxxix.* 是れ如何なる註釋をも薄弱ならしむる語なり、是れ使徒に歸するは虚言を以てする者に非ずして何ふや、又或意味に

於て神託の靈を詐偽の伴侶と爲す者に非ずや、獨り之のみ怪しむに足らず、數多の教父は吾儕の主に歸するに虚偽を以てするを躊躇せざりき、即ち聖アムブローズ (*紀元四百二十二年テユリンのマキシマス氏ならん*) の或著書に在る九十二の説教の著者は基督よ於て “*sitire se simulat.*” と云へり——(説教第三十) 渠再び附加して云く基督は欺騙を以て悪魔を誑惑せりと——(同三十五) 或古代の記者——*De sanc. Trin.* (聖クリンストムの著書中に在り) の驚くべき文辭を比較すべし、ニッサの聖グレゴール曰く吾主は救濟の爲に欺騙を用ひたりと——*Cat. or. xxvii.* 聖ヒラレーは基督は其日に就て知らずと云はれしも其實眞に之を知らざりしにあらずと確言せり——*De Trin. lib. ix.* 而して又基督十字架上の苦難の際其恐怖、悲嘆及び苦悶は眞實のものよ非ざりしと——*ib. lib. x. p. 236.* 聖アムブローズ曰く “*Neque fallitur Pater neque fallit Filius, verum*

ea est in Scripturis consuetudo \* \* ut Deus dissimulet se scire quod novit. Et in hoc ergo unitas divinitatis in Patre \* \* Probatur et Filio, si quemadmodum Deus Pater cognita dissimulat, ita Filius, etiam in hoc imago Dei, que sibi sunt nota dissimulet”——*De fide lib.* v. 8. The Son of God se fingit infantem.——S. ZENO. *lib.* ii. tract viii. 聖々人曰く基督は無學を虚託せるなり云——*Ep.* cxli. *ad Caesar.*: *Adv. Eun.* hom. iv. 而して渠は善良なる目的の爲め詐偽を用ゆることを明白に稱讚せり——*Hom.* in *prim. prov.*

此舉證を以てすれば尙ほ之を増加するは容易ならん以上の如き諸記者は執拗なる罪人を恐喝する爲め不眞の威嚇を用ゆるに躊躇せざりしや明かなり。

尙ほ詐偽に就て知らんと欲する者は左の諸書を参考すべし

FANCIOUS.——*Bibl. grec.*——“Tot fraudes a prepositis pietate profecto;” MIRMAN——*Hist. of Christ.* iii, p. 858; S. GREGORY, of Nazianzus——*Orat.* xxxvi.; TERTULLIAN——*De pud.* xix.; ROPINOR——*In sym. Apoc.*; DIONYSIUS of Alexandria——*On S. Luke xxii.*; VIGORINOR——*De Phys.* lib. xxiii.—vi.; PROCRUS——*Or.* xiii. *In san. Pasch.*; S. IERO——*In Nat. Dom.* Ser. ii.; *De Pass. Dom.* Ser. xvii; MAXIMUS——*Quest. et dub.* lxi.; CLEMENT of Alexandria——*Strom.* vi.; HUET——*Orig.* ii. *prop. fin.* and *lib.* iii. 2, 3; DODWELL——*De patre. mart.* xiii and viii.; NEANDER——*Ecol. Hist.* vi. 325; OAVE——*Hist. liter.*, *On S. John Damascene*; GRESSET——*Eccles.* Hist. i. 298; *ed. Philad.* 1836; GORFUS——*De Jur. bell.* iii. 1.

實に他人の善事に必要なる時(大希望の場合の如き)には詐偽を以て全く正當なりとし、加之一の義務となせしや照々として明なり、然し吾人は諸教父を一般に虚言の辨護者なりとして、瞬間も之を責むるの意なし、只渠等自身の言語を以て或特別の方向に於て誠實の義務と定めたる思想の限界を述ぶるに止るのみ。

終に臨み此教義の二ヶの見解を比較せんとす

聖、ヒラレー

「此教父は詩篇第十五篇二節に、其心に誠實を言ふ者」といへるを註釋し、誠實の義務を主張せし後遂に左の如く云へり、去りながら是れ此時代の罪と不徳の理由とするには實に困難の事とす、何となれば虚言は屢々煩る必要なるにあればなり (Est enim necessarium plerumque mendacium) 而して詐偽も時々必要なり、譬へば待伏したる刺客に虚言を嗅ませ、或は危難に陥らんとする人を保護せん爲め證據を顛倒し、又は治療の困難を隱匿せんとして病人を欺くか如し。」

ドクトル、ブゼー

「臨機應變は「吾主」の主義なり、我は爾等に言ふべきもの多し、然れども汝等は今之を責ふ能はず、其限界は一問題に就き凡ての眞實を公言せざるにありて決して不眞を語るにわらず、又永遠刑罰に就ての信仰の如何を語らざるなり。」— P. 250.

(國點あるは余の言なり)

ドクトル、ブゼーの書は諸教父の著書を読まざる人の屢々引用する所なるが、彼が其書を作りたる方法の驚く可き例を擧ぐるは必要の事ならん、余は尙ほ一層多く添加し得べけれども今是にて止むべし、是れ聖賢の尊名を攻撃するを望まざれば只事實の之を語るに任せん。余は次に諸教父が *omnino* 等の形容詞を未來刑罰に適用したるより起る議論の全く不確實なるを示さん、凡ての事只此等の形容詞が用ひられたるの意義如何に因て定まるは多辨を要せずして明なり、當初の宇宙神教徒は決して聖書が未來刑罰に付て用ひたる *omnino* なる語を用ゆるを躊躇せざりし、然るよ是か口碑的信條を證明するとは思も寄らず、否却てシーザリアス— *Dial. III.* 及びレオンシアスの兩氏の確言に依れ

ばオリシオンと其弟子は *aionios* なる語は有限にして未來の刑罰は只一時のものなることを論議せり。——Huer. Orig. ii. p. 161. 吾人は須く自己の經驗の充分に教ゆる所の事を記憶すべし、吾人の語る所の談話文章中に在る “forever,” “eternal,” “censeless,” 等の語は純粹なる因襲的の意味を以て慣用せらるゝものにして、絶對的無終といへる思想を合むに至らざるを以て十分に之を證するを得べし、況んや其練習重に脩辭的にして其心の習慣全く非科學的なる諸教父に於ては更に然らんのみ。尙ほ明瞭に之を證せんに、恰も舊約書の預言者が創は愈へずと呼び忽ち一瞬間后には醫さん(耶卅〇十二、十七)と確言せる如く、諸教父も反對の意を斷言するが如き語を有限の意味も屢々使用せり。聖ゼロームは番二〇九を註釋してアモンの永遠なる荒廢は其改心によりて終る時あらんと説明せり、又結廿五〇四の註釋に於ても又之に同じ、ゼルサレ

ムよ就て渠は結〇二十四よ云ふ、此都は永遠の火を以てハドリアンの焼く所となりぬと、渠云へらくイスラエルは永遠の苦難に交付されたりと(歴八よて)又云へらく火焰は彼等に燃へ付て消滅せざるべしと(耶七〇廿)然るに渠は再三イスラエルの最終の救済を繰り返して確言せり(何十三、番三結十九、廿一、廿五等)渠再び云くエドムは永久の荒廢に追放せらるべしと、(結三十五)又曰くエドムと埃及の群衆は永遠の睡眠の中よ横はる(殺るべし)と、(結卅二)而して神は永遠エサウ(エドム)を怒ると、聖ゼロームハ三度繰返せり、然るにエドムは遂み改心せり(阿一)而して埃及は又恢復改心したりとして顯はされたり(結廿九)聖ゼロームの思考よ於ては、外部の闇黒には一の遁れ道あるを許し、最極の錢の拂はれて後に救は来る——(米八)否なヨナが鯨腹よ三日間幽閉せられしは是れ永遠の闇夜なりき——(拿二)又地獄(ゲヘンナ)の火は洗淨す(故に暫時



なり(翁三)聖ゼロームの書中 *eternus* (永遠)なる語が實際(暫時)の意味に用ひられしは數多の場合に於て見る所なり、斯の如き語は全く曖昧不定にしてオリジンが執拗なる罪人は永遠の火 "*eternal fire*" を以て滅亡せらるべしと確言せしにて知るべし、往古の第二シビライン書の著者吾人よ告て云く(黙二十〇十四に在る第二の死に就ての文を回想する語を以て)清淨よする爲に「地獄(ヘーデス)も萬物及び人間も熄へさる火中に投入れらると、聖アムブローズの書 *ed. Par. 1569.* に載せたる説教の著者は其聽衆をして「審判の日と地獄の熄へさる」火焰を思考せしめしが、又云く洗禮の地獄の火焰を消滅し又地獄(タータラス)を開放すと——*Ser. xxxi.* ドミヌナス云へらく永遠の刑罰に定められし者も亦救はると——*Fac, Pro def. tr. cap. iv. 4.* 又古代の著者吾人に告げて曰く「死せる蟲は死せざるなり」云。

レオ(ラー)ガスタス云く「永遠の囚虜の基督に依り地獄より放免せられたりと——*Or. vii.* ユーセビウスは殉教者を燒盡する暫時の火を稱して熄へさる火なりと呼ぶと二度に及べり *Church Hist. vi. 41.* オリヂンも己れの有限なりと信じたる火を稱して永遠なりと云ふを躊躇せざりき、渠又曰く執拗なる罪惡は永遠の火を以て消滅せらると——*Hom. xiv. in Lev. (De la Rde* なる渠の最良の編輯者亦斯く言へり)是れオリジンが *Hom. viii. in Josh.* 中に反覆したる感情なりと、又アンテオケ學派にてモブスエシヤのセオドル(オリジンの強敵)はオリジンに同意し「永遠」(*eternal*)を解釋して渠が教へたる未來の刑罰は何れの場合に在ても暫時 (*temporary*)なりと云へり、又他の例を擧ぐれば同種の慣例を見るを得べし、即ちバムフキラスの「無際限」(*limitless*)の時代及ルフ井ナスの「無限」(*Infinite*)の時代は俱に有終の義なり——*Apol. pro. Orig.* 聖ゼロームに於けるも亦

然り——*In Jon. iii.* ナシヤンザスのグレゴリーは有終のものを稱して間斷なき (*apausos*) ものと呼べり——*Adv. Jul. Or. ix.* 聖アムブロース曰く基督は永遠 (*perpetual*) の鍵より死者を解けり——*In Ps. xlii. ad fm.* 又曰く猶太人の排斥するは實に彼等の永遠の死にありと——*In Ps. cxix. 9, 10.* 而して渠は甚だ著しく悪魔と其天使の爲に準備せられし永遠の火より救はれるとを教へたり、即ちダイヴスは自由にせらるべしと言へり (*詩百十九*) 而して他處に於てはダイヴスは此火の中に在りしとを明瞭に教へたり、*同書五の十七* 千六百廿二年巴里刊行エビフナスの全書中に在る或古代の著者は永遠の門、永遠の門は破壊せらるると言へり、——*In sep. Christi.* 又教父の習慣を知るには聖アサナシアスの例を擧ぐるに若くはなし、即ち同教父は聖靈に對する罪を稱して、宥免すべからずと爲し、其罰は永遠なりとせり、然れども此宥免すべからざる、又永遠の罪は

改悔すれば宥免せらるると斷言せり——*See Bingham. ii. p. 970.* 而して此卓絶なる著者が是れ古の輿論なりと言しを注意すべし、是れ甚だ重要な事實なり。

*Christus Patiens* の著者は、赦免すべからざる、羈絆より赦免せられんことを乞へり——*v. 2540.* アサナシヤスに於ても之、類似の例あり——*Rescript. ad. Lib.アレキサンドリアのクレメントは己れが後に「醫せらるべし」と云ふんとする前に之を「醫すべからず」と云ひしとあり——Strom. i. セオドレット氏の「永遠」に死は免るゝとあり——*In Zach. ix.* 而して「永遠」の凌辱は只暫時なるべしと暗示せり——*In Jer. xxiii.* 聖ヒラレーは聖ゼロームの如く謂て曰く、ヨナは「永遠」の關門より遁れたりと——*In Ps. lxxix.* 「永遠」の意義を斯く教ゆるは蓋し通例の事たりしなり、ニサの聖グレゴリーは間時を稱して無限といひ、而して其は又斷横するを得べしと云*

へり——*In Ps. ch. xiv.* 又渠は終わり始めるの間時を稱して無限といへり——*ib. ch. vii.* 渠は「第二の死」とは洗淨することなりと説明し——*De an. et. Res.* 又同書中二箇所に於て「永遠の火」は清潔に爲すものなることを明瞭に論じたり——*ib. pp. 658, 691, ed. Par. 1615.* 聖ペシルは「死に至る罪」も尙は治療すべきとを許し *In Is. iv. 4.* 而して「止むと無き」神の憤も改悔すれば則ち止むと教へたり——*In Is. i. 24.* 又教へて曰くモアブ人の「永遠」閉鎖せらる(神より)と云ふ此「永遠」とは其實暫時の義にして其他を意味するとなしと(詩六十〇八に於て)。

前條既に論せし如く聖ゼロームと地獄ゲヘナの火焰は清潔にする義なりと唱へ、ニサの聖グレゴリーも「永遠」の火を同意義に教へ、オリジンイリジニの此等の火は罪惡を消すの義なりと云ひ、聖クリゾストムは治療すべからずと云ふ語を夥多の章句に於て治療し得るものに用ひ——*In Ps. cxl. v.*

and ex.; *In Gen. vi. Hom. xxii.* 又暫時のものを以て永遠ダイエネシス(*dienekes*)と云へり

——*In Heb. ii. Hom. iv. and in Eph. iv. Hom. xiii.* 又曰くソドムを破壊せし火は(即ち聖ジュダの永遠の火)恩惠的なりと——(詩百十一)此教父の書中に在る古代の説教中にも同様の語句あり例へば眠らざる——即ち死せざる蟲の死すると言へる如し——*In Thid. Res.* 或古代の詩篇(聖ゼロームの書中に在る)の註釋者は惡人より其改心を刪去りて永遠イテネナと言へり、ブルデンシヤス氏は磔架の時に起りたる暫時の闇黒を永遠イテネナと呼び——*Hymn. ix.* 又殉教者の幽囚を永遠と言へり——*Hymn. ad Vincen.* 此他例證枚舉に違わらず、然れども單に *aiouios* の如き語を使用するに依りて尙は通常無終刑罰を維持せんとする議論の完く荒唐無稽なるを示すには既に十分の證據を挙げたり、若し其れ「永遠」は有限として、醫治すべからざるは醫治すべく、死せざる蟲は實際死し、地獄ゲヘナは洗

淨するの義なりとせば、單に斯る語の使用に據て文字通り終り無き刑罰を助る證據を建てんとするも豈に無益ならずや。

カノン、フハーラー氏はドクトル、ワッツ氏、詩人ヤンク氏及びゼレミー、テ  
ーロア氏の如き記者等の恐怖すべき威嚇をらも到底文字通りに脅迫し  
能はざるを知るべき好理由を述べたり——*Mercy and Judgment*, pp. 275-6, 401. 余は  
更に風強なる一例を左に擧ぐん即ちドクトル、ボルチット氏は其著書 *De statu*  
*moris*, p. 366. に一層大なる希望を教べし後左の如き深味の語を述べたり  
「痴等の胸中にある此刑罰に據るの説は如何にあるとも、即ち永遠なりとも  
或は否らざるとも恒に人民に伴ふべし、而して人民に説教せんとする  
時は人民が之を了會する意味を用て既に了會せられたる教義、了會せら  
れたる言語を用ふべし」と。

以上の議論は諸教父が無終刑罰を教ゆる證據として引用されたる夥  
多の章句を充分解明するに足るべし、即ち是等の諸章句に余が彼等諸

教父を殆んど宇宙神教徒として要求するに足るべきものあるなり、若  
し夫れ此の説明を容るゝに確乎たる章句の不足するあらば、余は直に  
夫の十分明白に正統なる、且つ大希望の如き疑問に殊更に適當された  
る隱匿教義を擧ぐべし、是れ本件を調節し此教義を其正當の限界に迄  
で壓迫するを避くるを得べし、何となれば何人にも此主義を採るも  
のは始終宇宙神教を表面に拒否するも内密に之を信すべければなり、  
然れども余は唯所謂撞着の場合に於て之を適用するのみ、即ち同一の  
教父が大希望説を採る如く見えて之に矛盾せる場合に適用するの  
み、是れ余が彼等を宇宙神教徒として要求する所以なり、如何となれば  
如何なる他の見解も此凡ての事實を能く説明し得ざればなり、故に余  
は不得已左の簡單なる規則を教父の真正なる意義に就ての公平なる  
試験として定むるに至れり、即ち彼等が宇宙神教の眞理に於ける強固

なる確信を除くの外如何なる他の推測も、宇宙神教ユニヴェルサルリストの教義を説明するを得ず、又彼等の用ひし言語の最多若くは全体の曖昧なる文字に付加して罪人を恐怖せしめんとの願望と隱匿教義とは、容易に吾人が教父の或者に於て發見する外見的若くは眞實的の撞着を説明するを得べし。

余は此等記者の通常用ゆる方法は公平なる批評の各規則を破るが如しとの語を以て之を總括せんと欲す、畢竟其實際を考ふれば渠輩の書中より單に一要素を執りて之を誤解するも職由せずんばならず、即ち若し *Uozios* アイナニナス 或は之に類似の語を未來刑罰に適用するとあれば淺薄なる記者は直に無終の罪と苦難とを教ゆる者と附會するに因る、然れども(一)是れ最緊要の主旨を怠り、頗る屢々著者の語調と全般の傾向を忘却するに歸す、又次(二)彼等は如斯き語を以て嚴重極端の意味にて用

ひらると假定するに由るものにして、吾人の見る所に據れば是れ確に然らず又常に然らざるなり、公然たる宇宙神教徒は斯の如き語を用ゆるを躊躇せざるなり、又(三)是れ最緊要なる隱匿教義を採用せざるに依る(四)而して大希望説に同感を表するか若くは之を信ずとするの外他に説明を許さざる夥多の教父に於て間接直接の證據の夥しく存在するを知らざるに由る、是れ今余が証せんと欲する處なり、然れども其証據たる頗る夥多にして一卷の書冊を滿すに足るべきものなれば數葉の紙面に縮載せんには證據の勢力を殺ぐの恐あるとを前言せざるべからず、借余の引證せんとする所のもの左の如し(イ)害惡の永遠不窮と全く調和すべからざる思想の主意と語調を示すと(ロ)公平なる推論に依て(ニ)又は直接の記録に依て大希望を含蓄すると(三)墮落したる各靈魂の恢復を數々教へたと。

先第一に古代の或記者は悪人の終に寂滅アンナイレシオンに至るの説を採りたるが如しとの事實は之を拒否するの無益なるを注意すべし、クレメンヌローマナスは義人のみに復活を限りしが如し、渠問て曰く「万物の製造者が若し彼に神聖に事へし者を復活せしむるとせば吾人は之を奇異と考ふべきか」と——*Ch. XXVI.* 又其第一章の章句を比較すべし——偽造パルナバ書紀元百廿年は寂滅説を教ゆる者の如し即ち其最緊要の章句に廿一章曰く「悪人は悪人と共に滅死すべし」と、是れ明亮に存在の停止を謂ふ、又イグナシヤスの書翰中——*Ad Smyr. ch. vii. : Ad Trall. ch. ix. —*及び聖ポリカールプに於ては——*Ad Phil. ch. ii. and v. —*渠等は獨り義人のみ復活すと思惟せし事を指示すべき章句あり、*The Didache ton Apostolon*は力を盡して世界終局論エスカトロジを論じ、單に義人のみ復活すべきを語りしが如し、是れ恐らくヘルマスの教へし所ならん——*Lib. iii. Simil. vi. v. ii-3.*

*Simil. viii. vv. 54, 59, 63, 68, 69, 69, 69, &c. — ed. Glasg. : 1884.* 殉教者ヂヤステンも亦殆んど此説を採れり、其用語矛盾なしと云ひ難きも彼が悪人の運命に適用せる語は其最終の消滅を指すもの、如し、渠曰く「神は世界の滅亡を遷延せり、此滅亡に依て悪天使、魔鬼及人間は其存在を止むべし」と——*Second Apol. ch. vii.* 「神に價値ありと見ゆる或者は決して死せず、其他の者は神が彼等の存在を好む間罰せらる」と——*Dial. ch. v.* 又曰く「靈魂は死し又罰せらる」靈魂は神が之を生活せしめんと欲すれば生命を得るなり、然らば神が之を生活せしむるを欲せざる時は生命を受る能わざるべし——*ib. ch. vi.* 斷篇(Euseb. Hist. Eccl. vi. 26. 27.)も亦同説を有するが如し、アイレニアスも亦寂滅を教へたり、渠が人間の靈魂と精神に天然的不滅を歸することは眞なり——*Adv. her. lib. v. ch. 4, 7, 13. —*是れ恐く肉躰の死する後にも生殘るものとしたるならん、何となれば他所

に於て彼は善惡の最終寂滅を含む方法を以て論じたる事あればなり、即ち靈魂と精神と「神の欲する間持續す、生命を排斥する者は永遠持續することを自ら奪ふ」ものなりと——*ib. lib. ii. ch. 34. See also the argument—lib. iii. ch. 19, ad. fin.; lib. v. ch. 2, ad. fin.; and ib. 27.*

尙最古代に在て状態的不滅の信仰の存在したりし證據はエピフナスの記載せるオリジンの語に據て知るべし——*Her. lxiiv. 10* 又惡人は最終に滅盡すべしと教へたる古代の著者中にホルモゼネスを附加せざるべからず——*Neander. Eccles. Hist. ii. p. 350.* 余はセオドレットがホルモゼネスは(ニアンドルの引用に依る)凡ての惡靈の最終に盡滅するを教へたりと附加せしとを指示すべし——*Her. Job. com. i. 19.* 而して余はアンテオケのセヲフキラダ(紀元百六十八年)も亦惡人の最終に滅盡することを固信せりと信す——*Ad. Autol. ii. ch. 26-7.* クレメントの説教は時

々矛盾を免れざれども一二の章句に於て惡人の寂滅を教たり——*Hom. iii. のアーノピヤスは紀元三百三年に在りし人にして同説を採用せし最終の著者とす、彼は Ad. gent. lib. ii. 14, 19, 31-6, &c. に於て此問題を論ぜり、其説に據れば靈魂は中間的性質を有して自然的には不滅なるにあらざれども神の思恵に依て不滅なるを得る者にして、若し之より分離せらる時は全く死すと、此説たる其行はるゝや暫時にして僅少の著者の取る所に限ると雖も又有益なるものなり、蓋し斯の如き古代に現はれたると、又無終善惡の獨斷主義は古代教義の真正なる代表者たるべしとの説の甚だ薄弱なるとに新鮮明晰の證據を與ふればなり、惡人寂滅説は基督の時代及び其後に於る或猶太教法師の教義なるを見るべし、若し夫れ獨斷的考察にして實に判断を誤るとなくんば、此古代教義の著名なる形象の存在に關し一の疑を存せざるべしと信するなり。*

今余は古代の宇宙神教ユニヴァーサルリズムを賛助する直接間接の證據の一部分(紙數に限りあればなり)のみを掲載せんと欲す、第一の證據は基督の陰府ハドに降りると云ふ頗る著明なる教説より引用すべし、以前此證據に引用せし經句の數は甚だ多くして、舊約書よりは以賽亞九章二節、四十五章二節、三節、四十九章九節、廿五節、撒加利亞九章十一節、十二節、詩篇六十八章十八節、六十九章三十三節、百七章十六節、新約全書よりは、舊に聖彼得の名言、彼得前書三章廿一節のみならず、又聖馬太傳十二章廿九節、腓立比書二章九節、十節、哥羅西書二章十五節、以弗所書四章八節、九節を引證したり。最も驚くべき事は此教説が古代に在て一般に採用せられ、今日に在て一般に是れ殆んど總ての注解者の取る所となりしも、當代流行の神學には入らざりき、顧慮するものなき相違あり、然れども此矛盾は頗る教訓となる者なり、則ち之を説明すれば死者に對し又生活中直接の説

教に違背及び其儘死せしものにもせし者にも一層多く福音を説きし事は自然に口碑的信條を打殺する如く感せられし事なり、吾人の爲には此教義は最多の利益ある者にして、就中吾人が凡ての靈魂は基督に依て陰府ハドより赦免せらるゝて、古代より廣く行はれたる信仰に注目するものにして、到底之を拒否すべからざるなり、若し凡ての死者が一人も洩れなく耶蘇基督の説教に依て救はるゝならば、夫の卓越なる一記者の精密に言し如く、降生後は生活せし者は降生前に生活せしものより一層悪しかるべしと假定せるは全く愚昧オロチなりと論すべし、勿論余は此説の何所にも行はれたりと謂はず、又此説を採る著者は皆宇宙神教ユニヴァーサルリズム徒たりしと謂ふにわらず、只此教義が論理上宇宙神教を包含するとを示せば吾人の議論の爲めに以て足れりとすべし。

\* 猶太人及古代の基督教徒は、凡て死者の靈は共同の寓所(Sheol—Hades—opud inferos)



に在りしと教へたるが如し、但し義人と不義人と處を異にせしのみ。——*Enchiridion*,  
*De animæ Iv.*; *Origen*, *Hom. ii. in lib. reg.*; &c.

此教義を記したる最古の書籍はニコデマスの福音書(恐らく第二世紀)とす。勿論此小説の吾人に語る證據は彼天路歷程の證據に及ばず、然れども恰も吾人は夫のバンヤン氏の大譬喩より第十七世紀に於る清教徒の基督教生活の概念の如何なる者なるかを甚だ安全に推度し得るが如く、此ニコデマスの福音より第二世紀の基督教徒が基督の陰府に降りし事と就き如何なる概念を造りしかを安全に推度し得可し。——*Sales Mundi*. 此話は恰も戯曲の如し大喝一聲陰府に徹して反響するあり曰く、汝開門よ汝の頭を擧げよ、榮光の王入來るべしと、此時黃銅の門直に破壊し囚虜悉く出づ、陰府(人)に擬して(喚呼して云く)死者一人だも吾も残るなしと、其時耶穌アダムに向ひ右手を延て之を上げ、然る后殘

余の者に告て曰く、彼(アダム)が觸れたる樹に依て死せしものは皆吾と共に來れ、蓋し見よ (See also ch. vi. vii., *Latin version* (and a contradictory passage ch. ix., *2nd Latin vers.*), ed. *Edin.*, 1870.) 十字架の木を以て吾汝等を悉く引上くべければなりと、吾人は又所謂古代の使徒行傳にトーマスが基督と對話するを見るべし、曰く各被造物の救主よ、爾は陰府にさへ下りて多年其處に幽閉せられし者を携ひ來れりと、是より先き同事實を記載せしものあり、是れユーセビウスがエデサの記録貯藏所にて發見したる者にして、基督が陰府に降り死者を引上ぐる事を載せたり、オリジンは詩篇第六十八篇十八節に記して云く、基督は陰府の幽閉所に俘囚と爲りし靈魂を曳き上げて放免せりと、次に多分亞歷山亞のユーセビウスの爲せし面白き一説教を引用せん(紀元二百八十九年)

(此説は希臘教父には殆んど固有なり、或記者は使徒も亦陰府に於て説教せ

しを教の (c. 9, CLEMENT—Strom. ii. p. 379; and vi. p. 637. Col. 1688: HERMAS, III. ix. 156) 或人曰く祝福を受けたる處女も亦同事を爲せりと又曰くシメオンは基督の前に陰府に至りしと——PHOTIUS—*ide* Leo. AIT. エピフオニアスの書中に在る右代の著書は天使の長カマリエル及びマイケルに就て同様の事を確言せり——*In sep. Christi*——此奇妙なる説教は閱讀の價値あり

渠の洗禮バプテスマの約翰が陰府に於て基督の降臨を宣告したりと想像せり——(*Hom. xiii.*) 他の説教に曰く「基督は地上に在る者天上に在る者陰府に在るものを悉く救はん爲に下るべし」と (*Hom. xii.*) 紀元三百五十年シ「ザリアのユッセビヤスは左の如く記せり「基督は凡ての者の救済を心勞し永遠の關門を破壊し死の鍵に繋がれたる死者を生活に復すの道を開きたり」と——(*Dem. euan. iv. 12.*) 聖アサナシアスの作に係ると稱する一論文あり——(實に甚だ古きもの)——(*De pnsa. et cruce Dom.*) 曰く「惡

魔は一人を殺さんと欲する時凡ての者は奉はれ陰府より逐出され門側に座し凡て禁錮せられし者が教主の勇氣に依て導き出さるゝを見らんと確實真正なる論文に於て此教父は基督が陰府に拘留せられたる靈魂の禁錮を解さしとを語れり——(*De Inc. Christi.*) 次に(多分セルシヤのペシルの作なる)古代の説教を引かん云く「見るべき墳墓基督の墳墓を指す即ち渠の昇天によりて空虚となりたる者に起りし事は同じく見るべからざる陰府にも起るべし」と——*In Sanc. Pascha. (apud ATHANAS. ed. Col. 1686.)* 紀元三百五十四年聖ヒラレー曰く「基督は高きに登り惡魔に捕へられしものを取れり」——(*In Ps. lxxviii. 18.*) 紀元三百六十年エム、エフ、ヅ、井クトリナス云く「教主は各靈魂を自由にせん爲に十字架の苦難に依て陰府を降りし」と——(*In Eph. ch. iv.*) 紀元三百七十年デイデイマスの反譯又は註釋なる聖アムブローズの——

De Spir. Sancto. に左の語あり。凡ての者皆放免せらるゝに因り一人も俘虜として残る者なし。主の苦難の時に於て彼獨り(惡魔)傷ハレ、其保管せし凡ての俘虜を失へり」と。紀元三百七十年聖ペシルは此一般の自由を教へたるが如し、渠云く「真正の牧羊者は渠が其爲に死したる羊を陰府の禁錮より出し、聖天使に交付せり」と——(In Ps. xlix. 14) 然れども基督は凡ての者の爲に死せり、聖エフレム(サイラス)は凡ての者の陰府より自由にせらるゝことを教たり、(尙ほ此章中渠に就ての註解を見る可し) 紀元三百八十五年ナジアンザスの聖グレゴリーより下の句を引用せん、基督が其血を以て地獄の鍵の下に呻吟せる凡ての者を解く迄云々——(Carm. xxxv. v. 9. ed. Lyons, 1840. 此教父の書中、通常著明なる詩を載せたり、名で(CHRISTUS PATIENS)と稱す、是れ古代の者よして其作者詳かならず、又基督の陰府に下るとに就て云く、爾ハ凡ての者(死者)を

陰府よりの掠奪品として携へ來らん——(v. 1391-2. 又曰く、余は信す爾は陰府に幽閉せられたる死者を悉く其處より携へ來るべし)——(ib. v. 1394) 紀元三百七十五年聖アムブロース曰く「主の冥土に降れり是れ冥土に在る者を永遠の俘囚より免れしめん爲めなり」——(Ennar. in Ps. xlix) 見るべし爰も永遠の俘囚とは實に一時のものなることを、其他聖アムブロース曰く「基督の死者中にあるや、死の法則を破壊して冥土に在る者に赦免を與へたり」と——(De Incarn. ch. v.) 聖アムブロシウス曰く「其語勢甚強し、曰く基督は冥土に降り死を罰し、死の保持せし者を奪ひ取れり」——(In 1 Tim. ii. 6, 7) 基督は凡ての者を陰府より奪ひ去れり、惡魔は基督と共に自ら保ちし凡ての者を失へり、(In Rom. iii. 22-4. 次の證據は古代の論文なり、聖アムブロースの著と誤認せられし者云く「基督は地獄の底より下りて罪惡を圍まれたる

る靈魂を惡鬼の腮より召還して生命に復らしむ」と、其前後の文勢は凡ての罪人の救済を含むものゝ如し——(De myst. Pasch.)次に古代の一記者(トリンのマキシマスならん乎)の語を引用せん、其説教に載せて聖アムブロシウスの著書中に在り——(Ed. Paris, 1569.)曰く「地獄は其含有する者を上層の世界に譲り地は其埋歿せし者を天に遣れり」と——(Serm. III.)紀元三百七十八年聖ゼロームは同事實に明證を與へたり「吾人の主は下り禁錮せられし凡ての者を自由にせんが爲め永遠の關門内を幽閉せられたり」——(In Jon. II. 6.)「爾の苦難の血を以て」爾は地獄の囹圄中に繋留せられし者を自由に爲せり——(亞九〇二に於て)前後の文意に於て聖ゼロームはダイグスが此囹圄中に繋留せられしとを斷定するを見るべし、此引證たる彼の説は於て基督が「大灣」<sup>シナイ山</sup>を渡るべしと云ふ事なり、實に次に引用する語は明かに斯く言ふが如し「主は囚徒を赦免せ

ん爲め刑罰と苦難の場所に下れり、其場處には富人ありたり——(賽十四〇七に於て)此凡ての者を赦免するとは聖ゼロームの書中も載せたる古代の一文書に於て教へらる、是れ恐らくアイレスのシーザリアスの書記せしものならん——(Ed. Paris, 1623.)「地獄の永遠の闇夜の基督の下るとき光り輝き、墮落者の羈絆は潰裂離散し、呻吟の聲頼に静まり、囚虜たる靈魂羈絆を脱し地獄より出て、即ち使徒の語の眞なるを知るべし、曰く耶穌の名に於て天に在り地に在り及び地下に在る万物悉く其膝を屈す——(De Res. Dom.)視よ永遠の夜は只一時たるに過ぎず、以上に記する所は昔時の教義の標本として讀むべきの價值あり、エビフ、ニヤスの書中千六百廿二年巴里刊行に古代の説教を載す、曰く「基督は恰も疾く翔る鷹の如く、渠が最初より有せし凡ての者を惡魔より奪ひ去り惡魔をして空しく跡に残らしむ」——(In Assump. Christi.)又他の説教に「基

督起て陰府の囹圄空虚となれりと斷言せり——(In Pas. Christe.) 次は紀元三百九十八年聖クリゾストムの證據を擧げん(尙此師父の證據は次章に引用すべし)渠記して曰く「悪魔は基督を陰府に捕へたりと想像せる時其實自ら繫留せる者を悉く失へり」——(西一に於て)此師父の書中常に古昔の或る説教を載せたり、然れども其著者確實ならず、斯の種の匿名書より余は既に少許の引用を爲せしが、是れ當時基督教徒中に流行せる信仰の良證據を與ふるものなり、十字架の木は陰府に下りし者を其處より召還す——(In sacro. Pascha.) 余は地球の震動し死者の其通路を準備し耶蘇基督の凡ての者を受取るを看る——(In sanc. et magn. Par.) 又他の説教の教ふる所に據れば、基督は恐怖を装ひ悪魔を誘ひければ、悪魔は渠を人間なりと思ひて襲撃し後に敗北すべし、而して悪魔に捕へられし者は悉く赦免せらるべし——(De sanc. Trin.) 茲に叙述する全

体は頗る特異にして深意あるものなり、次に記するものは恐く一層驚くべき者ならん、地獄の火は消へ、眠りなき蟲は(死せざる蟲を指すや明白なり)死し、陰府に在りし者は悪魔の羈伴より赦さる——(In trid. Res.) 其他の證據は紀元四百一年アマセアの監督聖アステリアスなり、曰く「死は生命を呑み込み遂に疾病を醸し、以前に呑み込みし者をも吐き出す」と——(Hom. vi.) 陰府より凡ての者を悉く救出すことを一層明に教へたるは紀元四百十二年アレキサンドリアのサイリルに若く者なし、殊に渠の復活祭の説教を見よ、渠曰く「基督は陰府を掠奪し其處に悪魔を孤獨無伴侶に残らしむ」と(Hom. Pasch. vii.) 又曰く「基督は陰府にさへ降りて闇黒隠閉見るべからざる金庫を空虚となせり」と——(Glaphy in Gen. iii.) 余の見る所を以てすれば紀元四百廿四年テユリンのマキシマスも亦全一の事を教へしが如し、曰く「基督は自ら擔任する人類を天に

運び去り之を陰府の口より奪ひ取れり——*In Pent. Hom. ii.* 紀元四百三十年セラドレット曰く基督悪魔に曰へらく「我は殘余の者の爲に死の牢獄を開き獨り爾のみを幽閉すべし、爾は凡ての從屬を正に奪はれたる——*De prov. Or. x.*

次に四百三十三年聖ピーター・クリンロガスより引用せん、地獄の制度滅びて而して凡ての者赦免を得べし」(*constat de venia jam totum*)——*Ser. lxxiv. Procius.* 紀元四百三十四年コンスタンチノーブルの監督云く「今日基督は死の倉庫を全く空虚となせり——*In Dom. Pass. Or. xi.*」凡ての死者基督の苦難に驚き喜び叫んで云く「吾人は渠の苦難に依て醫されたり」と——*In Dom. Res. Or. xii.*

今や讀者は最初四世紀若くは五世紀中の最大學者を殆ど残りなく包含する以上の證據尙ほ増加するを得べし(の鍵鎖に正しく附着せる意

義を判斷するを得べし、若し余白あらば第十世紀若くは第十一世紀に至る迄新鮮の證據を與ふるは甚だ容易ならんのみ、余は宇宙神教ユニヴァーサル・リリジアンを以て斯る教義の論理的結果なりと考ふる議論に對抗すべき合理的證據あるを全く知る能はず、若し基督の其降生の時迄アダムの苗裔たる各靈魂を陰府より救ひ出すとせば、若し凡ての殺害者、神聖を瀆す者、及び犯姦者が死に臨んで尙ほ悔改せざるも終に基督の爲に福音を傳へられ救はれしとせば、吾人々類の半数は自己の過失に由るに非ず、只降生後に生れし爲め、之と異なる半数よりも思慮を受くると更に少し、と云ふ事は如何なる理由を以て公平若くは合理的に確定するを得べきや、救濟即ち數百万の不死の精靈の最終の救濟又ハ墮落は果して年代記的問題なるや、此題意を研究する者の夫の口碑派に於ける著述家の意味ある緘黙より自から推度を爲すべし、例へばドクトル、ブゼーの如き

は此種の問題を避けたり、余は近代に至りて此真に原始的且聖書的な教義の實際上消滅したる甚だ驚くべき事實を既に観察せり、而して今茲にホイチアの美麗なる詩句を以て之を約言せん、

"Still Thy love, O Christ arisen,

オー基督立り尚ほ爾の愛は

Yearns to reach those souls in prison :

牢獄に在る靈魂に達せんを欲し

Through all depths of sin and loss,

罪と苦の深さを貫き

Drops the plummet of Thy cross;

爾の十字架の測量鉛を垂る

Never yet abyss was found

されど深淵は其十字架の測り得ざる

Deeper than that Cross could sound."

ほかに深がるべし

昔時の宇宙神教ユニバーサルの爲に一層直接なる證據を論ずるに先ち、茲に數多の教父の著書中重要なる原素、即ち其害惡の問題に對する態度を掲ぐべし、抑も諸教父の當時麻尼希安マニハ教派の駁撃に迫られて此問題を熟考するの止を得ざるに至れり、彼等の此難問に答ふる所甚だ重要にして、屢

々其要點を證するに當り總ての害惡の必ず停止するの日あるを以てし、然らざれば害惡なる者は虛無たるに過ぎずと確定せり、夫のオーガスチンすらも害惡の最終の消滅を指すが如き承諾を爲すの止を得ざるに出でたり、大論理家にして自ら設けたる係蹄ワナに陥りたるは誠に奇觀と謂ふべきか、渠自身的前提より來る避くべからざる結論、即ち害惡の最後の絶滅に反して如何なる爭論を爲すも到底無益なるが如し、渠の固守する所は害惡は漸く寡少に趣き、寡少は終に絶對的無有と歸すと云ふよりあり、其議論は—— *Cont. Sec. ii. xv.* 及び其前後の文又 *The De Mor. Martel. ii. 2.* 等に就て見るを得べし、勿論オーガスチンは害惡の絶滅を拒否するや疑なし、只余の論點は渠の否定は渠の自説と矛盾すと云ふにあり、紀元二百七十五年アークラウスとメーレンスとの爭論に於けるも亦た然り、是れ或は真正ならざるべしと雖も頗る古代の事にし

て寛大なる側面より述べて曰く「凡そ死は其始を有するを以て又其終を有す」と——*On. xxix.* 昔時の註釋家聖ゼロームの書中より羅馬書八章廿節に就て云く「虚空なる者の或時終りに歸するものなり」と又聖アムブロシウス曰く「悪魔は何者たるにせよ永久と本質を有し能はざる虚無なり」と——*De Jacob. ii. 5.* ニサの聖ゲンゴリーも亦屢々害惡の非永久論を唱へたり。

余はアサナシアスの友人セラピオンより同説の章句を數葉の後に引用すべし、此章に引用せるポストラのタイタスも同説を教へたり、以上引用せる章句は害惡の永存を教ふる信條に對し是否を決定すべきものゝ如し、余は口碑的信條を以て薄く扮装せる二元論と稱せんと欲す、思慮深き讀者は其麻尼希安異端と著しく和合するを見るべし、是れ即ち害惡の永久を教ゆる重要な事實よ於て兩者相符合すればなり。

既に述べたる議論は間接なれども又重要なるが如し、之よ加ふるに昔時の教義を表明する者として左の疑なき事實を以てすべし、則ち古墳中に發見したる最古の基督教思想を表現する者を見れば、百事明瞭にして快活なり、奢靡主義は夢にだもなく、憂愁鬱悶を指示する形象なく、彼の十字架はへちあるなく、爛熳たる花卉、羽ある産土神ウナスナガミ及び小兒の遊戯する圖等は當時流行の脩飾品たりき。

余は今諸教父の書中に充滿して宇宙神教ユニヴァルサルイズムを贊助する一層直接なる證據を示さんとす、凡ての基督教著述家中にて最も古きクレメンヌス(ローマナス)は殆んど聖馬可の福音書に等しき長文の一書を吾人に殘せり、書中三章は復活の事を記せしむ一行たる口碑的信條を援くる事を記せざるなり、但しこれは重要なるも只消極的證據たるは過ぎず、然るにルフェナス氏の一章句あり——*Ino. in Hier. lib. i. prop. fin.*——是れも吾人は



クレメントが他の諸教父と共に大希望の信者たりし事を推度するを得べし、吾人は既に往昔の *Didache ton Apostolon* が無終刑罰に就き寂として一言も論及するとなきを述べたり、若し第二世紀の中頃に出でたるダイオグチタスの驚くべき書翰を繕かば著者が神は常に怒るとなかりき、怒るとなし、又怒るとなかるべき者なりと叙述せしを見るべし。— *ch. viii*. 渠は「永遠」(aeonian)の火を「無終」に非ず只「一の終期」迄の譴責なりと叙述せり。 (*Mechritelous*)—*ch. x*.

使徒時代後數年間基督教思想の記録至て乏しと雖も吾人は間接に此闕乏を充すを得べし、紀元二百九十四年殉教者バムフレラスはユウセピアスと會合してオリジンの爲に辨解書を著ししかども殆ど全く消失せり、然れども吾人は其書中記載の事項に就き甚だ貴重なる報告を有せり、昔時二人の匿名記者あり、此等の證する所に據れば右の辨解書

は回復説及び先在説を辨護するに於てオリジンより一層古き諸教父の數多の證據を含有せりと云ふに於て二者相符合せしとは疑ふべき道理なきが如し。— *ROUTH, Rel. aeo. iii. p. 498*. 扱てオリジンは聖約翰の死后殆ど九十年を経て生れたれば、此等の夥多なる證據は使徒時代に密接し或り全く使徒時代まで此等の教義を引戻せしならん、加之ならずアンシラのドミシアナスの第六世紀に於る著書は後章に引用すれども實に甚だ確實なり、渠はオリジン生存の前後に於て斯る教義の普及せしとを確定するが如し、是れ頗る重要な説なり、此證據の外既に示したるクレメントに關する章句を加へざるべからず、實に第二世紀最初四分の三に於て古記録の非常に乏しかりしを考ふる時は、吾人が宇宙神教教義の極めて古き事に就き、既引證せる如き屈強の證據を有するは、深く感謝すべき所なり。

吾人は紀元百九十年アレキサンドリアのクレメントと共に基督教歴史の充分なる日光に沐浴すと謂ふ可きなり、渠は同府問答學校の長にして又恐らく基督教哲學の創立者と稱するを得べし、余はアレキサンドリアの大學校に就ては竟に記述せざるべしと雖ども、只(イ)其創立の如何に古きか(ロ)百五十年間實際上一の競争者なく存在して基督教思想を醗酵せしめたる勢力の如何に弘く蔓延せしか、又(ハ)回復説の爲に如何に其勢力を振ひしかを視るべし、クレメントに就ては渠の使徒時代に近き事、自ら使徒の弟子より學びし事を語れり——*Strom. lib. ii.* 渠の博學多識なる、又同情同感の精神は相共に其教義に特別の重量を與ふるものなり、若し諸教父中恐嚇主義に訴へし者ありとするも、それは實に僅なるべく、加之クレメントに於る如く神の刑罰に於ても皆等しく神の慈悲を詳説せり、博學なるデリアス曰くクレメントは神が人間に

課する諸刑罰たる平安を増すものにして、只改善の爲に執行せらるゝものなりと思惟せるや著明なりと——*De usu Pat.* クレメント氏の最上の編輯者ボッターも又ゲリツキ氏も斯く言へり——*De schol. Alex.* 余は尙ほ左に引用せん、

「凡ての人の基督の者なり、或者は渠を知るに依て然り、其他の者は未だなり、渠は救世主なり、只或者(のみ)の教主にして爾余の者の教主に非ずと云ふは非なり、渠は實に万人の教主なり、如何となれば若し渠が凡ての者の主たり教主たらずんば奚ぞ主たり教主たるを得んや、然れども渠は實に信する者の教主たり、信せざる者は就きても渠は主たり、渠に懺悔し得るに至る迄、彼等ハ渠に依り(彼等の状態に)適當なる恩恵を得べし、渠は父の意志に依て凡ての人の救済を指揮も、蓋し万物は宇宙救済の既を以て宇宙の主より一般に一部分さに於て命せられたればなり、然れども必要なる匡正は從屬天使の(媒介に依り)種々の先天の審判を通じ最終(Paulone)審判を経て、大監視

審判官の功に依りて、一層改悔を離くなりし者すらも改悔せしむるに至る  
 — Strom. lib. vii. pp. 702-6, Cologne, 1688. 此等の語に據て見れば總ての人(執拗な  
 る者にて)の遂に回復せらるゝ事を教ゆるが如し、即ち(イ)匡正に依り(ロ)球  
 は天使の奉使に依り(ハ)以前の審判に依り(ニ)最終の審判に據るなり、渠曰く  
 善惡は更に嚴刻なる譴責に依て假令へ好まざるも改悔に移さるべし、  
 Strom. vi. 「幸福は間斷なき光を爲りたり、宇宙を横切る正義の太陽は等しく  
 總ての人間に逶達を、天父は他に譲り難き遺産を吾人に與へ、渠の法則を吾  
 人の心中に記載す、渠が斯く記載せしものは如何なる法則ぞ、人は凡て小  
 り大に至る迄神を知るべき、夫れ人の群(人間)を救ふは常に神の目的なり」  
 Adm. ad gent. p. 71. 刑罰の企に就てクレメントの教ふる所は大希望の精神を以  
 て理會すべし、神の「譴責」被衣の下に救済を行ひつゝ、巧妙なる救助法に隠  
 蔽せられたる警誡なり」— Ped. lib. 1. ch. ix. p. 128. 而して又テツヰツドハ甚だ  
 明瞭に神の威嚇の動機を演へたり(云々)渠(神)彼等を殺せし時彼等ハ渠を求  
 めて渠に歸せり」— Ib. p. 126. 申命記三十二章二十三節より五節迄則ち神が

滅亡に就き甚だ烈しき威嚇を用ひし所を註釋するに當り、クレメント曰く  
 神の性質は憤怒に非ず之を去るも甚だ遠し、只だ吾人が罪を犯さる爲め  
 に吾人を恐怖せしむるは絶妙の手段なり」— Ib. ch. viii. p. 116. クレメントの  
 教旨ハ蓋し如此なるべし、神は凡ての人を救ふべき決心を以て宇宙を訓練  
 せつゝあり、人若し救済の使命に不従順なる時は譴責と刑罰とを以て早晚  
 凡ての人を改悔するに至らしむ、彼曰く「斯くして基督は凡ての人を救ふ、渠  
 ハ或者を刑罰に依て改化し、彼に従ふ他の者と自己の意志に依て改化せし  
 む、天に在る者、地に在る者、地の下に在る者、各々其膝を渠に風むべし、即ち渠  
 の來りし前此死すべき生活を過去りし靈魂、人、及び天使是なり」— Ep. 1. S. John.  
 余は茲にクレメントが多數の教父と等しく死其者(單に正しき者の死のみ  
 ならず)を以て罪惡を醫する爲めに設る準備なりと思惟せしが如き事を指  
 示せん、彼確定して曰く「何人にも不治の善惡に沈みし時若し死に處  
 せられなば其人の爲に利益ならん」— Strom. 1. p. 363. クレメント、ソドムに就  
 き記して曰く「ソドム人に來りし正しき復讐は人の爲に善く計算せられた

る教の撰範を爲りたり」—*Paul. iii. ch. vii.* 茲にクレメントより尙ほ早き記者にして興味多き者あり、紀元百七十七年に出でたるアセナゴラス是れなり。

彼れハ未來の審判を説きしが何處にも無終刑罰を示せしとなし、彼が復活に就ての觀念は之を以て人の理性の冠冕及完全と爲すが如し、若し夫れ是れが(復活)起るならば人性に適當なる結果亦之に續ぐべし—*E. H. H.* 彼は未來の身体は苦惱を受けず—*ibid.* 而して復活は一層善良なる者に變化する事なりと言へり(何れの場合に於ても明瞭に)—*oh. ch. iii.* アセナゴラスは世に知られざるも一層著名なる大家にも屢々缺く所ある恩愛と勇氣とを有したる記者なり。

尙ほ古昔教義の例證を一斷片に依て示さん、其發見者たるプファツフ氏は之をアイレニアスの作と爲せども頗る古代のものたるや確實なり、基督は各物の害惡を廢棄し再び萬物を調和せんが爲め時期の終末に

於て來るべし、即ち凡ての不潔の終る時あらん—*Frag. iv.* 是等の語、明に一層大なる希望を言顯はす者なり。古代の教會に宇宙神教教説の流行せし證據は所謂サイドライン(*Sidonius*)の書より引用するを得べし、此書は(基督教時代に先だつ或部分を除き)第二世紀と其次世紀の種々の時期に於て數多の著者より編成せられしものなり、此等の書は當時流行の信仰に就き最も貴重なる證據を吾人に與ふる者にして、當時の人と吾人近代の概念との相異甚だしきを見るに足るべし、其一は於ては世の終に就き甚だ驚くべき形象を描出せり、萬物の(地獄すらも)清淨にせられん爲め神火の中に鎔解せられ、凡て正も不正も消へざる大中を通過し、不正は尙ほ地獄に交付せられ、破るべからざる鏈鎖を以て束縛せられ、神に祈るも功驗なし、然れども此等の全く失はれし如く見ゆる人も、終に正義の要求に於て救はるべし。

に至る、彼等は不滅なる永遠の生命に入る爲め他所に遷さるべし」と  
 — Lib. ii. v. 195-340. 尙ほ他の章句 — Lib. viii. 412. は一般の清淨を教ふるが如し、此等の句節は恐らく第二世紀に屬する者ならん、其文たる如何なる情操をも顯すと甚だ稀にして、世界の結局の描畫實に恐るべし、夫れ慈母の懷に抱かれたる小兒も消へざる猛火を見て絶叫するに至る、然らば慈悲の最後に勝利を得ることを發見するは實に重要な事ならずや、サイビル斷言すらく墮落者と雖も其苦惱は終りあるべし」と —  
 FABRICI, Bibl. grec. i. p. 203. (ヲブソポピアス、ムサーダス、ガレアス等も又斯く云へり) 是より吾人は摩西モセの默示録(一部分は恐らく甚だ古代のものならん)に於て神が悪魔に左の如く告ぐるを見るべし、曰く、汝が邪惡に依て誘惑したる凡ての者の耳も羽翼も四肢も汝に與へざるべし」と、若し第一の例證をアダム及びイブなりとするも、尙ほ此等の語の趣旨

と精神は全く大希望と符合する者なり、次に有名なるオリジンは紀元二百三十四年アレキサンドリアに生れ、僅に十八歳にして神學校の監督を囑托せられたる人なり、

彼哥前十五、〇廿八に記して云く、「予は父に服ふと云ふ時、全創造物の完全なる回復を含むものなり」と — De prin. iii. ch. v. 7. 又終極に就て云く、「何處にも善惡の存在せざるを見れば神は凡ての者たるべし、蓋し神は万物たればなり、死も死の刺も亦た如何なる善惡も最早全く存在せざる時實に神は万物の主たるべし」 — No. iii. ch. vi. 8.

「万物惟一の有機に於て再建せらるべし、凡ての道理的靈魂回復せらるべし」 — ch. vi. 8. 「吾人は斯く確定す、道ドクは凡ての理性(或批評家以爲らくオリジンは回復后墮落するとの可能性を教へたりと、是れ確實ならざれども彼が普及の回復を教へたるは確實なり)を渠自己に服従せしめ、

而して之を渠自己の完全に變化すべしと——*Cont. Cel. viii. 72.* 是れ凡ての基督教國に最初醜陋したる教義にして、即ち單に凡ての人間のみならず又墮落せる凡ての靈魂をも含有する回復を恐るゝとなく確定する者なり、是れ使徒時代以來英才、學識勤勉、神聖を一身に結合し、其生涯一の連綿たる祈禱にして、恐らく第一流に位する人物の教る所なり、何人もオリジンを左祖せざる者稀なり、——*HUER, Orig. p. 197.* 「人若し自己の味方にオリジンを有する時は自ら實に真理を有すと信すべし」——*DOUIN, Hist. de l'Origenisme.* 茲に簡單に記すべき三箇の要點あり(イ)此早き時代に於て大希望の弘く蔓延せし事(ロ)オリジンは屢々罪過と應報の必要とに重きを置きしと(ハ)渠は(αιωνιος)なる語を有限の刑罰を示す爲めに使用せしとは是なり。

余の考ふる所に依れば古代に於て尙ほ一の宇宙神教徒と謂ふべきなり

紀元二百五十四年聖グレゴリー(サウストルガス)とす、氏は異教の父母より生れオリジンを依て改宗し其親友及び徒弟と爲りたり。

氏はシーザリヤの監督として其熱心の信仰と夥多の(確證したる)奇跡との爲に著明なり、氏は殆んど凡ての市民を基督教に改宗せしめ、殊に氏はオリジン氏と最も親密なる關係を有せしを以て、自然大希望を教へたり、而してシーザリヤは樞要の中心たるを以て、此より順次に一大地方に萌芽を播種せしめしならん、聖グレゴリーが實に斯く教へし事は、ルフィナスの *Insc. in Hier. Lib. i. prope fm.* に於る或章句より推度するを得べし、彼の著書は今や殆んど殘る者なし。

次に紀元三百九十三年、マイルの監督にして(恐らく)殉教者たりしメソデアスの或る章句を引用せん、彼が復活を論じたる一文の抜萃はエビフニアス及フオシアスの保存する所に係る。

渠の教義は論理と宇宙神教を含有するが如し、故に渠確定するに死なる者

は人間の罪惡を滅亡せん爲めに賦與せられたり、神の此理由を以て人間を死すべき者と宣告し、而して可死性を以て之を被ひたり、是れ人をして不死の害惡たらざらしめん爲め、即ち人の害惡の無限ならざる爲め、又肉休の分解に由て下層より罪の根枝を斷絶し、再び罪惡の新芽を發生すべき最小分子だも殘留せしめざらん爲めなり。渠又莊嚴なる宮殿の石垣中に成長する無花果樹の比喻を用ひたり、即ち其石垣を保存せん爲め無花果樹は根より裂かれ終に枯死するに至れり、之と同じく建築者たる神も亦た自己の宮殿たる人が恰も一の野生無花果樹の如く罪を養成したる時は、相當の時期に死を用ひて殺し分解せり、是れ肉身は罪の枯死せし后、全く其基礎より罪を滅亡する時、恰も回復せる宮殿の如く不滅に舉げられん爲めなり。—— *Apud. Ezech., Hier. lxi. 24. 5.* 渠又曰く、若し夫れ美術家が自ら千辛万苦を費めて作りし者を全く損傷するとなからしめんを欲せば、再び肖像を回復もるときに醜貌を消滅せしめん爲め、先づ之を破壊して改造せざるべからず、蓋し若し之を再び鑄解をもるとも最初の技師家 (*Artist*) の手中に於て肖像を失ふべし。

い得べからざるなり。—— *St. 渠曰く* 鑄解の肖像に於けるは死の人に於けるが如く、充分美麗に改鑄するとは即ち人の復活なり。是れ凡て大事を小事に譬へて説明するものたるや疑なし、然れども右に引用せる如き教義は其自然の意義に於て神の肖像の失はれ能はざると、死を復活(普通)の運命は罪惡の治療を含むを明に包有するが如し。亞非利加學派は以爲らく、死は單に一の刑罰なり。東派大神學者は以爲らく、死は實際治療の方法なり。是れ驚くべき差異と謂つ可し、余はメソテイアス氏の言ひし一句を附加せん、「死は若し之を以て小兒を匡正する鞭打の如く見做せば則ち善なり。罪の(罪人)歟死に非すと。—— *渠又曰く* 神は人の凡ての罪を滅亡せん爲め死を送れり。—— *シフナシヤス氏* 確言すらく、メソテイアスは惡き思想を考ふる力さへ天然の死の存在に依り其根を斷たるを主張せり。—— *God. cockiv.* 人は神を崇拜する爲に形造せられしを以て不和を腐敗に隨る能はず。—— *Frug. I. from a Hom. on the Cross.* 神の肖像なる吾人が名譽なき者として全く滅亡せらるべし。云ふは信じ難し。—— *Frug. on Jonah.* 基督は犧牲に供せられ而して再び

擧げられたり、是れ渠は凡ての被造物に齊しく崇拜せられん爲なり、蓋し各の膝渠に風むべければなり」云々——*Of the Pains*——此論は聖クリソストムSt. Crisostomusの著作と稱せらるゝ一書中に在り。

今や吾人の討究を區分したる時代の第二期に入れりと謂ふべし、當時より紀元四百卅年若くは四百四十年に至る年代の教會史中何れの時代よりも一層多く有名なる大家輩出せり、恰も此時代に於てユニヴァーサル宇宙神教が其最も有爲なる、最も忌憚なき主張者を有せしは頗る記憶すべき事にして吾人の以下に記せんとするが如し、紀元三百十二年シーザリヤのユーセピウスは著明なるオリジン派の人にして、渠は最も明白なる態度を以てオリジンの説に従へり「三位一体論を除き」と聖ゼローム云へり——*Adv. Ruf. lib. iii.*

渠詩篇第二を註釋して曰く予が其敵を區々に破壊するは、恰も陶器師の工

事に於けるが如く、彼等を改造せん爲めなり、即ち耶十八〇六に云へるが如く彼等を再び以前の狀態に回復せん爲めなり「不信神者をもらも其の日の來らん時は偶像に關る彼等の心中の妄説を投げ棄るならん」——*In Jo. iii. 29.* 是れ普及の審判を説くに當り實に趣味ある語なり故に基督は万物(宇宙)を自身に服従せしむべし、而して此救濟的服従は予自身も万物を服従せしむる者に服従をべしと云ふに等しと考ふるを正當なりとも、然れども万物の終局の後、渠は僅少の者の中に任せずして其時天國に相當もる凡ての者の中に任すべし、渠が凡て(絶對的に *Tota Creatura*)其人民として住むべき(神の實在)神は万物に主たるべし。——*De eccles. theol. iii. 16.*

ユーセピウス氏は紀元三百十五年アンシラのマーセラス氏の著書の或る斷片を保存せり、今其一を引用せん。

「復興の時まで(徒三〇廿一)の使徒が万物完全の回復を享る時を指示せんを欲せしに非ずんば其他如何なる意義を有するや」——*Cont. Marc. ii. 4.*



次に紀元三百四十六年セラピオン氏(アサナシアス氏の友)より簡短なる一句を引用せん。渠の語は確實に害惡の最後の消滅を含有するが如し。其説に據れば害惡は單に撰擇に於て成立する者にして、實際の存在なく容易に過ぎ去りて其跡を残さざるなりと、其自体は虚空にして又自から常に存在する能はず、只消失の經過にして消失に據り存在し難きを證せらる。—*Adv. Man. ch. iv.*

余は毫も聖アサナシアスの教義を討論せんと欲するも非ず、又古代に於て宇宙神教ユニヴァーサルイズムに反對する思想學派の存在せしを拒否せんと欲するにあらず、然れども如何に考ふるもアサナシアスが此學派に屬せしとは實に思ふべからざる事なり。

(イ)茲に他義を指まが如く見ゆる疑なき證據あり、例へば博學にして廉直なるピソハム氏は聖靈に對する罪も改悔により赦免せらるべしと教へしと

を示せり、(ロ)彼はオリシオン氏を尊敬し又稱讃せしと唯に一度のみにあらず、(ハ)彼の論説 *De Incarn. V.D.*、及び *In Iud. om. nisi trad.*、中に大希望を全く一致するが如き基督の事業に就ての許多の教説あり、(ニ)陰府に降るるに就き渠の教ふる所ハ甚だ重要なり、曰く最初の時代に存在し死に依て拘留せられし世界の全人民は、之より免れて膝を屈むべし、蓋し基督は禁錮せられし者に、出で來れと語れり、然れども以前神に背き抵抗せし者も赦免せられたり、是れ彼得の示す所なり、(彼前三〇十八) — *Fragm. in verb. Laud. Dom. Dracones.* 「基督は惡魔の奪掠したる靈魂を再び奪掠せり、蓋し彼は約束して(若し吾等げられなば總ての人を吾に引かん)と云へばなり」 — *In Ps. lxxviii. 18.* (ホ)次の一節を著るべし「万物渠に服従せしときは子も亦自ら服従すべし、是れ神は万物に主たるべければなり、是れ實に然り、渠(保羅)が言ふ如く吾人は皆子に服従して渠の肢となるべし、是れ一般に基督に服従するを教ゆるが如し、即ち從順の服従なり」 — *De hom. nat. suscepta.* 又彼ハ他處に於て、万物未だ基督に服従せず、何となれば渠は猶太人には耻辱を受け、異邦人への惡礙視せらるればなり」と演べ

し後云く、凡ての創造物の雲中に於て子に違ひ渠に従ふべし、其時子も亦自ら忠義なる使徒、凡ての創造物の祭司の長として父に従ふべし、是れ神は万物に主たるべければなり。—Serm. maj. de fide. (7)終に詩九〇五の著明なる註釋を擧げん、爾諸々の國民を證め悪人をほるばしたまふ云々、證實は改正の意義なるを以て惡覺を謂ふ、此等の語ハ又最終の審判と了解するを得べし、蓋し其時罪人(Lon hamaton) — 凡ての罪人は證實せられ、正に惡き者なる惡覺は滅亡せらるればなり。— Frag. in Pa. ix.

今より聖ヒラレーの說を記さん、氏は紀元三百五十四年ボイクシアスの監督にして、オルソドックス派中最著明なる戰士の一人たり、ゼローム氏言へるあり、渠はオリジンの著書を殆んど四万行反譯せりと、以て氏のオリジンに傾くの明なるを知るべし。— Also, Ruf. i.

路十五〇四に就き渠曰く、此一正の羊は人なり而して一人は人類全体と解すべし、九十九の天使なり、而して凡て一なる吾人(人類)に依て天の教會の人

數充たさるべし、故に各被造物は神の子の示現を待てり。—(太十八)此文ハ明瞭なる意味を以て宇宙神教を教ゆ、一なる全人類ハ一正の矢はれし羊にして、善牧者に依り見出さるべき運命を有せり。又聖ヒラレー氏大希望の精神を以て詩二〇八及九を長く且つ面白く註釋せり、渠曰く基督に其所有として地球の終極を與ふるは、全く普及なる領分にして聖保羅の語を以て之を約言すべし、云く「天に在る者、地に在る者及び地の下に在るもの、各々の膝は耶穌の名に於て風めらるべし」是れなり、此万物の上に立つ主權の性質に就き聖ヒラレー言へり、基督が鉄杖を以て國民を支配するは實に善牧者の監視を謂ふ、而して「彼等を陶器師の器の如く片々に破壊す」は實に器を回復するの意を含めり、「此方法を以て神は彼等を改革せん爲め其遺存する人民を打碎き破壊すべし」、又曰く器の破壊せらる、時は「肉体死に依て分解せられ、斯く破壊せられ、工匠の意志に依て回復を成就すべし」是れ黙十九〇十五に基督列國の民を撃ち且鉄の杖を以て列國の民を「牧らん」全能の神の甚だしき怒の「醉を踐」あるに同じ、然れども是れ若し救済を謂ふ

ものなりせば、吾人の果して一層大なる希望に到達せざるか。又曰く神が罪人を殺すは彼等の改化を謂ふものなりと、爾は罪人を殺さざるべし、夫れ失はれたる者を救ひ罪人を贖はん爲に來りし者にして、奚ぞ罪人の殺されんとを(真に)祈願すべけんや、渠にして人の殺されんとを欲するが如きは決してあるとなし、只罪人は此世に於て死する時殺さるゝなり、此方法に於て罪人は殺され、其後凡ての不徳と罪惡との死亡に依り新に心靈的生活を始むるなり」*In Pa. cxxxix. 19.* 此教父の文は屢々混亂錯雜時に矛盾ありて引用し易からず(此矛盾は渠が明白なる辨偽の辨護者たる事と全く符號する一事實なり)然れども其の著書は内心に大希望を信じたる明白なる感得を余に傳ふるものなり、例へば詩十九〇三十九を註釋して云く、此作詩家は神像に肖せて造られし事實に依り、不滅なる榮光の生命を彼に約束せられしをを知れり、—又語を續て曰く、是れ不變なる眞理を備ふるものなり(何人にて然り)と、又基督の語に就ての註釋を見るべし、爾は渠に與へたる凡ての者に永遠の生命をあたへしめん爲め、總ての肉を支配する權威を彼に

與へし如く、父は万物をあたへ、子は万物を受け、又父に敬はれ(爾番に)父を尊敬し、而して總ての肉に生命の永遠を與へん爲めに其受けし權威を用ふべし、今彼等が爾を知るは永遠の生命なり」云々—*De Trin. lib. ix, p. 206-7, Part. 1652.* 心の重しき者天國に入らんとき、共に呻吟悲哀せる各被造物は腐敗の羈絆を免るべし—*In Pa. lxxv. 3.* 「地獄 (Inferni) —の寓所さへも神を讚美すべし」と彼は云へり—*ib. v. 34.*

次の證人は紀元三百六十年羅馬に於て有名なりし修辭學者エフ、エム、グキクトリナスとす(氏は基督教に改宗せり)氏は亞非利加に於て生れたるも其説は全く新プラトニク學派及其自由神學と同感を表せり、此教系の本質は凡ての靈性物皆神より出で、宇宙の道cosmos及び救主(又凡ての創造物に對し最終の一致の中心)ある基督に依り神に復歸すと云ふ)に在りて、大希望説に到る者なるや疑なし、グキクトリナスの粗莽なる拉丁語は其思想家たり神學者たる價值を正しく認むるの妨害となれ

而して基督ハ生命なり、万物は彼に依りて造られ、彼の爲に(In quem suo Plani)万物は造られたり、蓋し万物は彼に依りて清浄められ、永遠の生命に歸ればなり。—  
 Adv. Ar. lib. iii. 8. 「吾人の肉を占むるに當り、基督は肉の普通の道(Logos)の位置  
 を取れり、故に凡ての肉を救ふ、即ち以賽亞書に言へるが如し、曰て凡ての肉  
 は神の救を爾に見るべし」と、又詩篇に曰く、凡ての肉は爾に来るべし。蓋し万  
 物は一般に彼に在り——一般の靈魂及び一般の肉——而して此等は十字架上  
 に擧げられ、而して全宇宙の(道)一統(渠)に依り(道なる)生命を與ふる神に依りて  
 清められたり、蓋し彼に依りて万物は造られたればなり——(同書)ヰキクトリ  
 ナスの時代の粗漏錯亂の時期たり、然れども氏の意義は明瞭なるが如し、彼  
 曰く基督は普及、即ち一時に全宇宙にあり、而して實に造物主道(Logos)及び救  
 主——實に救主なり、何となれば思想の全列は單に可能的救済の如き觀念を  
 排斥すべかり、故に尙ほ語を添て曰く、渠ハ耶穌基督なり、何となれば渠は  
 万物の生命を救へばなり——(同書) iii. 8. 「基督は務を遂げたり、是れ永遠の光に

満ちたる肉を有する凡ての生命を復活后凡ての腐敗より脱して天に復歸  
 せしめんが爲めなり——(同書) iii. 8. 「万物は世界の末に於て靈性を爲さるべし」  
 (哥前十五〇廿八)——(同書)「世の末に万物一なるべし」——故に渠に歸  
 服したる万物ハ一なるべし、その万物は渠によりてあれ、蓋し万物異  
 なり、蓋し雖も現存せる万物は一なり、蓋し全宇宙の体は只分子の間に密着せる  
 て一體なる所の一塊の如き者にあらず、是に重に其數部相互に密着せる  
 一體にして、繼續せる鏈鎖を造れり、蓋し鏈鎖は——即ち神、耶穌基督、靈智(Spirits)  
 靈魂、天使の群及び凡て從屬せる物体是れなり——(同書) i. 25. 「ヰキクトリナス  
 以爲らく宇宙は一の有機全体に於て、神の寶座に圍抱せられ結合せられた  
 る一の活ける鏈鎖なり」と、(同書)ハ万物の主と爲され、渠は万物を生み、而し  
 て之を救ふ——(同書) 又弗一〇四を註解して曰く、斯く與義は救主に依りて  
 完成せられたり——是れ完成は万物を實に基督に依る、万物の中に成就せら  
 れ、皆運く基督に依り、又基督の中に一なるべき爲めなり。  
 ヴキクトリナスの教系は基督の神たる獨斷説と大希望説との自然の

關係を明示せり、是れ余が他處百四頁に於て主張せし所なり。  
 次に擧げんとする證人は紀元三百六十四年ポストラの監督タイタス氏なり、其著書中に亞拉比亞に於て大希望を教へし事あり、其編輯人カイラスは「當時博學なる監督中最も博學なる又最も著名なる真理の戰士なり」と彼を稱したり、聖ゼロームは彼を稱して最も多く其學識を賞讃せんか、又は聖者の智識を賞讃せんか、其取捨に苦む學者の一人なりと計へたり、尙ほタイタス氏の「オリジニズム」に就てはヒューエツトを見よ、——*Origen. ii. p. 199.* 吾人ユウセピアスより聞くに、オリジンは三度亞拉比亞に至りて教へしが、一度は慥にポストラに於て教へし事ありと云ふ——*Eccles. Hist. No. vi. 19, 33, 37.*

余は愛にタイタスが惡靈に就て述べたる驚くべき一節を摘録せん、墓穴其者は苦惱靈責の場所なり、然れども永遠にあらす、是れ畢竟罪を犯も者の覺

業を爲し又其扶助を爲さん爲め造られしのみ、罪を犯したる者に對し醫藥を爲る鞭撻ハ神靈なり、故に吾人は墓穴(地獄)——奈落——に就て不平を訴へず、寧ろ是れ罪を犯せし者を矯正せん爲めに設けたる苦惱及靈責の場所たるを知るべし——*Adv. Man. lib. 1. 32.* 斯の如き語は凡ての惡靈の救済を教ゆる如く見ゆるを以て甚だ緊要なりとす、又氏の死に於る説も甚だ緊要にして決して終らざる刑罰又は寂滅の説と全く相反せり、彼曰く死は普及にして其眞實より見れば一の恩恵なりと、實にタイタスは「若し死にして果して善惡なりとせば其責は之を命せし者(神)に正しく歸せざるを得ず」と主張せり。  
 —*ib. iii. 27.* 又曰く是れ義人の爲めに善惡として來るにあらす、又不義人の爲に復讐として來るにあらす、何となれば自然にある者は復讐たるを能はざればなり、然れども是れ一摸範として、若しくハ不治の善惡の(是)によらざれば不治の靈責として來るなり——是れ其前後の文勢及び氏の全体の語調より察するにタイタス氏の意義なりと余は信するなり、故に氏は言へり「死は法則により自然に定められし者にして、如何なる方法に於て來ることも

害惡に非ず「死は横死者(戦争にて)にハ罪の終を來し、不義者には不義の畢を告げ、又義人には榮冠の始めなり」——*S. III. 12.*「死は人を害せん爲に神より授けし者に非ず、只義者にも不義者にも最大の利益を授けんが爲めなり」——*S. III. 15.*又曰く若し死が多數の人に課せらるゝせば、是れ恰も同一の天災の個人の場合に於けるが如く且一層明瞭に神の保護を指示するものなり、蓋し「憤怒の表示により」——*te kaku to phantonon agnakelet*——(多くの死を惹起し)既に説明せる如く「死者を益し生者を改化せしむればなり」故に彼が他所に述べし如く戦争は罪の刑罰の爲なりとの想像を起すは神の許す所なり、然れども其實ハ罪を終らしめん爲めなり也。——*12.* 斯の如く彼は害惡は始あり又終ある事を教へたり——*S. III. 11. 25.* 余ハ凡て此意義を指示せんが爲め茲に猶豫するに及ばざるなり。

次には此時代に行はれしも廣く世に知られざる著者マカリウス、マクテス氏の數句を左に引用せん、

死は吾人の最初の兩親に賦與せられたり、是れ肉體の分解に依て精神(身體及び精神の)より起る凡ての罪をも全く滅亡せしめんが爲めなり——*No. 41.*

*frag. XIX.*

紀元三百七十年聖エフレム(サイラス)氏に就ては左の如く言ふを以て充分なりとす、即ち未來の刑罰は就き氏の用語は強激なりしも然かも氏は凡ての靈魂の陰府より赦免せらるゝ事を甚だ明瞭に教へたり、基督は此「死」の戦慄せるを見て陰府の最も貪慾なる腹を裂き、最初より其時まで禁錮せられし者を悉く放免せり——*Serm. XVIII. De sano. Orice. — Ed. Oailon.* 爰に引用せざるを得ざる頗る有名なる大家は紀元三百七十年ナジアンサスの聖グレゴリーにして、氏は第二大會議の會長となり、教會の最も學問隆盛なる時代の一に於て最も博學なる監督なりき、吾人は聖グレゴリーと共に第四世紀に於てカパドシヤン派に光を放

ちし甚だ著名なる數多の教師中の第一の者に來れり。

(イ)吾人は聖グレゴリーの暗示せる方針の數例を取り、彼が凡ての人の最終の救済に就き信ぜし所を少しく茲に述べん、彼の死者に就き吾人に語て曰く、神は彼等を火又は輝きたる光の享有者として生活せしめたり、然れども凡ての者も未來に於て神を享有すべきや否やに就ては他處に論すべきなり——Carm. i. v. 548. 此驚くべき説は羅旬譯中に埋没せられたり——cf. Cat. 1630. グレゴリー氏他處に於て曰く、余は又清淨に在る爲めに非ずして刑罰的なる火を知れり、何人も此場合に於ても刑罰を與ふる彼に就き一層慈悲に又一層正當に之を理會するを好むに非ずんば、火は何事よりも恐るべく、不死の蟲と結合せられ、消ゆるとなし。Orat. in Hexag. 9. 曰く、此處に於てグレゴリーの墮落者の苦痛に就き、彼等は終りなきか、又は彼等や寧ろ神の恩恵に依て或時一の終りに達すべしと考ふべきか、を疑ひしや顯然たり、グレゴリーは基督敎界に於て恐らく第一流の人物たりしが、最廣の希望を教ふるに就き一も教法的批難を知らざりしハ頗る顯者なり、加之氏が自ら之を信し

たりと考ふべき風強の理由あり(ロ)氏は基督は陰府に降りし時或者を放免せしに非ず、其所に禁錮せられし凡ての靈魂を放免せしなりと教へたり。此説は既に示せし如く論理上宇宙神教を含むものなり、退は其血に依て地獄の鏈の下に呻吟する凡ての者を釋す迄——Carm. xxxv. (ed. Lyons. 1840.)「今日救済は見ふる凡ての者を見へざる凡ての者に對し一般に及ぼされたり(今日陰府の門扉が開かれたり)——Or. xiii. (二)又グレゴリーが死ハ人の爲めに一の利益なり、何となれば恩恵として罪と刑罰とに終りを告ぐればなり、と言ひしハ有味の言なり、アダムは一の利益として死を受け(是に由り)罪を斷去りたり、是れ善惡の不滅ならざらん爲めなり、故に復讐は親切に轉化せり、是れ神の罰する所のものなりと余の思へり——Orat. xiii.「汝等聖書に於て神が惡人に對し憤怒を示し又は餌を以て恐喝する事を讀むに當り、宜しく之を正解して誤解すべからず、然らば此等の比喩を用ふるハ如何、曰く文飾として用ふるなり、如何なる方法を以てするや、曰く一層單純なる心遣を恐嚇せん爲めなり——Carm. Lamb. xli. vv. 870-85. 此等の語は他に引用したるニサの聖人

レゴリの驚く可き一文を直に想起せしむべし、即ち神の審判は懶惰者と浮華の徒に辱勝を用ふ、然れども一層聰明なる人は之を神の醫藥治療なりと信せり」——*Cat. oral. viii.* 余は斯る教を以て最も重要なりと信す、聖ペテロは亦甚だ類似の語を用ひたり、即ち神が罪人を殺すに就き、恐怖は一層單純なる者を教化すと言へり——*Quod Deid non est aucl. mat.* (三)又聖クレゴリは人類は基督の死に依て一の有機全体となされたりと論するが如し、數滴の血液全世界を新にし、凡ての人の爲めに吾人を結合一致しつゝ、恰も凝乳の乳汁に於る如き作用を爲す——*Or. xiii.* 又「基督は(地球の)極端まで其神聖なる身体を延伸して、其處より死すべき者を連れ來り是を一人に結合せり」——*Cant. iii. v. 167.* 基督は(人類の)全衆の酵母の如き者にして、又罰せられし者(或は墮落者)を渠と共に一と爲しつゝ全体を圓(墮落)より免れしむる人なり——*Or. xxxvi.* (ホ)簡短なる一詩に於て氏は新プラトニツク學說を想起せしむべき語を用ひ、就中神は萬物の極なりと言へり——*Ad Deum.* (ハ)又聖クレゴリは通俗說を辨護する如き言語を用て左の如く言へり、曰く「各物(creature)は基督に服従せ

ん、而して彼等は渠の充分なる智識(epignosis)を改造さに依て服従せらるへし、神は復興の時に於て万物に主たるへし」——*Or. xxxvi.* (ト)又此教父がノヴァジアン(異教中に死し基督の死の如くならざりし者)に就き左の如く言ひしは又正に記するに足るものあり、曰く「恐らく其處(他界)に於て彼等は火を以て「メプテズマ」を受くへし、是れ乾草の如き物を喰ひ又凡ての苦惡の輕卒を消費する最終の一層繰進一層遅延せる「メプテズマ」なり」——*Or. xxxix.* 是等の語は頗る參考すべきものなり、メタヴサス曰く「假令ひ甚だ長きも決して無終に非ざる苦痛を失迷者と異端に死せし者と共に與ふるは是を以て明なり」——*De Aug. iii. 7. § 19.*

以上引用せし諸句を合讀せば聖クレゴリノ所見に就き實に疑を容るべき所なし、然れども吾人の證據を完全ならしめん爲め尙ほ二個の證據の擧ぐべきものあり、(一)聖クレゴリの「復興」を教ふる證據は早く第六世紀に於てニウ、ローラの僧侶に依て訴へられまや確實なり——*Vit. S. Cyril. c. 10.* (二)最後に吾人はルフェナス氏の一章句を有す、氏は同時代の人にして是れより同一の



説を推知するを得べし——Inca. i, prop. fin.

次にカバドシヤ教師の名簿中著名なる二人あり、ベシル及びグレゴリ（兄弟是なり、一はシーザリヤの監督にして他はニサの監督なり、之より其姉妹聖マクリナを加ふべし、ベシル氏の幼時の教師は氏の祖母聖マクリナとす、此マクリナはオリジン氏の腹心の朋友且門人たりしグレゴリーの弟子よしして、宇宙神教徒たりしや殆んど疑なし——百十頁）斯る家族に於て大希望が同性の家庭に存すべきに當に然るべき所なり、聖マクリナ（若き）は熱心且非常の宇宙神教徒にして、其神聖なる教訓よりベシルは大に其宗教的生活を好むに至りしや確實なり、又ニサのグレゴリーが公然斷乎として同一の信條を教へしとも確實なり、余はベシルが此等の説を享有せざりしとを證せんが爲め其著書より引證すべきものあるを知る、然れども敬神的欺騙を許容し且善良なる目的の

爲めには吾人の祝福を受る主も詐欺を歸するを明に憚らざるものは、恐らく自身も斯る模型に倣はんと想ふべし、而して爰に聖ベシルより引用せんとする諸節は無終害惡の教義と到底調和す可らざるものなり。

例へば以下の語を見るべし、主より（來る）平和は始終（永遠）共に擴かる、蓋し万物渠に服従し、万物渠の統御を認むべければなり。神が万物に主たる時、反逆に依り不和を起す者は全く鎮靜せられて（万物）平和的一致を以て神を讚美するに至らん——（賽九〇六）に於て、斯る光景は唯大希望を全く符合するものなり、故に、渠ハ其敵を其足下に踏むまで統御せざる可らずと云ふに據り、万物基督の支配に服従せらるべきを以て、（豫言者）言へり、渠の寶座は回復さるべし（蓋し）渠の支配に服従せし者は回復を得べければなりと、——（賽十六〇四及五）に於て、即ち基督の支配ハ他日普及をべく、此支配は其下に來る者（渠の敵を併せて）の回復を含む、又賽二〇十七（左の如く記せり）凡ての人の

低くせらるべし」と、ペシル曰く是れ、人の各種の罪惡止むべしとの意なりと、  
「是れ審判日の結果に就き頗る著しき説なり、氏は此文に引照して第五章八節の「各合理的天性は眞の高位と偉大とを獨り神のみに屬する事を證すべし」と云ふ有味の語を附加せり、他章に於て此師父は「罪は——死まで——審判の火を要す（其治療の爲め）と教へたり、——（賽四〇四に於て）是れ記憶すべき言なり、彼の同一の精神を以て左の語を説明せり、

「吾が暴怒は吾敵の上止まざらん」（*Ou paisei nou ho humos* を讀みて）「正しき審判の善果を考へ、我が怒り止まざらん、吾は彼等を焼かん、是れ何故や、吾が清淨にせられん爲めなり、斯くして神は罪人に利益を與へん爲めに怒れり」——（賽一〇廿四に於て）此處に於て神の止まざる怒とは慈悲の意なりと言ひしに注意せよ、彼は賽三〇九に於て曰く、吾は功徳の爲めにする此善（主）業さへ救さざるべし、救さざる事は有害の恐嚇にあらずして救済の刑法なり、此文は最終の結末に關するを以て之を記憶すべし、（ペシル氏の第五章二節の註釋を見よ）賽一〇廿八に於て彼曰く、故に罪人及犯者は其不徳、罪及執

なるを廢止せられん爲め共に滅亡（撲滅）せらるべし、而して主を離れたる者は盡滅せらるべし、之を詳言すれば神に逆ひ犯したる罪は再び之を犯さざべし、聖ペシル又曰く基督の來る時彼に由り罪の人の滅亡せらるゝ事はセロームの教ふる如く其人の罪を取去る事なりと、（*In Mic. v. 8*）「何となれど消滅せらるゝは罪其者にして（罪の）生ぜし其人に非ざるとは屢々觀察する所なればなり」——（同書）聖ペシル、第五章卅一節に於て曰く、吾人は尙ほ一たび茲に引用せる彼等の場合を舉ぐ、即ち初め彼等は消滅せらるべし、而して爰にハ彼等の燒かるゝ事を附加すべし、此燒くとは「ゲヘンナ」（地獄）を謂ふものにして、全体の文勢を見るに彼が之を以て治療的及清淨的火と爲せしや明なるが如し、又此師文は詩四十九〇一を註解して曰く、末日に於て地球を喰ふ所の神の憤怒に就ての西番雅の語（一章八節より十八節に至る）は凡ての人、主の名を呼び又一の輻の下に渠に事へん爲めなりと、彼曰く現在の如き詩は万物基督に服従する時を指示し、又各々の膝渠に屈する事を指示して相一致す、（明白に調和す）又賽九〇十九に於て神の全地球を燒き盡す事

は之を清潔にする爲め、靈魂の利益の爲めなりと氏は公言せり、又彼は賽十三〇十九に於てバビロンの滅亡はゴモラの滅亡の如く之を治療せん爲めなりと言へり、此意味を見ん爲めに吾人は左の二件を記憶すべし、(イ)前後の文勢は最終絶望の零落を以てバビロンを脅嚇すると(五章廿節)(ロ)ソドム及ゴモラの永遠の火の復仇を受ると。(S. Jude.)

吾人は論歩を進むるに當り茲に感動すべき一家族の有様を描出し以て讀者の引證に厭倦したるを聊か慰めんとす、是れ彼のオウガスタン及其賢母の有名なる状態と相並列すべき價值あるものなり、—*Confess. No. ix.* 前項既に述べたる彼の聖マクリナ女(若き)の病床に臥し將に死せんとするに當り、偶々(ニサ)の聖グレゴリーは既に易簀せる兄弟聖ベシルを哀まん爲め此處に來れり、瀕死のマクリナは強き信仰と希望とを有し、基督の贖罪の眞實の宏大——即ち救済上凡ての人間を包括す

ると、罪の汚點を悉く宇宙より除去すると——の高尙なる思想と確實とを以て生き残りたる兄弟グレゴリーを慰めたり、此の著名なる二賢の最も有名なる會話中、地獄の火の清淨的性質顯然表明せられたり、—(*Dict. of Christ. Biog.* iii. p. 780) 是れ聖グレゴリーの有名なる著書中に記録する所なり、—*De an. et Res.* 往昔の賢女中万事に於て著名なると聖マクリナの如きは未だ嘗て之あらざるべし、女は實際の生活に賢明且勤勉なると又最も深き敬虔と智力上の剛毅とを以て著名なり、次の證人は特に注意すべき者として紀元三百八十年彼の有名なるニサのグレゴリーとす、氏は正統派の精英なる者にして、又同時に其姉妹の如く極端なる宇宙神教ユニヴァーサルイズムを最も強く主張せし者にして、殆んど無數の章句に於て之を教へたり、

余は今之を引證せん、聖グレゴリーは有名なる文章中に基督は人類を其邪惡

より免れしめ、又邪惡の發明者(惡魔)を癒す者なりと説けり。—*Cat. Oral. ch. 26.*  
 又他の論文に於て此大師父は記さて曰く「蓋し或時に於て善惡を全く存在  
 より取り去るべきと必要なればなり、善惡は其眞實に依り自由撰擇を離れ  
 て存在する能はざるを以て、自由撰擇が神の力となりし時は善惡は之を容  
 るの餘地なき程全く廢止せらるべきにあらずや。—*De un. et Rec. vol. II. p.*  
*659. Paris. 1616.* 此に於て此聖徒が或未來の日に於て善惡の全く消滅するを  
 豫想し、且其消滅は大に人間の自由意志に基くを爲せしと全く明亮なり、又  
*Phil. II. 10.* に於て記して曰く「此文は時世の變轉に於て善惡消滅せられしと  
 き、善の境界外に一物も残る者なかるべしとの意なり、然れども彼等(惡魔)さ  
 へも一齊に基督の主たる事を告白するに至るべし」——(同書六百四十四頁)  
 「此語は邪惡の全く消滅もる教義を述ぶるが如し、蓋し神若し存在もる萬物  
 中に在さば、邪惡は明に存在せざるべければなり」——(同書六百六十一頁)他  
 の論文 *Oral. in I Cor. xv. 28. vol. I. p. 844.* に於て最廣なる宇宙神教の確説あり、即  
 ち或時に於て善惡の性質は存在より全く除去せられて消滅に至り、而して

神性不雜の善ハ凡ての合理的天性を其中に包括するに至るべし、神に依て  
 造られし者は一も神の國より落去るとなし、此に於て存在して混合せる凡  
 ての善惡ハ清掃する火の溶解作用に依て燒盡され、神より出で、存在せる  
 萬物は尙ほ未だ惡に汚染せられざりし所の最初の有體に復すべしと。此語法  
 を以て聖グレゴリヤは其論を始終貫徹せり、各種の善惡は除去せられ、各合理  
 的動物は残りなく愛と平和に於て基督に膝を屈をべし、蓋し神が實に、万物  
 中に在さば則ち如何なる善惡も存在せざるや明白なれどなり、又、被造物悉  
 く自ら調和し、而して各々の舌耶蘇基督の主たる事を告白もるに至る時、又  
 被造物悉く一体になされし時、其時基督の体は父に服従すべし(基督の体は  
 余が屢々言ひし如く人間の全体なり) (*Pass. he anthropine phusis.*) — *ib. p. 819.* 又最も  
 明亮なる語氣を以て聖グレゴリヤは神に服従するとは神に調和するとなり  
 と主張せり、神の敵が神に服従すべしと云ふは、善惡の力取去らるべし而し  
 て不從順の故を以て神の敵と呼ばれし者は服従に依て神の友となさるべ  
 しとの義なり、然らば一度神の敵たりし凡ての者が神の押印を自身に受る

の故を以て、渠の足臺となさるゝ時又奴隸的謙遜にあらずして不死の恩恵なる凡ての服従を以て死を亡ぼせし時、基督ハ、聖保羅に依て、神に服従せらるべしと言はれたり、此教父の愛好する教義は復活は回復を含むと云ふ事なり、——是れ墮落者の全事業を廢すればなり、聖グレゴリ曰く是れ不死不敗を來す——是れ神性に特有する者にして其物自から恩恵なりと。此事業に就て *De an. et Res. p. 689.* 其中に驚く可き一長文あり、使徒の語は吾人の定義に含有するものを含有するが如し、即ち復活とは吾人の性質を其往昔の状態(恩恵の)に回復するに外ならず、此腐敗ハ腐敗せざる者に托せざる可らず、然れども不敗、尊敬、榮光は神性に固有なりと告白せらる、故に吾人も亦一々可死性を脱し土壤と混し復活に依り吾人原始の美風を以て再生せよ。彼尙ほ語を添へて曰く、善悪は審判官より非常の嚴酷を受けるを要するや疑なし、然れども適當なる治療的處置を受し后、又火が凡ての混合物を滅せし時、其性質は彼等の受けし潤澤なる教養に依て改化し、遂に彼等は再び神の押印を得るに至るべし、此文を以前の文に於て (Vol. II, p. 650.) 此師父が「永遠」の火に清

淨的性質を歸したるや明瞭なり、——是れ羅甸譯に於て隱蔽せられたる一事實とす。

吾人は爰に聖グレゴリの述べたる文の長さを言はん、ユニヴァルサルズム宇宙神教は隔離孤立の章句に非ずして、其教の中心として、又凡て墮落せる靈魂を包括する形を以て、此大師父の特質たりとす、而して此宇宙神教は明白にして忌憚する所なし、余はウエルスのデインと共に言はん、と欲す、聖グレゴリはナイシアの信條に表示せし如く神性の奧義を説明せると同一の信用を以て此教義を持ち、教會の教義の上に其立脚地を取らんと欲せりと、即ち左に之を引用せん

「是に依り神ハ罪の永遠より來らず又永遠に持續せざる事を示せり、蓋し常に存在せざりし者ハ永く繼續せざるべければなり、(主)は其正しき審判に於て罪人の邪惡を滅亡して性質を亡さす、邪惡の斯の如く亡されて其印象を

何者にも遠す事なく凡ての者は基督に倣ふべく、而して原來吾人の性質に押印せられて一の品性は凡ての者に於て輝くべし——*In Ps. Psal. ii. ch. viii.* 嗚呼主よ、爾の憤怒に於て起て、而して爾の敵を終らしめて高く擧れ、*聖ケレモ*りの題詞に記したる語斯の如し、彼曰く、憤怒なる語は正義の裁判の應報力と罪の消滅に續く示す所の者を示す、何となれば獨り是れのみ善に反對すこ見ゆる性質に反し、即ち其罪の終局は消滅なり、虚空に變化すればなりと。彼又説明して曰く、神の敵に終を告ぐとは惡に轉するの力を人間の生活に許さざるこの意義にて、恰も疾病の終は健康なる如く、茲に作詩家は人類の性質の惡より恩惠の状態に變化するを、*神の敵の終を稱せしなり*——*Ps. lxxviii* 此所に於て憤怒正義應報と此等が罪惡の終局を含む程嚴正に論したる結論に重きを置きたるを看るべし、又聖ケレモリは詩五十七〇一に於て記して曰く、蓋し罪の性質は永久ならずして暫時なり、又宇宙に永續せず、是れ屋上の草の如く根なく、種蒔かず、乾るとなく、假令へ現今其不確實の嫩芽を以て妨害を惹き起すも、一朝万物善良に回復するの時期來れば忽ち消滅せん、

新しくして吾人希望の目的を約束せられし生活に於ては、現今吾人に充滿せる善惡の痕跡だも止めざるに至らん——*Ps. lxxviii* 又詩篇百七〇四十二に於て曰く、而して凡て不正は其口を閉づべし、「不正の口が永く閉ぢらるゝ所の生活は實に幸福なり、是れ凡ての幸福の冠、凡ての希望の頭なり、其性質は最早邪惡の爲めに苦しめらるゝ事なく、神は凡て不正即ち不正の發明者(惡魔)に終を置く可しと」——*In Ps. Psal. i. ch. viii* 又詩百五十〇五の音のたかき鏡(鏡)をもて神をほめた、「へ」この文に頗る著しき註釋をなせり、云く「是等の鏡、鏡の鏡と結合し、人性の其終極を得し時、人性と天使の性との間に於る和合(未來の)を示す、一の鏡は天使の天の性にして、他は人類の合理的創造たり、然れども罪は此等二個の鏡を離隔す、故に神の善が今一度二者を結合せし時は、兩者相合して彼の大使徒の言ひし如く、天に在る者、地に在る者、地の下に在る者の各々の舌は基督の主たる事と交たる神の榮光を告白せん」この讚美歌を諷ふに至るべし、此等の鏡の聲は戰闘消滅の爲に興りし凱歌を諷はん、其は全く絶滅して虚空に歸したるを以て、等しき尊敬を以

て各々の靈魂をして共に充分永遠間断なく神を讚美せしむべし、蓋し讚美は罪人の口に恰好ならざるを以て、茲に一も罪人あらざるべし、(罪は最早存在せず)凡ての靈魂必す永く神を讚美せん。聖グレゴリ約言して曰く、此最終の詩の意味は左の如し、罪を全く廢弛せし后讚美を神に讃ふべし、是れ吾人が罪に復歸し能はざるをを含む讚美なり。被造物悉く一の唱歌隊に和唱せんとき、又一の鏡級の如く合理的創造物と今罪に依て分離されし者が相互の調和に適當する愉快の律侶を奏する時、各靈の讚美續々として永遠に至るべし。— Chap. 4 作詩者の眞正の精神と福音の眞希望との註釋に就き是より高尚なる者果して何處に在んやと謂ふも可なり。

\*ドケトル、アゼー氏は此教父の説を以て、オリジニズムの「弱」するを公平なりと思惟せり、是れ神學上争論の方法なり。

或讀者の此證據の充分なる意味を理會せざるを以て、余は若し之を孤立せしむるも能く愉快の小説に供し得べきとを指示せんとす、何とな

れば第四世紀若くは第五世紀の教會は宇宙神教に冷淡なりしと此の如きを以てなり、其の如何なる事實ありしや、此時に當り聖グレゴリの如く卓越顯著なる者甚た僅少にして、又充分正統的なる者も氏に過ぐる者なく、氏は一の懺悔者又、ナイシア信仰の最も有力なる戰士にして、ナシアンザスのグレゴリーに次ぎコンスタンチノール總會の最著名なる議員にして、吾人の今日暗誦する夫の信條の起草者に撰擧せられ、自由教會の城堡として次後の集會より目せられ、宇宙神教否凡ての靈性物を包括するよ足るべき廣濶なる宇宙神教の剛膽なる主唱者たり。

吾人は再びアレキサンドリア派に就て論せんとす、紀元三百八十年有名なるデイデイマス氏は該派最終の著名なる首領たり、聖ゼローム曰く其學生なるデイデイマスは當時聖書の學識に於て衆に優れり、又

同師父の彼を呼んで、最も公然たるオリジンの辯護者」と稱せり、然るに借むらくの氏の夥多なる文書、中世に残りし者小部分に過ぎず偶々之あるも完全なる者稀にして、多分は翻譯若くは「カタナ」Catene に於る斷片のみ。

氏論して曰く、予に依て理性を賦與せられし万物其實在を受けし如く、又彼に據て彼等總ての救済成遂げられたり、蓋し基督は其十字架の血に依り天地に在る万物に平和を來したればなり、人は其罪を棄るに依り渠に服従せしめらるゝ如く、又匡正に依り其頑固の罪より免かる(Corveta spontanea culpa)一層高き睿智は凡ての救済の爲に命せられたる神約の完成さるゝに當り渠に服従せしめらるゝと——*1. S. Pat. III. 22.* 此等の語は墮落天使の救済を含むが如し、テイデイマス氏は其他凡ての者基督の完了即ち神の萬物に主たるを知るに至るの時あるを語れり——*1. S. John. III. 2.* 尙ほ一文あり(本文は不幸にも腐敗せり)彼前一〇十二の註釋にして惡靈の救はる可き警告を明白に

含有せり。

テイデイマスは數多の師父と共に罪が意志中に在住する事實より罪の最終の廢止を論し、而て甘んじて罪を犯す者は其事實より必ずしも善惡に非ずとの説を持せり、故に惡靈自らさへも根原より罪より非ず、彼等の意志は屈曲せしならん、然れども彼等の實質、彼等の眞体は然らざるなり、此以凡ての惡靈は救を得べきものなり、詩十〇十五に驚く可き註釋あり、爾惡しき者の臂を折りたまへ云々、テイデマス曰く此惡き者は惡靈にて其臂を折らる而して、其完了するに當り其終りを受しを以て彼の罪は見出されざりき、何となれば實質に非ず唯た性質なればなり、萬物の終も亦斯の如く來るべし、其爲に萬物は實在に來りしなり。此等の語は罪の最終の消滅を暗示するや明なり、故に彼曰く、神は罪を滅さん欲す、故に罪は滅亡を受く可き者の(一)なり、然らば滅亡を受く可き者は滅亡せらるべし——*Cont. Man. 3.* 斯くテイデイマスは神の敵の滅亡は實際彼等の改化なりと云ふ事を教ふるに熱心なり、故に神が其敵を焼き盡す(詩九十七〇三)と云へるときテイデイマスは之を説



明して彼等の罪を除去する事なりとせり、又詩五十八〇八に於て神の敵の溶解とは死を吸入する生命なりと説明せり、詩十八〇四十三に神は其敵を「風前の塵の如く微細に撃つとあるを、テイデイマスは彼等の改化と註解せり、氏又言へらく「神は彼等の虚偽者たる間ハ虚偽者を滅亡す」と。——詩五〇六及九〇五の説明も亦同義にて、其他の文も同意義を以て此師父より容易に引用するを得べし。次に余はテイデイマスの刑罰の教へを指示せん、氏論して云く、神の匡正(復讐をらも)及約束は同一の目的を有す」と。——*Adv. Man. ch. xviii.* 余は之に加ふるに氏が基督に依て各靈魂の陰府より免かるゝを教へしを以てせんと欲す、蓋し氏言へらく、基督は「陰府に降り彼等の罪の爲めに其處に拘留せられし靈魂を連れ歸る」と。——(詩七十一〇二十に於て)又 *De Trin. lib. iii. 21. 22.* を見よ。

テイデイマスが凡て悪しき者の終に改化する説を持せしは疑を容れざる所なり、バスキューシ氏 (*Aligine Tom. 39, p. 176.*)、ルーク氏 (*ib. p. 1740.*)、ゲリ

ツク氏 (*De schol. Alex. pp. 359. 368. 390.*)、亦斯く思へり、尙ほ「フエト」氏を参考せよ——*Orig. p. 199.*

## 第五章 教會の教説

「其時(第四世紀及第五世紀)の東方教會はニサのクレモリー以下大希望論を以て貫徹せられたり(*Spirit in Prison*, ch. iv., *The Eschatology of the Early Church; and Greenham, Church Hist. Per. ii. ch. ii. 85*)—*The Dean of Wells*.

勿論余は數多の教父が万物復興説に同意せしを知る——カーゲナル、ニエーヤン(*Spirit in Prison*, p. 351.)

「古代の六個の神學校中四個の勢力は普及復興説を賛成したり」—*Dr. E. Becher*——(應説報)

クレメント及オリジンの確信したる人間の一層大なる希望は何處に於てもアサチシヤス氏の拒否せざる所にして、實に氏の降生説中に之を含有したり同説はナツアンザスのクレモリー氏も之を採用しニサのクレモリーは一層強く之を信したり、是れティティマス氏の書中に在りてダイオトラス氏及モプスウエシヤのセナドル氏の確言せし所なり。—*Conin of Christ. Thought prof. Allen*.  
「一層大なる希望説が第四世紀中東西兩派に其盤根を深くし、而して多量の

辨護者を有せし事は拒否するを得ず」—*Detel. Comm. Janu.*

「オリジンの教説がナイシア以前の教會の一般の信仰と相反せざりし事に就ては確乎たる證據あり」—*De press. Early years of Christianity* iii. 356.

吾人は既に初代の基督教思想を支配せる重大なる勢力を認めたり、百五十八頁此勢力は固より希臘語に因るに非ざれども新約聖書の言語に寫出せる東方神學に由る蓋し希臘の不思議にも神學上は於てハ荒蕪なりし羅馬に於ても教會には第二世紀の末若くは其後に至るまで尙は東洋的勢力の下に養成せられたる希臘語の一團體永續し、其初代の教師クレメント及ヘルマスの如きは使徒保羅が彼等に書き與へし如く希臘語にて書し羅匈語を用ひざりき、實は法王ポリーナなる語は希臘語なりとす、此勢力は北亞米利加を除きては最初四世紀間の羅匈諸教父の書中に特に著しかりき、アムブローズ及其徒ヒレリ、ビクトリナス、ゼロ

一ム等は齊しく一層自由なる東方神學を採用せしと明白なる證據あり、斯の如く基督教徒の思想を一層廣潤真正なる自由に形造せしは世界中最古且最有名なる都府にして世界的教養と諸種の學術と神學校とを有したるアレキサンドリアの大に與りて力あると疑ふべからず、又其勢力は時代の遠近に徴して明なる事實なり、されば殉教者パンフ井ラの第三世紀の末頃シーザリヤに於て書籍館と學校とを設置せし時に(或は恐く是れオリジンのアレキサンドリアよりシーザリアに追放せられし時始めて設立せし學校を再興したるものならん)彼は大にオリジンの著書を尊敬し、自から其大部を手寫せしを見る、是れ彼が勉學したるアレキサンドリアの勢力に感化せられしに由るなり、又之と同時代の頃長老ドロセアス及ルシアンは有名なるアンテオケ神學校の基礎を立てしが、此新學校はオリジンの比喩的解釋に反し屈強なる反

動を現はすと雖ども亦復興説を維持したるや甚た明白なり、大希望論の全論者は又カバドシヤの有名なる教師中にも發見するを得べし、其教師等の心靈的祖先はオリジンの親友にして又其弟子なる第一のグレゴリーに溯り、而して終つアレキサンドリアに至らざるを得ず、二百二十頁

然れども若し夫れ亞弗利加が廣潤にして且自由なる神學に對し全情を表せりとせんか、是れ實に或一派の論者に解毒劑を與ふるものと謂ふ可し、蓋し北亞米利加は特別なる意味を以て言へば、來世論に於ては殘忍無情なる神學の生誕所たり、吾人をしてターチユリアンが異教者の未來刑罰に處せらるゝを見て大に喜ぶ聲を聞かしめよ、彼は笑ひ喜び且躍るべき理由を告げて曰く、予地獄の暗所に於て數多の國王が呻吟し、又數多の執權者嘗て自から基督信徒に對して燃せしより一層

劇烈なる火焰中に鎔解せられ、自稱賢人等が自から其弟子と共に燃せし如く熱火中に赤焼せらるゝを見るに當り、此悲劇を一層好調ならしむるものは焰々たる火中又馭者が全身赤くなりて其馬事を驅ると是なり」と——*De Spectaculo*, xxx — ターチュリアンは罪人の永遠に焼かるゝ故に喜べり、嗚呼吾人は彼等が焼かれ且吾人の最親最愛者が夫の火焰中に燃ゆるを見るも尙ほ喜ぶを得へきか、果して然らば道德上の差違も亦甚しと謂ふ可し。

而して此教會は黨派と分争の爲めに亡び、回教の進路の前に果敢なく倒れし時に當り、其大監督の教理のみ能く生存し、加之廣大なる版圖を擴めたり。オーガスチンの慘酷なる教理は其生所に於ては消滅したれども羅馬の幹木に接枝となりて繁茂し、其處より奇異狹隘なる元素を以て羅甸基督教國の全体に漸く蔓延せり、當時は彼等の成功に對して

甚た僥倖なる時代なりき、是れ當時以太利の教會速に勢力を得つゝありしを以てなり、希臘の大教父等は其説を論述して此世を逝り、其言語は西方諸國に於て速に湮滅に歸せり、斯の如くオーガスチン派の迅速なる潮勢に逆ふべき防碍物なきを以て、慘酷、腐敗、迷信の時代に於て自然に勝利を得たるなり、此の如く漸次に教理の革命及び教理以外の革命まで成就するを得たり、而して西方神學組織の全体は其無限の損失なるにも係らず今日まで尙ほ亞弗利加出版者の名義と其慘酷なる信條とを墨守せり、此信條は實に無智虚偽なる神學の眞證として神と人とを汚辱するものなり、中世紀の學者及び近代の清教徒等は一様に満足を以て心靈的桎梏を甘受しつゝあり、蓋し其桎梏とは則ち自己の英才に係はらず十分新約聖書の言語を咀嚼せざりし人々がヒツポに於て鑄造せし者なり、余は此事實を以て口碑的信條の爲めに聖書の教

權を主張する人々の熟考に供せんと欲す。

吾人は希臘神學の擴布せる勢力を明證すべき事業を爲したる或羅甸  
教父等に論及せん、予は第一に甚だ有名なるミランの聖アムブロース  
(紀元三百九十年)を擧ぐ、吾人は彼が惡人の神罰に關し如何なる教義を  
持せしやを見んとす、彼の意見に依れば惡人の滅亡は治療の方法なりと、

數多の人茲に肝要なる問題を問ふて曰く、聖書は吾人の性質の滅亡を確定  
せる乎、何となれば聖書に「我れ彼等を風前の塵の如く搗碎き街の泥の如く  
に破壊すべし」と(詩十八〇四十二)あればなりと。\* \* \* 蓋し塵の如く搗碎か  
るゝ者ハ滅亡せしめて尙ほ一層善良なる者に變化さるゝなりと信するも  
何の妨げか之あらん、故に彼は肉身の人たる代りに靈の人となされ、而して  
破壊されたる彼は凡ての汚點を除き只清潔のみを存せん爲めに破壊せら  
るゝことを吾人は信するなり、又神エルサレムの敵に言らく彼等は恰も無  
きが如くなるべしと。\* \* \* 此意味ハ彼等は本体のみ存立し而して(神に)改

化して存し、而も(神の)敵として存在せざるを謂ふ(詩一に於て)又他句中に言  
へるあり、曰く、予爾を諸國民及諸王國の上ニ建たり、是れ爾をして破り毀ち  
て又建て植ゑしめんが爲めなり、聖アムブロース曰く是れ基督が罪惡の跡  
を悉く亡ぼすを謂ふ者なり、……此毀ち又植ゆることハ罪惡の分子を悉く拔  
き去り善良なる者を植ゑつけるを謂ふなり(Js. P. xlv. p. 1870 ed. Par. 1868.)聖ア  
ムブロースの死に關する教説ハ之と符合し却て口碑的信條と全く相反し、  
則ち彼の既に據れば罰にあらすして寧ろ治療の方法なりと、彼れ曰く然ら  
ば吾人ハ何ぞ死を惡むの理あらんや、若し生活を辛苦とせば死亡は自由な  
り、若し生活を問させば死は治療なり、\* \* \* 然らば何れの點より見るも死は  
善なり、\* \* \* 何となれば是れ人の有様を惡に變ぜざればなり、吾人は死  
を以て罪の終末なりと思ふべし、主は罪惡を滅亡せん爲め忍んで死に入れ

— De Doct. mort. ch. iv.

「死は善良なる者に達する通路なり、何となれば罪惡より其歩を回轉せざる  
の罪人が、假令ひ自己の本心に逆ひ死するとも、彼等ハ性質の終りを受けす

して唯罪惡の終りを受くるのみなればなり *De Cain. et. Ab. ii. 10.* 「神が死を與ふるは罰の爲めならず治療の爲めなり、\* \* 死は惡の終局として治療の爲めに與へられたり、\* \* 神は始めより死を定めしに非ず之を治療として與へたり—*De fide. Res. p. 471.*

次章に於て吾人の復活の眞意を論して聖アムブロース(及其他の教父等)の説を引用せん、蓋し其教説は復活を以て万民に對し基督に於る生命の賜なりと爲し、其中に復興説を含有することを教ふればなり(*De Fide Res. を見よ*)

次に聖アムブロースか罪は其眞質より永遠に繼續するを得ずと論定せるを見るべし。

惡魔に屬するものハ何物にもあらずして永久に實體を有せざるなり、—(*De Jacob. ii. 5*) 罪の場所の永續し能はざるを見れば奚ぞ未來に罪人の存する。とあらんや。—*In Ps. xxxvii. p. 1802* 又(惡魔の惡に付き記して)曰く彼等は常に

存留せざるべし又彼等の惡は永久なる能はず—*In S. Luc. viii.*

次に引用する所は聖アムブロースか人よ於る神像より立論せし者とす。

其神像ハ實に隱蔽せらるゝとあらん、然れども其性質(*per naturam*)の理より破壊せらるゝ能はず *De fide Res. (frag.) p. 487.* 是れ聖アムブロースが左に言へる如し、「神ハ人の必要に屬する物をして消滅せしめざる者なるに、奈何が自身に疑して造りたる人間を滅亡せしむるとあらんや」—*De fide Res. p. 473.* 神の像は一神の像なるが故に又彼の如く一より出て、無限に弘布せらるゝものなり、又再び万物ハ無限の數より其終に至る如く一に歸すべし、何となれば、神は万物の始め又終なればなり。—*Ejus, lib. i. 1.*

前節の結語は吾人をして新プラトニズムを想起せしむ、是れ吾人がビクトリナスの著書中よ認めし者にして、所謂ダイオニシアス(フレヲバ

ガイド)及其模倣者に依て充分精練せられたるを見るべし、吾人は次に  
 聖アムブローズの万物皆基督に服従するとの教説を引用せん、是れ宇  
 宙神教の眞精神を吐露するものなり。

然らば(萬物)如何にして基督に服従すへきや、其方法に付て主自から言へり  
 「爾曹我軀を貢へき、蓋し軀を貢ふものは頑梗なるものに非ず、謙遜柔和なる  
 ものなり、\*\*\*故に各々の膝は基督の名に於て屈すべし\*\*\*聖アムブ  
 ロース曰く此基督に服従するとは愛の従順なり、此意義に於て万物基督の  
 従者と爲らざる可らずと、尙ほ進んで基督の天父に服従するを論じて曰  
 く、此基督の服従今完了せられしや、否決して然らず、何となれば基督の従順  
 は少数に依りて成立せず、萬物(從順となる)に依りて始めて完成するものな  
 り\*\*\*基督は萬物の従順に依りて神に服従す謂ふべし、然らば不正の  
 放棄せられ罪の制服せられし時、万民の一感情に於て一致を以て  
 神に和合するに至るべし、而して神は萬物の主たるべし、\*\*\*凡ての者神

の意志を信して爲せしとき基督は萬物の主たるべし、而して基督万物に主  
 たるるとき神は萬物に主たるべし——De Fid. lib. vii. 又詩篇第百十九篇九十一  
 に就て曰く、萬物爾に奉仕すればなり、現今吾人は皆神に仕へず、然れども基  
 督が其王國を神に渡すに至れば凡ての者神に服従すべし、而して神は宇宙  
 を已に服従せしめ、其産みたる獨子の苦難に依り凡ての人の信仰を得るな  
 り、\*\*\*故に凡ての者主を信したる時、宇宙は神に仕へ神は萬物に主たる  
 べし、使徒は深遠なる企圖に依り宣言して曰く、凡ての者に信仰の充たる時  
 基督吾人の中において天父に従ふべし\*\*\*今日彼其力に依り凡ての上  
 に在り、然れども彼が凡ての者の自由意志に依りて其上に在らんと必要な  
 リ。——(詩六十二〇一に於て)

尙ほ附加せん聖アムブローズは聖靈に背く罪も赦さる可しと教へた  
 り——De penit. ii. 4——此一章は一讀の價値あり、終よ述べんに左の數  
 節の明に彼の神學の語氣を示せり。

「神子成肉の秘義は全受造物の救なり\*\*\*是れ他處にも言へる如く全受造物腐敗の羈絆より免る可き者なり——*De Ideo* 4. 7 父は凡ての審判を基督に委れたり然らば汝等の爲めに身を委れたる基督は豈に汝等を罰するものならんや\*\*基督は曰はん吾れ我救ひたる者を罰せんには吾流せし血は何の功用あらんや」——*De Jacob* 1. 6. 「凡ての國民は來り汝の前に拜するならん\*\*何となれば既に世を離れて精神に一致せる凡ての肉體は爾に來るべければなり——*De Ide Ree*. p. 486. 主の慈愛は凡ての肉に及ぶ是れ凡ての肉が主に登らん爲めなり——*In Ps. cix*. 156. 斯の如く人の子は失はれし者を救はん爲めに來れり即ちアダムに依り凡ての人の死せし如く基督に於て凡ての者生を得ん爲めなり——*In S. Luc. xv*. 8.

聖アムブローズの教義中に曰く「死は全く欲望すべき者なり\*\*\*未來の恐怖は殆んど全く消滅せりと又死は惡人にも全く利益なりと論せり」——*Dict. of Chris. Biog.* (Smith and Wace) 故に聖ゼロームは完全なる眞

實を以て聖アムブローズの著書は殆んど皆オリジン説を以て充たせりと論定せり——*Adv. Ruf.* 1. 而して博識なるフーエツトも亦之を確證せり——*Orig.* ii. pp. 159, 199. 吾人はオリジンさへ聖アムブローズより一層罪と未來の刑罰とに重きを置きたるを認めざるべからず。

余は次に初代の有力なる一著者を引用せん其人の著書はアムブローズの著書と常に結合せられ法王ダマサスの時代則ち紀元三百六十六年より三百八十四年の間に著はせしものなれども決してアムブローズと全人にあらざるハ明なり(提前三. 十四——十五に於けるアムブローズの説を見よ)彼れは明白に凡ての靈魂の基督に依り陰府より放免せらるゝことを教へたり(百九十九頁又別に彼の教説の數例を引用せん、

「基督に依り神の意志の秘密を顯はすは神に善なるが如し\*\*\*即ち神は



天地に在る凡ての迷へる者に對し慈悲深かるべし\* \* \* 然らば天地に在る各存在物は基督の智識を學ぶとき其初め造られし所のものに復歸せらるべし *In Epl. i. 9-10* 同章の終の二節に於て基督に依り万物の救はる可き著しき註釋を見るべし、夫れ万物基督に依りて造られしときは彼は萬物の頭なり主なり、使徒は全く教會 (*Omnia ecclesiam*) の中に天にあるもの地上にあるもの、全体を包括せり、何となれば彼等神の前に悔改し、基督の前に膝を屈するに至れば基督は万物に先ち、從て万物たるべし、是れ万物彼より來ればなり、又吾人は普及救濟の爲めに同一の議論を發見せり、基督の世に出てしは彼が初め造りし物を再び改造せん爲め、又神が造りし万物を彼に依り復興せんが爲めなり、\* \* \* 又彼に依り造られたる万物は其創造者に於る如く彼に依りて生命を得べし(既に引用したるヴィクトリナスの教説と比較せよ) — *In Col. i. 26* 尤も著名なる一文はヴィクトリナス及び新プラトニツク學派を想起せしむるものにして左の如し

「受造物は基督に依り神より造られたり\* \* \* 故に恰かも結合せる連體の

如く若空まで順序を以て排列し、以て結合せる全体を成せり、然らば受造物皆一心に歸し、皆造物者の愛と調和せんとは企圖せる要點なり、何となれば受造物皆主の宮殿に已を改造すべなり」 — *In Epl. i. 15* 哥前十五二十七に付き此記者ハ記して曰く、凡ての受造物が基督は自己の頭にして基督の頭は父たる神なることを知るときは、神は万物の上に主たるなり、之を詳言すれば凡ての人類は天にある者、地に在る者、地の下にある者皆異口同音に一神ありて万物之より出てしことを唱ふべし、次の文は基督の敵皆其足産さざるに就き興味あるものなり、彼等ハ彼の足下に屈して主に歸し其足産さなるが如く、又其説教に服従すべし、是れ匡正せられし敵等が主の右手に置かるゝことを謂ふや疑なし、 — *In Heb. i. 13*、「父ハ其子に、十字架の死後、万物を子の名に於て救はんとを許せり」 — *In Phil. ii. 10*。

聖アムブローズの著書中一般に印行せる一文あり、是れ「デサクラメンテス」と題せる者にして、最多の批評家は之を氏と同時代の作とせり、或

は其後の著者ならん、此文は古代基督教の一般の信仰の語調を現はす傾向あるを以て大に興味あり、

其説教に曰く、神ハ有害なる諸物を亡ぼさんと欲し人類を死に宣告せり、\* \* \* 人が死して復た蘇生するは一の治療として定められたり、\* \* \* 死を其間に置くハ罪を停止せん爲めなり、\* \* \* 基督は復活を得たり、\* \* \* 吾人は吾人の兩側面を有す(死と蘇生是れなり)何となれば死は罪を終らしめ、蘇生は吾人の性質を改造すればなり、——*1st. ch. 6.* 然らば復活ハ吾人が死より生に至るものにあらずして何ぞや——*2nd. ch. 1.* 此等の語ハ(我讀者が知る如く)初代教理の大部分と相一致し、而して今日一般に死を以て實に刑罰なりと考ふる説と甚しく相反對せり。

吾人が次の證人は羅甸教父中オーガスチンを除きては最も著名なる人物なり、又其博學と批評の鋭敏とに於てはオーガスチンをすら一步を譲るべき人物とす、聖ゼローム氏は是れなり、吾人は今暫らく此文を比較

せん、此の二人は會て相通信せしとありと雖も決して會合せしとなし、ゼロームは今や已に衰微せんとする東方神學に對し廣濶且同情的の傾向を現はし、オーガスチンは北亞弗利加と興起せる學派の殘忍狹隘なる獨斷説を總合せり、真正の意味より云へば、聖ゼロームは東方の源泉より其感化を導き、羅甸教父等の長系統の最後にしてオーガスチンは新神學時代の創立者なり、聖ゼロームが宇宙神教ユニヴァーサルを教へし範圍は以下に掲ぐる所を見て知るべし、

「基督は未來に於て彼の榮光(恩寵)の宮を一人に保たずして理性的動物の全數に示すならん、彼附加して曰く聖徒等は墮落せし天使と此世の主とを支配し魔王ハ彼等にさへ幸福を與ふへしと \* \* \* *1st. ch. 11.* 此著しき句節に次て來るは尙ほ一層明瞭にして且つ忌憚なき言なり、双方ともに余の簡畧なる拔萃より寧ろ原文を讀むの優れるに若かず、次の一節に於て殊に然

り、萬物の終に於て \* \* 種々の部分に分離滅裂せられたる全体は再び回復せらるゝならん \* \* 吾人をして理性的動物の全体を單一の理性的動物の像として思考せしめよ、 \* \* 此動物分裂せられ、骨と骨と相離れ、神経と神経と相斷たれたり、想像せしめよ」と。聖セロームは尙ほ進んで或驚くへき醫師來り各部を其位置に回復せるを想像せよと言へり、此の如く萬物の回復に於て全教會の團體を治せんが爲め、眞正の醫師耶穌基督の來る時、各物皆其適當の位置を得ん、 \* \* \* 予が茲に言ふ所は即ち墮落せし天使は初めに其造られし有様に歸るべく、而して樂園より追放されし人も再び其樂園を耕さんが爲め復歸するならんとの意味なり、而えて此等の事は宇宙一般に起るならん」と—In Epist. 16. 不偏の讀者は此等の詞より古代教會の廣潤なる思想を悟り得るならん、彼曰く吾人若し罪惡に陥らんとする人を見れば實に悲み速に之を救はんことすべし、然れども神が一の理性的動物をも永遠に滅ぼさざるを—In Gal. v. 22. 知れば吾人は悲む可らず、死は不信仰の人に訪問者として來らん、それは永久にあらざるべし、それは彼等を救

な繼續すべし、In Nic. v. 8 又聖セロームは番三〇十に於て萬物の終末を説て曰く、神の恩惠の廣大を知りたる預言者は恰も聖詩作者が其心と交通して、神は罪人を永く棄る者ならんやと言ひしが如し、其意味は次の如し、曰く余は始め神は罪人を永久棄つるならんことを考へたれども、今や予は神は此目的の爲め即ち諸物を變更せんが爲め、又最初に放棄せし者に恩惠を示さんが爲め、之を爲したりと覺れり、主の十字架と苦難により萬物は統合せられたり、彼は進んで此意味を明にせり、曰く是れ恰も人が數度に百ピンスを貸し而して一度に總額の返済を受しが如し、換言せば基督は萬物を返却すへきなりと、In Epist. 10. 彼又此思想に立歸りて曰く、基督の十字架は只地を惡みしのみならず又天を惡みたり、 \* \* \* 而して各受造物は其主の血に依りて清められたり、 \* \* \* 而して彼は第三章十四節に於て明言して曰く、各々の膝が基督の名に於て屈すこと云ふは心の從順を謂ふなり、基督は忠實なる者の中に在りて父に服従す、何となれば凡て信する者否凡ての人類は彼

の肢節を見做さなければなり、然れども未信者、猶太人、異邦人又異端者の中に在りては基督は之を服従するを謂ふを得ず、是れ彼の肢節の一部未だ信仰に服従せざればなり、然れども世の終に於て其肢節悉く基督を見しときは、即ち彼等の自体を見しときは、彼等亦基督即ち其本体に服従するならん、故に基督の全体は神及父に服従すへし、是れ神は萬物の上に主たらん爲めなり、*Ep. ad Anon.* 是れ即ち萬物の最終の服従を指し、猶太人も異邦人も異端者も基督の肢体たるを教ふるものなり。

是れ只孤立の例證に非ず、聖ゼロームの著書中恐らく他人の説も混するならん、彼が宇宙神教ユニヴァーサルイズムに同情を表するとを指示する例證幾んど百節あり、尙ほ吾人は紀元四百年頃聖ゼロームがエビフアニアス及不人望なるセヲフィラス等と共にオリジンは是れより先き彼は非常な賞賛したり、反對し、且つフリーエツトが指示せし如く (*Orig. ii. p. 159*) 人類復興の問題に關し全く沈黙を守りし事を看るべし、フリーエツトは言へり、假令

ひ汝が六百箇の證據を引用するとも是れ只ゼロームが自己の意見の變更せしを證するに過ぎずと、然れどもゼロームは會て其意見を變せしとあるか、若し變したりとせば何れの點迄變せしか、例へば彼が *Epist. ad Ant.* に於て終にオリジンの誤謬を言ひしも、大希望論大希望論を關して一〇言の論及するなく、且オリジン説を非難するときは、にも再度明白なる宇宙神教ユニヴァーサルイズムを教示する自己のエペソ書註釋を引用したり、*Epist. Ixv. ad Pam.* *Ixxv. ad Vigil.* 彼がオリジンを賞賛せし一例として彼はポーラに贈りし書中に左の如く言へり、オリジンが非難せられし其教理の新奇なるに因るに非ず、又現今狂犬等が托言する如き異端説に由るに非ず、只嫉妬に因るのみと、即ちオリジンを目して異端者と云ふは狂犬の一部ならずや、此最正統的ゼロームの口より此の如きの言を發するに實に吾人が注意を要する處なり。

聖ゼロームの著書が宇宙神教ユニヴァーサルの教説に充ちたるや確實なり、之を左に引用せん。

歴九〇二に於て死死后有罪靈魂の運命に關え實に下の如き活潑なる(且重要なる)記述あり、若しも靈魂が自己の安全を得へからずと失望し、神の目を避け極度まで逃れんと欲するも、神は其敵及復讐者なる古く且曲りたる蛇に命令し之を囓ましむへし、\*\*\*惡靈は苦痛と懲罰の方法によりて神神に復歸せんが爲め\*\*\*主の劍によりて撃たるへし註。——Natum iii. 2. に於て此著しき註釋あり、曰く世の終に於て惡魔及其軍勢は地の極まで恐怖して遁るべし、今惡魔及其軍勢が之を思慮する際に彼等が曾て捕へたる各物各物は再び持出され即ち救はるべし、\*\*\*尙ほ地の凡ての物質及其凡ての從僕は自から基督に服従せし后\*\*\*歡樂喜悅に導かるべし\*\*\*而して後詩篇六十八〇十八の主は高きに登り塵を塵にする註と云ふ教主の大勝利を完成すべしと。茲に其凡ての捕虜を惡魔より終に免れとむるを教ふるが如し、

此精神に於て此教父は言へり基督の最後に來るは罪(罪人)にあらざり(を亡)はさんが爲めなりと、故に「世の終に於て凡ての受造物ハ自由になさるべし」

In Hab. iii. 2, 10.

聖ゼロームが神の敵を滅亡すると其復讐とに關する教説は甚ゞ重要なる者なり、

「エフィラムよ、吾汝に何を爲すべきか\*\*\*吾は汝を塵と灰とに滅すべし、而して苛刻且殘忍なる宣告を發せし時\*\*\*父の愛は審判の苛刻を慰むべし\*\*\*何となれば吾が汝を打つは永久に滅ぼさんが爲めに非ず只改改化せん爲めなり」In Hos. vi. 6.「猶太人は思へらく原語は「審判」と譯し得るのみならず黄金とも譯し得べし、此意ハ彼等が曾てメヘナなりと信ぜし審判の谷は反つて罪の汚點を淨め、罪人の永久純金となりて殘るを謂ふなり」(註)是れ注意すべき語なり。彼又亞十二〇九を註釋して曰く「神が罪人を滅亡するは之を零落せしめんが爲めに非ずして之を改改化せん爲めなり、\*\*\*」

何となれば神若し無より萬有を造りしとせば、神が之を爲すは自ら造りし者、滅ぼさん爲めに非ずして、其惠によりて被造物を救はん爲めなりと、此等の詞ハビクトリナスの創造論を想起せしむべし。

今余は古代の一記者より全く大希望を表する數節を引用せん、此記者の詩篇註釋ハ聖ゼロームの著書 *ed. Paris 1624*, と結合せらるれども實に同様と看做す可らず。

神が敵を滅ぼすに關し彼は斯く記せり、詩家がエホメよ汝の仇は亡びんと言ひし時\*\*\*爾の敵たりし凡ての者は以後爾の友なるべし、人は亡びず敵は亡ぶべし」と (*In Ps. xlii. 9*) 之と等しく著しきは詩九〇五、爾は世々限なく彼等の名を消え玉へりの註釋なり、此教父は實に言へり、是れ彼等の罪を消し神に復歸するを謂ふなりと、茲に永久に消す云ふハ則ち改化するなり。又彼は言へり、惡魔は恰も神の刑吏なり、正しく歩まざる人々ハ惡魔に渡さるべし、何の爲に渡さるべし、永遠に滅ぼされん爲めか、然らば神の憐愍

は何處に在りや、慈愛の父は何處にありや、\*\*\*使徒は斯く言へり、吾れ罪人を惡魔に渡せり、是れ彼によりて苦められ吾に感化せん爲めなり」と (*In Ps. cxviii. 9*) 又詩二〇十二「彼の惡毒は速かに燃ゆべければなり」との語に關して曰く、此意味ハ各人の死に於て又は審判日の暫時の怒により彼等の速に打ち亡ぼさるべきを謂ふなりと、此惡人を速に打ち亡ぼすハホーロの所謂審判の日に暫時の怒により満足せらるべしとの意を包含せり、而して此意の句節はサタンにも尙ほ救免の望あるを表はす、最初蛇たりと汝よ、\*\*\*此詩人の言ひし所を見よ、\*\*\*汝は失望する勿れ、汝は悔改して直ちに神に歸れ」と (*In Ps. cxviii. 12*)

次にダイサスの監督たるダイオドラス(紀元三百七十八年)の名ハ古代宇宙神教の名簿より省く可らず、彼の有名なるアンテオケ學派の最大裝飾の一にして、其教説に關しては現今尙ほ吾人の親炙すべき點少なりとす。彼の生涯はナイシシン信仰の防禦に於て不屈の熱心を現はせし

を以て著しく、且つベシル、セアドレット、クリゾストム及サイリルの如く世人より賞賛を受け一般の尊敬を博して歿せり、セアドレット曰く彼は教會の小船將又不信の波浪に沈没せんとするを救へり。其著書多し。雖も今尙は存するものは只其斷片のみ、次の句節は彼の著書 *Deom* より引用する所なり——*ASSEM. Bibl. Or. iii. p. 324*

「悪人の刑罰は永久に非ず\*\*\* 然れども彼等は其爲せし惡意の多寡に依り或短期間苦難を受くべし、故に彼等ハ短期間苦罰を受くれども、不朽の幸福は限なく彼等を待てり\*\*\* 彼等に顯はさるべき恩惠の宏大なるは彼等の夥多にして重大なる罪惡の爲めに蒙るべき刑罰に超過すると遠し、故に復活は善人に對するのみならず又悪人に對する幸福なりと考ふべし。」  
吾人は次に紀元三百九十年ラフィナスが其信仰箇條の註釋に於て悪人の未來苦罰は暫時なるべしと確實に教へしとを擧ぐ、フーエット曰く彼は

は明白に斯く教へたりと、——*Orig. ii. p. 160*。彼は正人の榮光の永續と悪人の長き刑罰とを對照せり、其他吾人がラフィナスの意見を證明すべき貳箇の事實あり、彼のオリジンの著書の序文——*De prin.* に於て實ハ斯く言へり、余は彼の著書より予輩の信仰と一致せざりしものを除去したりと、然れども彼は其處に宇宙神教ユニツオレサリズムの甚だ明白なる確定を殘せしや確實なり、又信仰箇條に於る彼の著書中基督に依り凡ての靈魂の地獄より放免せらるべきことを教示せしや疑ふべからざるが如し。

予輩は次に紀元三百九十三年ノラの監督たりし聖パウリナスの語句を引照せん、(彼が心に信せし事を決定せんと欲するに非ず)

パウリナスの兄弟デルフィナスは、罪を犯して死せしが如し、然るにパウリナスハ此件を全く望なきとて見捨てず、聖アマンドスに乞ひ其死せる兄弟の爲めに祈禱せしめたり、是れ、神の寛大の露地獄に透下し、其處に燃ゆる

者を快復せん爲めなり」*Epist. ad Amen.* 彼は又基督に依り異教徒の滅亡せらるゝは其實彼等の治療なりと教へたり、神の鉄棍ハ「彼等を善真に改造せんが爲め、恰も粘土にて器を造る如く、彼等の心を碎く」と、此主義は論理上何れの點に違すべきか、何人も之を判定し得べし、蓋し基督ハ全世界の所有者たればなり、*Par. of Ps. ii.* 「一般の不従順は全く終るべし、是れ信仰に依り全<sup>○</sup>体を癒さん爲なり、故に全<sup>○</sup>世界ハ神の従僕となさるべし」*Jo. Carm. Ad Cyth. p. 494. ed. Ansberr, 1692.*

余は次に聖クリゾストムに論及せん、彼はアンテヲケの神學校に於て教育せられ、タルサスのダイオドロスの徒弟なり、彼の教育は其性質に於て明白に宇宙神教徒たりしに外ならず、而して吾人は凡百の證明を十分考定する時は、仮令へ彼は外見上通常の信仰箇條を教へしとするも、大希望説に尤も強き同情を表し且實に之を採用せしや疑ふ可きにあらず、何となれば彼が實に該信仰箇條を維持せしとの説は次に引照

する章句中一も説明すべきものなければなり、彼が未來苦罰の脅嚇は恐怖すべしと雖も次の如く容易に之を説明するを得べし、(一)此論者は大説教者がアンテオケ或はコンスタンチノープルの如き恐るべき不徳よ汚染せる市街に立ち、貪慾は古昔のソドムより甚しと説きたるより來りしものなり、(恐らく文明の低度に降りしとバイザンチン帝國の如きは何處にもなかりしならん。——*See Hom. ix. on Rom. v.*) (二)彼の用語の脩辭學上の性質及不明瞭の性質より來れり(三)心靈上の醫藥として詐僞を明白に辯護せしより來れり、是れ彼の著書中屢々發見する處なり、(a)吾人は亦彼がゼロム(及ヒエビファニアス)とエルサレムのヨハネとの間の爭論よ於てオリジン派に傾きしと非難せられし事實を見るべし、(b)又彼は罪に死せし人(悔悟せず)の爲に祈禱及施與を許せり、——*In S. Jno. Ser. lxi. In Cor., Sermon. xlii.* (c)且つ彼が熱心に宇宙神教徒たるダイ



オドラス及モブスエスシアのセラドラスを賞讃せしは吾人の忘る可  
らざる要點とす——*Fac. Pro def. tr. cap. iv. 2; vii. 7.* 以上の事實は少な  
くも彼が大希望に同情を表せし強き疑念を起すべし、故に彼自身の語  
より彼の説を集んに、羅五〇十六に關し彼は地獄に於て惡の永續する  
事と一致す可らざる語を用ひたり、聖ポーロの基督の働きの結果を語  
りしにクリンストム之に付き左の如く註解せり、

「是に由り死が根と葉とを拔去らるゝを示すは避く可らざるとなり(アダ  
ムの罪の消滅するのみならず、其他凡百の罪惡消滅せらるゝと)……死は全  
く滅亡せらるゝを以て一も痕跡を残さず、且其陰影を認む可らず、又彼は「神  
は万物の上に主たらん」との語に就き左の如く言へり、或人は主張せん、ポー  
ロは此處に於て惡の廢滅を断定せり、故に今后凡ての者喜んで神に服従し  
而して一物も抗拒し又は惡の權威に服せざらん、蓋し罪既に存在せざれば  
神の萬物の上に主たるも明なればなり」と、彼の註釋を結ぶに以下の語句

を以てせり、蓋し惡の除去せられしとき死は更に止むべければなり」と、此罪  
の廢止は正に大希望と同一の意義なり、故にポーロが哥羅西書第一章に於  
て(*Hom. iii.*)基督は初め万物を創造せ、後万物を調和すと言ひしに就き、クリン  
ストム曰く基督が万物を完全に調和するは必要なり、故に万物は決して再  
び基督の敵とならざるべしと、又第五章十八節に於て曰く、教會は全人類の  
爲めに立つなりと、余は之を讀んで此等の語句は其自然の意味に於て宇宙  
神教を包含する者なりと結論せざるを得ず、又以弗多第一章(*Hom. i.*)に於て  
此教父は言へり、人も天使も凡て一頭の下に服従せらるべしと、此く万物(宇  
宙)悉く上より必要な連絡の束帯を以て一頭の下に來れば\* \* \* 則ち茲  
に統一なる者あらん、約翰傳十二〇卅二に「我萬民を引ひて我に就せん」と言  
へり、基督若し「我舉らん」と言へば彼等(萬民)が信するならんとの意を述べし  
や明瞭ならざれども、彼等信すべしと言へば双方を結合せるものなり。

次の拔萃は再び復讐、刑罰、及び死の説を教ふる者にして明かに大希

## 望論の方向を教示するが如し。

「汝は何故に死せし者の爲めに悲むか、彼が悪人たりし爲めなるか、然れども此理由を以てせば汝は神に謝すべきなり、蓋し彼の悪業は停止せられたればなり」*De dom. Serm. xxx.* 「死は神が吾人に恩恵を降さん爲め命し玉へるものなり」*\*\*\** 神は其復仇(*vindicta*)に劣らざる恩恵を以て吾人に對する配慮を示せり、是れ則ち吾人の主人なり、彼若し復仇なき(無罰)罪が一も吾人に惡を爲さざるを知れば、決して吾人に復仇を課せざる可し、*\*\*\** 吾人の罪惡を滅絶せん爲めに、*\*\*\** 彼の懇切に復仇を課せり」*In Gen. iii. Hom. xviii.* 「刑罰若し犯罪者に惡を與ふるものなりせば、神は決して惡に惡を加へざるべし、*\*\*\** 然らば刑罰は罪人に對し決して惡ならず、然れども罪人に罰を課せざるは恰も病人を癒さざるが如し」*In Rom. ch. v. Hom. ix.* 「神は罰するときは罰を免れしときも等しく、讚美せらるべし、是れ何れも善より起ればなり、……然らばアダムを樂園に置きし時も之を追放せしときも同等に神を讚

美するを正當なりとす、而して感謝するとは獨り天國の爲めのみならず又地獄(*Gehenna*)の爲めなり」*In Pa. cxlviii. 10.* 又次の文を看よ、「神若し大洪水の時不可療的病者を罪より制し、醫藥として普通の自然負債を用ひ、彼等を水に依り容易に死せしめざらんには、果して如何なる大善を與へんとするか」*In Pa. cxlv. 8.* 「神は万事を愛に依りて爲す、即ち神は人を惡まん爲め之を樂園に置き、又人を惡まん爲め樂園より之を追放せり、*\*\*\** 神は彼を惡まん爲め夫の火をソドムに下せり——又使徒ユダの「永遠」の火を下せり」*In Pa. cxl. 1.* 聖クリゾストムの教旨は所謂赦す可らざる罪も尙ほ全く赦さるべしとの状態を示せり、彼れ吾人に告げて曰く多數の人は有罪なるも爾後悔改に依て赦されたりと——*In S. Matt. xii. Hom. xlii.* 予は思慮あり且徧頗なき讀者に對し此教父が決して「何時迄も」永久等の語を使用せしに依りて其教説の深味を考定せんとを勸む。

余は再びクリゾストムが基督に依り如何なる各靈魂も地獄より放免

せられ且地獄其物も終に破壊せらるべしと明白に斷言せし事を擧ぐ、  
但し予の只彼の著しき語句の要略を掲ぐるのみ。

彼曰く、基督は嘗に獄門を開くのみならず又其黄銅門を片々に破壊すべし、  
是れ其獄を不用ならしめんが爲めなり、其處には最早門戸なく、何人此に入  
るも拘留せらるゝとなし、神の滅ぼせし者は誰か之を再建す可んや、地上の  
諸王は實に諸罪人を赦す可しと雖も尙ほ其獄門を壊るとなし、然るに基督  
は黄銅門を片々に破壊せり、基督は極めて暗黒不快の地獄に行き之を天國  
に變し、其凡ての富即ち人類を移して彼の王庫に納れん、此點に於ても基督  
は又遙かに地上の諸王に卓絶せり、何となれば地の諸王は自己の使臣を送  
れども基督は自から捕虜を赦さん爲め獄裡に行けばなり、— *De cem. et cruce.*  
*Ser. xxiv.* 彼又言へり「吾人の主は獄裡にありし時死によりて囚虜となりし凡  
ての者を放てり」— *In magn. hebdom.*

吾人は今有名なるモブスエシアのセアドーア(紀元四百七年)に來れり、

彼は生涯寛大なる信仰の教師として非常に名を博せり、ドルナー曰く  
*Pers. of Christ, l. 50.* 彼はアンテヲケ學派の王冠にして且つ頂點なり、而  
して神學上拔群なりしより東方の主と稱せられたり」と。

セアドーア及(恐らく)ダイオドラスは百二十五年間其名譽ある墳墓に安眠  
せし後、英國教會より是認せられざりし集會即ち第五大會に於てチスリト  
アンなりとして賞罰せられたり、此會議の眞實の建議者はオリソン派の人  
々にして、セアドーアがオリソンに對し敵意を有せし理由を以て奸策を行  
ひしものなれば、宇宙神教ユニヴァルサルイズムの疑問を起せしとなし、ダイオドラスの罰せられ  
しは確實ならず、フォシアスは斯く言ふと雖も實際ダイオドラスの名は此  
會議の議決書中に記入せるを見ず、(一)セアドーアは同時代の人々に卓越し  
名譽を貢ふて生死せるハ確實なり、クリソストムがセアドーアに贈りし有  
名なる書に於て讚辭の充満せるを見よ、— *Epist. cxiii.* (二)斯の如く疑はしき證據  
を以て會議より死後の攻撃を取けたるは卑劣なる嫉妬と奸計に基くもの

多きや疑を容れず、(三)聖オウガスチンの如く神の品性を汚せし者ハ之を罰せざるに、(セオドリアの場合に於る如く)教會の前に争點を定め恐らく注意せずして神性を記述したる(然れども眞理に熱心なるより起れり)名家に對し嚴刻なる推測を下すは悲むべき事なり、(四)フーエットの誠實に言へり、若し只無意に異説を教へ又は之を創唱し且之を撲滅すべき準備を爲したる(教會が一度告示せよと之を主張するも異なり)人を目して異端者とせば、則ち數多の正統派の教父サイプリアン、アイレニアス等の如きも異端者と稱すべきなりと。—*Orig. ii. ch. iii. p. 195.* 且(五)セオドリアの著書を最も善く校訂したる者の言へる如く「吾人はセオドリアを知るに従ひ益々彼が全く加特力教會に背くを知らざりしとの確信を増す」や確實なり、(六)彼を目するに異端者を以てするは無限罪惡説の主張者に最も不安全の證據なり、斯る獨斷ハ深く汚れたる徽章を帶ぶるものなり、其最初の有名なる主張者は誰か、——異端者ターチュリアン其人なり、——偽クレメント派の創唱者は誰か、——異端者が偽造者か、無限苦痛説の教師か、——古代の此教理の勇將テシ

アンは如何——ノスチツクの異端者なり——ラケマンシアスは如何——異端の縁邊に徘徊して、邪教の俗人なり——而してカルグ井ンの殘酷なる異端の眞源泉ハ誰ぞや——オウガスチンに外ならず——而してメラギアスは如何——一の異端者にして無限苦難説の勇將なり(七)然れどもセオドリア及ダイオドラスハ實にキストリアン説を教へし。此事情を了知する人々の意見に據ればシリアン教師等もキストリアスは其責に任す可らず、而してキストリアン教として知られたる教理はキストリアス之を教へしにあらす、又シリアン教會之を可納せしに非ずと——*Stand. u. Tisch. Archiv. i. Niemann*—曰く「セオドリアは神の降生に關する教會の教理を誠實に採用せり」と——(教會史四章百十頁)彼の編輯者スウヰフト曰く彼は教會が信仰すべしと宣言せる箇條に付き堅固なる防禦者たりと、(八)實際上英國教會が強く争論せし(Chetokos)なる文字を廢棄せしハ確實なり(九)キストリアスの證據は其キメシス(Nemesis)を來し、祝福を受たる處女の崇拜を、其恐る可き弊害を、イウマイチスの異端との道を開くの助となるや亦確實なり。

セヲドーアの無量の感化の彼の教系の根底を横はる大希望論を甚た  
 廣く擴布せしと確實なり、彼の敵亦之を一過失として彼に攻撃を加へ  
 ざりき、是れ注意すべき一事實なり、而して彼は夫の刑罰を永遠なりと  
 論せしが、又或場所に於ては有限なりと述べたり、此の如き語の使用は  
 充分の證據に非ざるを見るべし、然れども此點に關して又一の攻撃を  
 見ず、彼はアンテオケ學派と共に復活は其自身と凡てに對し恩惠なり  
 として大に之に重きを置きたり。

「無限苦難の機會は昇天する者に對し大なる幸福なりと考ふる如き大愚者  
 は何人ぞや——*Frag. Ex. lib. cont. pec. sig.*「凡ての人は基督と共に昇天す可き希望  
 を有す、故に肉體は不死を得て然後惡癖除去せらるべし」——*In Rom. vi. 6*彼は復  
 活に就き下の如く言へり、「然る時吾人は罪より免かるべし、蓋し聖靈の惡み  
 によりて不變となされ、吾人は罪より免かるならん」——*de viii. 2.*「神は基督に  
 万物を反覆し」——恰も彼に依り簡便の再新及全創造物の復興を爲すが如

し\*\*\*此事ハ來世にも起るべし、即ち全人類及凡て道理を有する時 (*circula*)  
 彼を正者なりと仰き而して相互の一致と堅固の平和を得べし。——*In Eph. i. 10.*

紀元四百十二年アレキサンドリアのサイリルは各靈魂基督を依り地  
 獄より放免せらるゝとを數々教へたり、

「惡魔は將來に於て百事を爲すべき全力を剝奪せられたり\*\*\*惡魔の勞  
 働により零落に陥りし人の靈魂は地下の門より出で、且獄程の隱處を脱し  
 て還れたり」と——*Hom. pasch. vi.*「基督は地獄の最低幽所を過き、其處に於て諸靈  
 魂に説教せし后、其力に依り俘囚を救出せり——蓋し死は万民の爲めに  
 羊仔たりし基督を食ひしとき、凡ての人々を彼の中に又彼と共に吐出した  
 り\*\*\*罪惡全く滅亡せられし時は死亦全く消滅せざる可んや」と——  
*In S. Jo. i. 29.* 又避難の市街に關し下の如き言あり、「罪惡に沈淪せし人々は恰  
 も自己の靈魂を殺す者なりと謂ふは恐らく不當にあらず、\*\*\*故に人の  
 惡靈は肉體及世界より放逐せられ、避難市街に於る如く死の隱所に住居し

長日月を費せり、然れども祭司の長基督死して地獄に行き其束縛を解きし時辛ふじて放免せられたり」と——*De adorat. lib. viii. ad fin.* 此形容ハ味ふべき言なり。基督が陰府を訪ふ前に死せし(凡ての)罪人は避難の一市街として其處に行き、基督に依り放免せらる、何となれば彼等は假令ひ罪人たるも惡に傾きたる性質に由り止むを得ず罪を犯すに至りたればなり、(彼は此く言へり)然れども果して然らば何を以て基督の死后其事業の効驗乏しき明に想像し得べきか、基督の死により、凡ての邪惡は其口を止め、死の法は減ぼされ、凡ての罪ハ取除かれたり、\*\*\* 斯く凡ての罪惡取去られし時、吾人は正に斯く言ふべし、曰く死よ、汝の刺は何處にありや」と——*In Hos. xiii. 14.* 「基督に依り諸教父等の潔き團體否基督の死せし前に死したる全人類も全く救はれたり、是れ彼は凡ての人の爲めに死し、而して凡ての者の死は彼に依りて取去られたればなり」と——*Glaph. in Lev. ii. ad fin.*

基督の前に出でたる凡ての人類の終に救はるべき事に關しサイリルの説く所は公平明白なり、予は此教説が大希望と論理上相分離するを

見る能はず、予は次の引照を以て之を結ばん、罪の勢力は分離せられたり\*\*\* 罪より來りし惡即ち死ハ其根底より拔去られたり」と——*Hom. Pasch. xxiv.* 聖アムプロウスの著書中には(*Paris, 1562*)チュリンのマクシム(紀元四百二十二年)の九十二の説教を含有し、著者の左の二件を教へしが如し(一)各靈魂地獄より放免せらるゝと(二)神の死を課するは罪人を改化する爲めなりとの有味の意見是れなり。

基督の復活に依り地獄は開かれて………其中に含める者を放棄せり………  
 ……斯くダビデは此日の祝會に凡ての受造物を招けり——*Ser. iiii.* 彼附加して曰く、其祝會は天と地と地獄に纏く、基督は凡ての信者の罪を亡ぼせり、彼は使徒が「世の罪を取去る神の羊仔」と言へる如く、凡ての罪を預ひ必ず凡ての罪を亡ぼさる可らず」と——*S. H. i.* 聖書に曰く全人類の救ハ救主の腹に依りて得たり………是れ全世界の永遠の安全なり」と——*S. iii.*

吾人は次に紀元四百二十三年セアドレット、ゼ、ブレッズドを擧ぐ、此大教

父は宇宙神教徒たりしや疑なし、彼はシリアのサイラスの監督にして、予が引證すべきアンテヲケ學派の最後の代表者なり、セアドレットの恐らく當時最も有名且最も博學なる教師たり、而して高尚なる智識に高尚なる品性と才能とを結合せり、予輩は彼の著書に於て大に卓越せる所説を見る、即ち復活レザレクションは是れ復興レストレイションなり、又實に人類の全性を不朽と榮光に導き従て苦痛を免かるゝ心靈の一方なりと、此説は數多の教父が維持せしものにして實に諸種の口碑的信條を破壊するものなり。

聖ホーロは「亡ぼさるべき最終の敵は死なり」、彼は万物を基督の足下に置けりレザレクション、最後に附加して曰く、是れ神が万物に主たらん爲めなりホーロ、現今の生活に於て神は其性質限なきが故に凡ての者の中に在れども凡ての者に主たらざるなりホーロ、然れども將來に於て(復活により)可死性終りを告げ、不可死性許されし時、罪は最早其位地を有せずして、神は凡ての者の上に主たるべしホーロ——*In Eph. i. 23.* 蓋し基督は其不滅の約束に依り罪の力と

全ホーロ滅ホーロ亡ホーロしたり、罪は不滅の体を懐ホーロますホーロ能ホーロはずホーロ——*In Heb. iv. 26.*「來世に於て肉體不朽となされし時は罪の汚穢を入る可らず」——*In Col. iii. 11.* 昔前十五〇二十に於て被記して曰く、衆人は實に(初果)に續く可しと、是れ人間の全體を指して言へるなり、セアドレット曰く蓋しアダムに依り凡ての人の死せる如く、人類(萬民)の全性は主基督に従ひ復活を享る者となさるべしと、此意味ハ長文を以て説明したれども余は只要略を擧るのみ、疑なく善と惡との間に差違あるべし、故にホーロハ言へり、各人その次序に循ふホーロ、(此意は審判に依り其清濁事業を爲すまで復活を延期するの義ならん、而して后終局即ち一般の復活來り、其時基督は其王國を渡し、凡ての人をして神を知らしむ、蓋し彼は全く萬人を服従せざる可らず、是れ果して何の意や、使徒は腓三〇二十一に書して曰く、我濟が賤しき體を化て其榮光の體に象らしむべしと、然れども予は如何にして神に服従すへきか、使徒附加して曰く、是れ神が凡ての者の上に主たらん爲めなり、故に予は人類の服従に依り父に服従するなり、(是れ完成の時なり)吾人は神に依り生活するが故に、神は實に凡て

の者の中に在り、然れども神は凡ての人に服従せられず、蓋し神は之を畏るる者によりて服従せらるゝなり、……此等の者に於ても神は全く主たるに非ず、是れ何人も罪なきに非さればなり、然れども來世に於て腐敗終局を告げ不朽性を許さるゝ時は、既に苦痛の場所なくとて、苦痛全く除去せられ、罪の一形跡だも殘存せざるべし、斯くて神は凡ての者の上に主となり、凡ての者は墮落の危険を免れて神に改化し、而して邪惡に陥らざるべし。腓三〇二十一に付て彼は言へり、基督は腐敗と死とに終りを置き……凡ての人をして彼を仰かしむと、同一の精神を以てセオドレットは記して曰く、基督は最初の果となり、人(全人類)の全性は眞神を知り、神の恩愛を讚美すべし。—*In Ps. lxxx. 10.*「其後詩人の更に明白に歌へり、地上の諸王は彼を尊敬せん」と、實に現今或人は喜んで崇拜すれども其他の者の復活後に之を爲すならん、蓋し吾人は未だ萬物神に服従するを見ず、雖も將來凡ての膝は彼に屈するならん」と。*In Ps. lxxiii. 11.* 此前後の文勢に據れば、凡ての王は、凡ての人民」を指せるなり、而してセオドレットの説に據れば、凡ての者基督に服従する

とは彼等の歸順及崇敬を謂ふなり。

最後に他の二點に關し彼の教説を擧ぐ(一)彼は靈魂の地獄より免かるゝを明言せり、基督サタンに言ふ、吾汝のみ幽閉せむ、汝は汝の凡ての從屬を正に奪ひるべし\*\*\*汝は既に含みたる凡ての者を吐出すべし\*\*\*余は凡ての者を死より免れしむべし、是れ吾れ人間の爲めに負債を償却すればなり\*\*\*既に負債を償ひたれば其爲め幽閉せられたる者の牢獄より放免せらるべきは當然の事なり」と。*De Prov. Or.* (二)彼は死は醫藥なり刑罰に非ずと教へたり、彼の大に歩を進めて論せり、曰く神は少許の食物を怒り罰として死を課せりと云ふは、是れ嫌惡すべき(異端)マルシヲンを寫せる者なりと、余は讀者が此説に注意せんとを勸む、セオドレット曰く神は怒により働く者なりと想像する者は神約の秘義を知らざるを表はす者なりと、此教説の果して口碑的信



條の如何なる變形と相調和するを得べきか、最後は引用するもの左の如し、神は其怒りの后、其審判を終ふべし、是れ神は終局迄怒り又は永久に怒りを保つとなければなり」と。——In Is. xiii.

余はラヴェナの監督聖ペテロ、クリソストマス(其雄辨なるに因り此名あり)——紀元四百三十三年——の著書よりラザロとダイヴスとを隔つ所の深淵に關する説を左に掲ぐ、

「陰府に於て禁錮の刑に處せられし者は、基督の恩恵に依りて贖はれ、聖教會の媒介に依りて此不幸を免るに非されば、聖徒の安息に入る能はざるべし、故に教會は罪を宣告せられし者を復して之に恩恵を與ふ」と。——Ser. cxviii.

此有味の言は他處に於て失迷者の運命に關し強き語を用ひたる者より來れり。又彼は「王國來る」と云ふ語を説明して曰く、「吾人は大惡の創造者(サタン)亡滅し全世界を全受造者が只基督の全き榮光に依りて支配し且勝利を得るの日來らんと祈る」と。——Ser. lxxxi. 「吾人は惡魔亡滅し、罪止み、死の滅びん

とを祈る、\*\*\*神凡ての人類中に生活し、働き、支配し、萬物の主となるの日は\*\*\*即ち是れ神の王國なり」——Ser. lxxvii. 是れ萬惡將來に於て全く廢止せらるべき先見を含むか如し、故に彼は「醉麴の譬喩」に於て曰く、「女が死の醉母に依りアダムに於て人類全体を腐敗せし如く、又復活の醉母に依り吾人の肉の全塊(全人類數)を基督に於て回復すべし」と。——Ser. cxviii. 彼は百正の羊の比喩に就て曰く、「此一正の失はれし羊はアダムに依り失はれし全人類を現はす、故に善牧者は此一正を逐ひ之を求む、是れ一に於て全体を發見し、一に於て全体を回復せん爲めなり」と。——Ser. cxviii. 最後にラザロの蘇生に關する著しき一句を引置せん、地獄なる者が此結果に關し神と對話するも左の如し、曰く、「若し余ラザロを逃れしめば汝は予が保管せる凡ての者を失ふべし」と、基督答へて曰く、「チー父よ、予はアダムの負債を拂ひ、アダムに因り陰府に死滅する者をして予に依り爾に生を得せしめんと、三位の神悉く之に同意し、而してラザロは墳墓を出つるの命を受け、地獄は基督に従ひ凡ての死者を彼に渡すべしと命せられたり」と。——Ser. lxxv. 若し論理的に講究せば此等の

教説は宇宙神教を包含せり、又少くも俗説を教ふる如き文字に反對すこ謂ふべきなり。

予は今他の部分に就き甚だ重要なる證據を考究せんことを讀者に乞はん、最初五世紀間二ヶの大信條起れり、使徒信經及ナイス信條是れなり、而して初め四回の總會はナイス、コンスタンチノブル、エペソ、チャルセドンに於て開かれたり、當時宇宙神教の所説弘布せりと雖も、一語の非難も此等の會議中に起らざりしは頗る重要な事實なり、而して一人として信仰ヶ條中に無限刑罰の信仰を包含すと思ふ者なし、又來生の問題も明にコンスタンチノブルに起り、信條中に其條項を附加するに至りしが、一も無限刑罰に關するものなかりき、此等の沈黙は宇宙神教が一説として當時完全に維持せられたるを知るべき争ふ可らざる論證なりと謂ふも毫も矛盾の恐なし。

「アサナシアン信條には『永遠なる語を用ふ、此語ハ anōnōs を表する者にして聖書に於てハ其意之に外ならず、而して此永遠は anōnōs の必要又は通常なる意義を表するに非ざるや明なり、予輩は此事を考ふるに共に此信條が——其公會的權威を欲き——其比較的以後日の作なるに——其起源の不確實なるに——其東國に於て採用せられし事の疑はしき——に拘はらず、此信條は實に大希望を全く一致するものなるを知る。」

「然れども是れ實に證據の小部分なり、若し此會議の沈黙を以て意味ありせば次の事實は尙更に意義ある者なり、吾人は其種類全く一樣にして且基本たるべき教權を有する二ヶの證書に示されたる教會の信仰を有せり、使徒信經及ナイスン信條と稱する者是れなり、此等の信條に在る證據の價値を正しく計算せんか爲め吾人の記憶すべき事あり、即ちナイスン信條を今日の形体に組成せたる第二大會議に於ては、ナシアンザスの聖クレヨリー之が會長となり、(其意見は二百三十七及四十一頁に論せり)當時採用せし新條項をナイスン信條に加へ、而して其終りに『予ハ未來の生命を信すてふ有味の語

句を添へし(生命なる文字を記し)而して其他に何物をも含まず(時の主事者はニッサの聖ケレゴリ)なり、其言(二百四十二及五十一頁を看よ)に據れば、彼が普及救済説の勇敢なる主張者たりしを知るべし、此等の古代に於て教會の信仰に就き一層意味ある者は何ぞや、乞ふ事實を見よ、信仰を定むる義務ハ大會議に於て教會より有名且明白なる普及救済説信者に主として委託せり、其定義に曰く、予は未來の生命を信す、斯の如き場合に於て斯の如き事を教會に傳へし者は大希望に非ずして何ぞや、而して此等の語が信條中に占むる位置を注視せよ、同一の文句が使徒信經に於る如し(此信條中、地獄に降るしてふ語句の大意に關してハ余既に論ぜり)此語は信條を結び恰も其全体を總括せり、此信條は大創造者を信するとの語を以て始まり、父、子、聖靈、救の働き、神子、降生等に及べり、然れども基督教眞理の大排列は兩信條共に永久の生命を信するを明白に確言して終れり、是れ恰も兩信條共に凡ての基督教の眞理ハ此點に導き、凡て基督教の希望ハ此點に登り、生命ハ永遠にして死ハ永遠に非ず、と云ふ事を宣言するが如し。

吾人の今や第二期の終りに達せり、是れ吾人の討究に含める三期中最要なるものなり、故に此點より吾人の経過せし論據を回顧するを可とす、吾人は宇宙神教ユニヴァーサルの潮流(非難を距ると違し)充滿し、膨脹し、擴布するを看たり、教會史の有名なる時代に於て第四世紀及第五世紀の初年に至るまで、宇宙神教ユニヴァーサルは東西基督教徒の多數の信條たりしが如し、加之恐らく大多數の信條たりしならん宇宙神教ユニヴァーサルは最有名なる神學校に立脚地を占め、アレキサンドリアアレキサンドリア其學校に關連し、又メレスマイン、カバドシアカバドシアに興り、剩さヘナリシンの教説に正反對を爲せしアンテチケにも到達し、古代の羅匈諸教父を融解せしめ、而して其教師等の名簿中に(少なくとも、其同情者ハ)は初代基督教の最大時代の最大人名の多數を占めたり、福音の到達せし各地よりは、例證續々彙集し、基督が残りなく各靈魂を陰府より放免するとの信仰を吾人に證せざるはなし、而して吾人の東西兩部よりゴウル及アレキサンドリアより羅馬、ミラノ、メレスマイン、アンテチケ、カバドシア、シリシヤ、コンスタンチノール、アル及遠隔せるユーフレートより、或は大希望を公言し、或は公平なる推度により、

大希望を包含する所の教義を聞知せり。此教説は新約聖書の言語を活用せし處、即ち希臘大教父等の中に在りて最強なりしを看るべし、即ち教會の最大世紀に於て最強なりしが、智識と純潔と共に衰ふるに従ひ次第に傾きたり、之に反して無限刑罰説ハ新約聖書を原語にて讀まざる地方と、教會の最も腐敗せし時代とに於て最も強く教へられしや確實なり。

注視せよ此宇宙神教は聖書に基きたる凡ての者の中、最要にして主たるものなり、即ち凡て神の潔き預言者等に由て教へられ、詩人等に由て反復せられ、而して新約聖書に於て分明に反響せられたる、万物復興の約束に基きたるものなり、是れ最重要點なり、其他尙ほ近世の教説に於て重大と認むべき點あり、是れ多數の著名なる教父の教へし所にして、即ち死は刑罰に非ずして實に一の治療なり、又實に彼の大陶工が最初の美形に回復せんが爲めに自己の手工品を改造するの謂なり、且つ罪人の亡滅とは單に罪の亡滅を謂ふなり(罪は亡び人は生活す)との教説

是れなり、斯る教義は單一の例に於るも尙ほ重要なりと雖も吾人は茲に續々證明を有せり、即ち希臘語に習熟し且之を活用せし人々は同一の著しき觀念を反復説明し、死は刑罰に非ず只天の技術家に依り吾人の性質を改造し且罪を癒さん爲めなり、又神に依り罪人の滅亡さるとは損失に非ずして利得なり寂滅に非ずして改化改造なりと教へたり、余は次章に於て再び此點に歸り古代の諸記者より新鮮の證言を引用せん。

予は既に古代に於て宇宙神教が東西に弘布し寛大なる信仰と全く調和して教へられしとを充分に證明したり、然れども今茲に三ヶの證據を掲るを可とす、此證言は全く拒絶し難し(余は聖ベシルより左の言を引用せん、曰く、人類の團塊、即ち基督教徒は刑罰を受けし者には刑罰の終局あるべしと言へり)と(路十二〇四十七及八を引用す)——Cono. xiv.

*De fut. judicio*. 著者は此説を主張せり、彼の語は有限の刑罰の通説たりし事を證す、又彼は此説が信條に反對せしとは一言も論及せざる所なし、上文は猥りに挿説したる一書 *Asceitica* より引用したる者なれば、余は之を以て確然ベシルの説なりと言ふに非ざれども、古代の證據たるべき價値は變更すべからざるなり。

又聖ゼロームは是に勝りたる適當の證據ある可らず、第四世紀の末頃に記して曰く、余は知る、最多の人はニキベと其主の話に據り、惡魔と其凡ての理性的動物の終に赦免せらるゝと了解すべし」と——*In Jon. iii.* 今若し多數の人各惡靈の終に救はるゝを信せば、聖ゼロームの時に於て凡ての人或は殆んど凡ての人々か人類普及救濟の最も適當なる教理を信じたりと謂ふも亦何の不可あらんや、然れども茲に稍々時日後れたれども同等の價値ある他の證明あり、聖

オヴガステンが吾人に告る所左の如し、彼の日に當り墮落者の永遠の刑罰を憐み且つ此事なきを信せし者は、或一部の人のみならず、更に多數若くは過半数を占めたり」と——*Encliv. 112* 之に加ふるも吾人はドミシアンユニウスの證明を示さんとす、此證明は間接なりと雖も恐らくは一層有力ならん。

此の如き證言の意義は實に甚大なり、彼等は凡て重要な事實、即ち宇宙神教は第四世紀及第五世紀の一部に於て基督教國の半数或は過半数の信仰にして西部に於ても然りとの事實を確言せり、聖オヴガステンの西部の爲めに語り、聖ベシルとドミシアンは東方の爲めに述べ、聖ゼロームは其特異なる位置よりして双方を代表せり、若し斯く數多の教父の言引用せし如くを根據としたる證明を以て尙は疑を決す可らずとせば、焉乎何事をも満足に證明するを得べけんや、而して此の如き證

據を嫌ふ故に之を拒絶せんとする僻見は實に無望固陋と謂はざる可らず。

次の時代に於て無智の人民蔓延し、各種の迷信増加し、全く腐敗して放蕩なる人民貪慾魯鈍の僧侶と共に増加するに従ひ、漸次に舊來の高尙なる信仰各處に衰退、智識の衰退と腐敗の増殖とを殆んど精密に比例して衰退せり。せしは怪む足らず、而して慘酷不公平なるオウガステンの神學の跋扈と、尋て煉獄説の發達したるとに由り、西部に於て大に此衰勢を促せり。第十世紀に於て西部諸國暗黒の頂點に達せし時、學術及道德の腐敗したる適當の觀念を讀者に與へんとすると至難の事にして且余白の之を記すべきなし、但し當時流行の信條すら吾人近代の口碑と比較せば慈愛に富み、即ち死後に於て希望の門の少許の大悪人を除く外凡ての者に廣く開かるべしと爲せり。

予は今再び引證を爲さん、予が已に述べし理由により讀者は吾人が今討究せんとする時代に於て引證前の如く夥多ならず且つ著明ならざる所以を理會し得るならん、此時代の(既に區分したる第三期)第五世紀頃より十一世紀又の十二世紀に至る、余は頗る有名にして且ヘルミエネの監督たりしガラシアのドミシアンドミシアンの告白を之に加ふべし、彼がビギリアスビギリアスに與へし書中に左の如く言へり、彼等は最多の聖潔榮光の教父等の唱ふる教理がアレキサンドリア先在及復興アレキサンドリアに關し大に進歩したる理由を以て急よ此人々を破門せり、而して實にオリジンの託言を以て之を爲せり、然れども是に由りオリジンの前オリジンの前にあり或は後に在りたる凡ての聖徒を破門せり、と——*Pro def. trinum. cap. iv. 4.* 其前後の文勢より見ればドミシアンが凡ての悪靈の救濟を信したるや明にして記臆すべきの事實なり、實に吾人は此信仰の尙は後代にも存在したるを見るべし。

茲に余が簡短に引用せんとする證據の三分派あり(a)第一、吾人は東方諸國に廣く散布したるネストリアスの徒が大に宇宙神教ユニヴァーサル・リリジヤンを教へたる良證を知れり——See ASSEMANI, *Bibliothèque Orientale*. 又彼等のネストリアン教は此特別の意見と甚少き關係を有するに非ず、即ち彼等は其說をネストリアスより導かずして當時の教會の通説より採用したるを以て證據とするに足れり、ウエルスのデイン曰く「ネストリアスの非難を受けし特異の點は來世論の形式と關係を有せざるや明なり、且其說はニサのグレゴリーの如き疑ふ可らざる正統派の人々より導かれたるなり」と——*Spirits in prison*. (b)然れども次に第六世紀に當りエルサレムと死海との間の荒野に建設せられし諸寺院に於て一強派あり、ドミシアン(今引用したる)其首領と爲り、凡ての靈魂の復興(オリジンの他の教説と共に)を教へしと云ふも亦確實なり、(c)更に今考究せんとする時代

の諸記者より基督に依り如何なる靈魂も地獄より放免せらるべきとを教へたる數多の證據を引用するを得べし、予は紀元四百五十八年コンスタンチノープルの大教長ゼンナデアスの所説を引用せん、

「初果は全群を得べし而して身体の殘部は頭に従ふべし \* \* \* 蓋し基督は我若し擧げられなば凡ての人を余に就らせんと言ひなればなり」と——*Rom. ch. viii. 34*. ゼンナデアス亦數多の教父——(次章を見よ)——と同意見を有せし如し、即ち墮生の其中に罪及び苦痛より免除せらるゝを包含すと思へり、「吾人に不死、不朽、不覺痛を與へし神に謝せよ」——*ib. vii. 24*. 最後に余の見る所を以てせば彼の羅八〇十九の註釋に於て万物革新の日あらんとを述べたり。尙ほ他の章節を引用し得るも雖も今直ちにシーザリアの監督アンドリヤ(紀元五百年)の所説に及ばん、彼は(未來の)大默示的讚美歌を次の如く記せり、曰く「生活し或は單に存在する覺るべき又は感すべき(即ち見るべく又は見るべからざるもの)凡ての物により、神は(彼等に)自然なる談話の法により

凡ての造主と崇めらるべし」云々——*In Rev.* v. 18. センナテアスもアンドリウも相符合せる著者にあらず、彼等は恐らく宇宙神教ユニヴァーサルを教んと欲せざりしならん、然れども以上の如き引用文ハ茲に記するに足るべく、且無限の苦難及罪惡の教理と調和せしむるを甚た難し。

吾人は今宗教思想の歴史中著明なる一事件又近つきたり、第六世紀に當りダイオニシアスの著書所謂アレヲバガイト出版せられたり、此等の著書より發せし感化力と其深遠秘密の語勢は極めて宏大にして、真正の意義より言へば今日に至る迄尙は繼續せり、教會の崇拜益々物質的に傾ける時に當り、思慮ある人々は喜んで外部の表徴を拒絶するとなく之を精神的に化する神學に傾向せり、此等の著書に包含せる教系の吾人をしてアレキサンドリアの古代の教説とプラトニ學派を想起せしむ、而して彼等の如く萬物皆神より出で凡ての汚點を潔めて神に

歸するとを斷定し、實ユニヴオレナリズムの倉庫を形成せり、紀元五百三十三年に此等の著書コンスタンチノールに於て始めて出版せられしときの攻撃を受けたりと雖ども、批評なき時代に於ては之を確説なりとして大に世に信せられたり、斯く使徒時代に屬する者と認められ弘く其感化を及ぼせり、殊に有名なる二人の場合に於て然りとす、其一人は紀元六百四十五年コンスタンチノール近傍の一寺院の長なるマキシマスなり、此人は當代の最有力なる神學者にして其他の一人ハゼー、エス、エリゼナと云ひ二世紀後チャールレスジバルドの朝に於て教授を爲し假令ハ學者中の先進に非ずとするも最も鋭敏なる人なり、斯く東部は活動豊富の刺激を冷淡なる西部に傳へ、一層神聖なる希望を以て西部の狹隘なる信條を温め、今や嚴酷なる亞弗利加派と相觸接するを見るべし、



予は次の簡單なる拔萃を加へて所謂ダイオニシアスの著書の趣意を示さん、

「各生存物及生命 \* \* 各權威、各勢力は彼より又彼に依りて在るものなり、又万物の善と美とに變ぜられつゝあり、存在し且形を成す万物の善と美との爲に存在し且形を成すものなり、而して彼の万物の始なり終なり、\* \* 何となれば万物彼より出で彼に依り彼に歸するが故なり」—— *De div. nom. iv. 10.*——  
 (Rom. x. 36) 「彼は万物を造り万物を完成す、彼は万物を自己に合一し又改化せしむ」——「惡の原因ハ神と共にあるが故に惡は人を益する力なり」——  
 30. 「凡ての惡すら其始と終とは善なり、何となれば善き者も之に反する者も万物皆善の爲めに存在すればなり」—— 31. 「善なる者は万物の始なり又終なり」—— 32. 「惡を造る者も其存在ハ善より來り善あり」—— 33. 「神ハ凡ての權力ある住家となり、万物を安全に保護し、万物を合一し、改化す、…… 万物をして彼自身より墮落し凡て完全なる家より離れて滅亡せしむるとなし」

「善」(或は美)は万物の始なり終なり也。—— 凡て是れ大希望に導くは論理上自然の勢なり。

此點に於て余は大希望を教示せし二人を擧げざるを得ず、此二人は時世の雲霧中に殆んど埋滅せられたる者なり、

第一はヒエロセアスにしてダイオニシアスが其師の著書より引用すと稱したる簡短なる數句に依て僅か其名を知られたり、ヒエロセアスは恐らく第五世紀中のエヅッサ學派に屬せし人ならん、予は今簡單なる二例を示さん、最高の愛と向て凡ての存在物より注流する全愛は傾くなり—— (*De div. nom. iv. 16.* より引照せり) 茲に單純なる一力あり自動して善なる者より存在する諸物の終りまで(流れて)單一に調合す——  
 17. 此等の簡短なる拔萃は此人を代表するに不適當なりと雖も其教説の僞ダイオニシアス説と明に一致するを見るべし。

他の一人はエデツサの僧長アホットバルスデイリにして第五世紀の末頃最高なる宇宙神教ユニツカサルサリスムを教へたり、ヒエロセアスの名を以て彼は來世の諸刑罰の有限なると其清潔にする性質とを斷言せり、墮落せし靈魂も尙ほ慈悲を受くべく、万物は復興せらるべし、故に神は万物に主たるべし。—*Assem. Bibl. Orient. ii. p. 291.*

余輩は今聖哲にして信者なるマキシマス(紀元六百四十五年)の著書より簡單に引用すべし、是れ三百二十一頁に摘記せし者なり、彼はニサのグレゴリーの教説に就ては多少不同意を表し、左の如く言へり、

蓋し万有は復活に於て肉の不朽性を受くるが如く、靈魂の墮落せる力も時代の進歩に従ひ其中に植へられたる罪惡の記憶を撤去し、凡ての時代を経過すれば神に來りざる可らず、又善の充實に由るに非されども智識に依り強力を得て其原始の有様に回復せらるべし。—*Quest. et. Dub. XIII. 又彼の格言集 Sec. XX. に曰く、凡ての理性的實體と神との一致の終極の目的として立て*

らるゝなり」と。—(ニアンター氏 *Eccles. Hist. v. p. 242.*)

此記者附言して曰くマキシマスの基礎の觀念は最終の一般復興の教理に導くが如し、蓋し此命題は余輩の判定に依れば嘗てマキシマスのみならずダイオニシアス及エリゼナに就ても亦然るや疑なし、然るも此全く符合せる説は當時流行せる神學に依り困難に陥りしと認むべきなり、(是れ實にマキシマスが時々使用せし言語なり)

マキシマスのダイオニシアス註釋に曰く、神は万物の目的なり尺度なりと、—*In. De. div. nom. iv. 62.* 「神は動けり蓋し神は万物を變化して益々善良に爲せばなり、\*\*\*ダイオニシアスの言へる如く神は万物の始めにして又終なり」—*ib. v. ad. fin.* 而して又「神は万物を包有して万物の上に主たるべし」—*Ambig. ii. p. 1210. (Migne)* (エリゼナの翻譯より抜擧せり)「神に依りて造られし万物は永久不變に神に集められ」—*ib. p. 1200.* 神の休息(安息)は被造物の全く彼に歸復するを云ふ—*Capit. Ueol. i. 47.* 又マキシマスは數多の教父と共に惡人の

滅亡の其邪惡の滅亡もることなりと言へり、例へば詩三十七〇卅六に於て曰く此意味は惡の消滅して其痕跡を残さざるなりと——*Schol. De. div. nom. v. 18.*上に言へる如くマキシマスハ復活ハ復ハ興ハの觀念を結合せり、予は尙ほ一節を擧ぐ復活の時成肉の子の恩恵に依り肉は靈によりて吸収せらるべしと——(エリゼナの引用する所)——*De. div. nat. lib. v. 8.*

吾人の次の證據は既に記したるエリゼナなり、其著書は實に各神學生に推薦すべきものなり、即ち明瞭爽快の文体を以て深遠なる思想を表し、讀者に非常の興味を興ふべし。

「神に在る原因に復歸するは(恰も消滅に依る如く)凡ての被造物に普通なり」——*De. div. nat. lib. v. 21.*彼は其他甚だ特異なる一節(余は不幸にも此引證を遺失せり)に於て論じて曰く、基督は万物の造主及原因あれば、全受造物の一般の目的は神の道コトなり\*\*\*終に万物は造主と結合し彼に於て一となり又彼と共に在るべし、而して是れ見るべき物と見る可らざる物を論ぜず、万物の

目的なり、彼又曰く神に在り又神なる万物の一致に回復集合するの時あり、故に萬有は神たるべく又神は萬有たるべしと——*pref. in Max. Ambig. Migne, p. 1195.*本文ハ偽ダイオニシアス説のマキシマス翻譯の要領にしてエリゼナも此二人と同論者なるを含めり、全人類は基督に於て救はれ天のエルサレムに歸るべしと——*De. div. nat. v. 38.*神の善、生命、及幸福に悖るものは一として之と共に永遠なる能はず、何となれば神の善は罪惡を滅し永生は死を吞み幸福は罪を吞めばなり——*v. 27.*罪惡と不義ハ全く無有となさるべし、故に存在せざるべし——*De. div. nat. iv. 4.*若し神の創造せる全世界及一般の全創造物が其永遠の大原因に同歸するとなくんば、吾人の推理は全く無益となり全く粉碎せらるべし。——*v. 28.*

\*エリゼナは來世に於て人性と神性と混合するを拒みて萬有神教に反抗せり——*De. div. nat. v. 8.*

エリゼナが第九世紀の羅旬教會に記する所ありて自然に無限刑罰の信仰を告白したるは眞實なり、然れども是れ彼の神學の全系と甚しく矛盾せり、

彼が言を弄し人目を眩惑して物の存在すべきところを存在すべからざるを同時に教へんと欲したるは第五巻に於て看るべし——*De div. nat.* 奇異驚くべき一節は恐らく悪魔の永遠刑罰と不敬との一般の廢止たるべしと云ふを暗示せり。——*ib. v. 27.*

當時より稍后にも尙ほ凡ての靈魂地獄より赦免せらるゝとを教へし學者あり、然れども宇宙神教の直接の證據は今甚だ稀なり、エキユメニアス(紀元九百九十年)の説は古代教説の痕跡を明示し著名なる語を以て記して曰く「神は萬物に主たるべし」惡の滅亡は(凡ての惡 *tes. kalias*)此語を以て示さる、蓋し罪 (*the hamartia*) 凡ての罪除去せられ吾人既よ神と情慾との間に分離せられざるに至れば神が萬物に主たるや明なり、他の著者も之を解釋して萬物は其原因たる天父に復歸すべしと云へり——(哥前十五〇廿八に於て)

ブルガリアのアクリダの大監督セオフキラクト(紀元千七十七年)は吾人の次の證人にして、夫の九十九羊と一の失はれたる羊との比喩を解して是れ義人と罪人を指すなりと言へり、然れども比喩の失はれし羊の發見されし時、若し之を以て人間の罪人を示すものとせば、此文は論理上宇宙神教を包含するが如し、然れども此比喩の意義は當に此に止まらざるなり。

彼語を續て曰く、或人以爲らく百正の羊は凡て理性的創造物を指し、一匹の羊は人(人類)を指すなり、\*\*\* 又紛失せし銀貨は失はれし神の像を謂ふなり、全世界は再び罪惡より清められ、失はれし銀貨(王像)は明に發見せらるゝ、此兩説明とも大希望を包含するが如し、彼は哥前十五〇廿八に於て曰く「或人の理會に據れば、是れ邪惡の除去を謂ふ、蓋し既に罪惡なくんば神は萬物に主たるべければなり」と、是れ則ち大希望論が殆んど十一世紀の末葉に至るまで存在したるを示すが如し、又茲に注目すべきはセオフキラクトが

毫も之に異論を唱へざりし事なり、弗一〇十に於て、天に在るものは地上に在るものより分離せられて同一の主を有せず、蓋し萬物は創造に依り一の神を有したれども親愛 (*oikiosis domesticity*) に依り未だ (一の神) を有せず、故に天父ハ天と地上に在る萬物をして一の主の下に歸復せしめ、基督を以て萬物の頭と爲さんと欲せり、西一〇十八—二十に於て彼曰く、保羅ハ教會に依り全人類を示せり、基督は初果にして彼に従ふ殘餘の者 (萬物) をも有するなり (*αὐτὸς ἰσχυρός*) \* \* \* 一束の穀捧けられて全穀神聖と稱せらる、一人誕生して全人類復活の價値を得たり \* \* \* 基督は誕生の初果として (死より) 生れたる最初のものなり、蓋し是れ新生なればなり」と。本節の思想の順序は假令日記者の意見の如何なるにもせよ決して罪惡永續説と相一致し難きものなり、爾後の例證亦乏しからず、聖トマス、アクイナス及デユランダスの兩人ハ彼等の時代に在りても純然たる宇宙神教の知られざるに非ざりし事を示せり、是れバイテヤの「ギルバルト」學派即ち聖トマス、アクイナス

の *Gent. iv. 45.* 及デユランタス (*aliquorum juristarum*) (恩賜ト審判) 又恐らく或神秘教信者の意見なるべし、又第十二世紀に大名を轟かせし聖アンセルムも次の如く言へり、如何なる理性的動物をも全く滅亡するに至らしむるは神の性質に全く違ふものなり——*Cur Deus Homo, ii. 4.* (是れ古代の希望の生存せし著しき一證なり) 聖アンセルム又曰く之に反對せる推理は理性的心意の能くする所にあらざるなり」と、以上の證據に加ふるにウエールスの監督長が英語日記 *The Fifteen Os* なる書より引用したる頗る趣味ある祈禱を以てすべし、右の英語日記はカクストンに依りて出版せられしものにして、革命以前に於る英國宗教感情の趨勢を説明せるものなり、曰く「爾の形像に摸して造られし事の外苦難よ沈み希望なき所の靈魂を憐み玉へ \* \* \* 汝の右手を伸ばし彼等を地獄の無終の憂悶と苦痛より救出して天上の市民の伴侶に導き玉へ」と、以

上吾人の研究を爲したる者の中に含める教會史三期の初春と短期の暑夏と憂鬱たる冬期に先だつ秋とに相應すべし、數世紀間爭論と成長と相續きたる后コンスタンチン帝福音の爲めに自由を與へ、尋て神學上智識上に活動の破綻を起せり、是れ教會の春夏と稱すべし、然れども此成功の際暗々裡に災禍の種子を隱伏せり、困苦に壓伏せられたる不善の元素の直に萌芽せり、今や基督教の旗下に蟬集せる群民は續々迷信と無學と異教の惡習とを帶ひ來れり、激烈なる内亂と恥つへき奸計と害毒の爭論の未曾有の猛威を極め以て教會の勢力を消滅し之を導きて荒蕪なる溝壑に陥らしめんとせり、是れ教會の秋期にして是れより漸く衰微の境遇に向へり、荒蕪の時代の後西部に於て諸教父に繼て來るものは學者なり、然れども東部に於ては古代の名家に續くべき者一人も出でざりき、此時代の他の方面を觀察すれば則ち羅馬帝國の滅

亡、法王政治の發達、野蠻人の以太利に續々侵入せしと、寺院制の擴張、迷信の確乎たる進歩、學術の衰微、東西兩部の分隔益々甚だしくなりし事是なり、斯の混亂の中にありて夫の教會の春夏時代に自由に教へられたる大希望論が衰微の秋期に至りて大に其信者を失ひ、暗澹たる冬期時代に至りて殆んど枯死せしは誰か之を怪むものあらんや。

然れども宇宙神教ユニヴァーサルリズムの歴史と完全ならしめんば、夫の屢々駁撃せらるゝにも關らず今日尙ほ反復せらるゝ斷定、即ち萬民最後の救済の教理か第五大會議に於てオリジンの一身上に譴責を來したりとの議論を討究せざるべからず、此斷定の誤謬なるを明に示すを得べし、尤も宇宙神教ユニヴァーサルリズムを擯斥せんとするの計畫は實に爲したるに相違なきも、そは全く失敗したるなり、而して此計畫を爲したるの第五大會議に非ずしてコンスタンチノーブルの内國宗敎會議に於てなり、即ちコンスタンチノ

イブル附近の小数の僧區より出せる監督會議に於てせり、此會は首府教會の或役員と共に常置法教師長より成れり、一般に誤解せられたる此事實を明解せんには、先づ大希望論は所謂オリジン説の只一小部分に過ぎずして又全く之と關係なきとを述べざる可らず、故にオリジンに常々反對したるアンテヲケ學派に於ても大に之を主張したり、オリジン説とい甚た廣大なる教系を謂ふ、今其要點を擧ぐれば、(a)或冥想的教説例へば先在説プレエキジステンヌの如き、(b)少くも容易に誤解す可き三位一体説に就ての或意見、(c)復活の教理に於ては此大著者の當時に在て過度に進歩したるものなり、是れなり、實にオリジンの名聲を大に毀損したるものは殊に後の二説にして決して彼が萬民の最後の救済を信せしに由るに非ず、此證據たる富饒にして且確實なり、(一)アレキサンドリヤのクレメント、ニサのグレゴリー其他オリジンよりも一層充分に純然たる宇

宙神教ゾラリウムを教へし數多の人は一般の尊敬を受けたり、尤もモブスエスシアのセウドーアニソアルサリスム(二百九十五頁)の如き二三の人は責罰を受けられたるも、其責罰は直接間接にも宇宙神教ニソアルサリスムに關係なきものなり、(二)實に大希望論は殆んど萬事に就きオリジンに反對せし者も大に之を主張したり、アンテヲケ學派の如き是なり、實にセウドーアに對する奸策はオリジン黨の計畫に出でたり、(三)吾人のオリジンの過失を確定せるところに就き紀元三百年より四百年まで多少完全なる數種の書目を有するも其中大希望論は就てい一も記載せるものなし、今其書目を擧ぐれば、メソデーアスの記録(紀元三百年)、パンフィラス及ユーセピアスの辨證論中の記録(三百十年)、ユウスタシラスの記録(三百八十年)、エビニアスの記録(紀元三百七十六年及三百九十四年)、セヲフィラスの記録(一の回文と紀元四百年、四百二年及四百四年の三回の復活祭の書簡とに在り)及聖ゼローム

の數多の記録(紀元四百年)是なり、余は讀者に最も重要なる事實に注意を請はんとせ、即ち聖ゼローム、セオフリラス及エビファナスはオリジンに對して畢生の力を盡して攻撃を加へたるに係らず、其大希望論に就ては決して之を異端として論及せしとなし、此事の少くも全く公然たる問題たりしとの避く可らざる結論は苟も公平なる心意を有する者の拒否す可らざるものなり、余は再び言はん、此事實をして夫のオリジンの名聲を毀損したるものハ彼の萬民の最終の救済説なりと云ふ世俗の偏見と焉を調和せしむるを得んや、實に大希望論は、吾人の見る所を以てせば、オリジンの特色に非ずして、尙ほ左の事を信す可き理由あり、彼は回復説と未來諸刑罰の有限なるを教へたりと雖も(此等の説は、大衝動力を與へたり)、一種異様の形体を以て自ら之を主張したり、余は彼が數多の教父の主張したる如く凡ての惡靈の終に救はるゝと

を教へたりと謂ふは非ず、然れども彼は左の如く教へしが如し(二)凡て人類は正に同一の水平線に歸すべし、故に聖ゼロームの言ふ如く娼妓も終に幸福を受たる處女と同様になるべし(三)爾后新に輪回を繼續し善良の天使も墮落するとあらん、斯の如く長く循環し恐らく永遠に至らんと、此等の説は大希望論者よりも并に其反對論者よりも四方より攻撃を受くるは自然の勢なり。

\*其他古代ノ著述家にしてオリジンに反對せる者あり、アンテオケのユウス、タシアス(紀元三百三十年)、アンシラのマルセラヌ(三百二十年)の如きは是なり、然れども一人も復興説に論及せざりき、フレキキス、テニス、レオ、セ、グレートは一書——Epiphanius——に於てオリジンを指し、先在觀を教へし爲めに罰せられたりと言へり。

以上陳述せし所より推究すれば、オリジン或は所謂オリジン説を責むるは、假令へ彼が復興説を教へたりとするも、之を駁撃するの謂に非ざ



るや全く確實なり、況んや全人類の復興に關するとなきに於てをや、此教理はアンテヲケ學派に於ける如くオリジン説に強く反對せし者も大に賛成する所なり、余は再言せん、諸證據の示す所に據れば、オリジンに不名譽を來したるものは冥想的教説に在りて、少くも大希望論と全く關係なき教説に由る、但し一部は反對者の嫉妬より來りしや疑なし、之と等しく第五大會議に於て確實なるオリジンの責罰に關する事實も亦誤解せられたるものなり、故に今簡單に重要な點を陳述するを必要なりとす、即ち左の如し——紀元五百四十一年（正確の年月を知らず）ヂヤスチニアン帝は法教師長メンナスに命じてコンスタンチノールに内國宗教會議を開き、公然大希望論と其他オリジンに歸する諸説を罪せしめたり、是れ大希望論を明に罪せしめたる第一の企圖たるを以て吾人の紀念すべきものなり、其結果を見よ、此會議に於てオリジン

ンの教説を罰すべき十五ヶ條を議決したれども、大希望論に關するものは熟考の上之を省きたり、即ち熟慮して之を罰するを肯んせざりしなり、其后十二年を経過して第五大會議を開きたり、是れ固と奸策に出てし者にして英國教會は之に應せざりき、然れども宗門條例第十一條に照してオリジンの名を罰せしどの事實は有力公平なる諸記者の論争する所なり、但し普通名稱に於て彼を罰せるのみなりと云ふ、是れ既に述べしが如く大希望論の罪責に就ては決して何事をも證明するに足らざるものなり、且第五大會議に於て宇宙神教を罪せんと企てたりと云ふは頗る信を置き難き特別の理由あり、（第一）此大會議の主動者はオリジン派の人々たりしと、（第二）此會議の目的は全く宇宙神教と異なりたる、或ネストリアン教説を罰するに在りしと、（第三）此會議は諸教父中最も明白なる宇宙神教徒たりしニサのグレゴリーを信仰の支柱と

して明に之に依頼せり、是れ所謂宇宙神教ユニヴェルサルリズムの處刑なる者の眞説なり、内國宗教會議に於ては、仮令ひ皇帝の命令と雖とも明に之を罪するを肯せざりき、而して第五大會議がオリジンを罰したりと云ふは疑はしと雖も、若し事實なりとせば、只普通名稱に於て罰したるものなるを以て大希望論を罰せしに非ず、又如何なる古代の大會議に於ても此殊點を決議せしとは、余の聞知せざる所なり、之を要するに「吾人は第四、五世紀に行はれし復興説の信仰が會て教會の大會議に於て明に罰責せられしとの證據は一も發見する能はざるなり」——*Spirits in Prison* p. 141. 是れ余が讀者の腦中に明白に印象せんことを希望する一事實なり、其言に曰く「オリジンの説に反對して羅列せる證據の多寡と性質は如何なるにせよ、會議は之を其決議中に加へざりき」——*Church Times, Feb. 1, 1884.* 或人言はん此永遠なる地獄の信仰が實際上普通と爲りし程に廣く傳

播するを得たる事實の眞理なるを證するにあらずやと。

余答へて曰く、若し然らば何故汝の理論を世に提出せざるか、小兒の聖晩餐は數世紀間一般の說にして、奴隸論は教會初代より一般に辯護せられたるの故を以て吾人は此等を採用せんとするか、信仰の錯誤に對する迫害の義務ハ一般に主張せられたるを以て吾人は之を採用すべきか、吾人の聖徒及天使を拜すべきや、何となれば此風習は一時一般に流行したればなり、又同一の理由を以て巫女を燒殺すべきか、又無數の場合に於て誤謬を流行せしめ現今に於て神の眞理を掩蔽するは神を喜ばしむるものなるか、此事實は只眞理を掩蔽し或は之を覆敗するものに抵抗して發動せしむる爲め吾人を喚呼する大聲なるのみ、否、是れ大希望論と全く一致せる結論を指示するや確實なり、即ち現世は唯生存の一初幕にして諸時代中の一時代なり、而して此間神は徐々として廣大なる企業を成就するを以て恰も一瞬間誤謬と不善とに外見上の勝利を許すもの、如しと云ふと是なり。

今吾人の進んで吾教會が此點に就て教ふる所を視察せん、若し吾人注

意して吾人の普通祈禱書を檢閲せば大希望論に利益あること少なからざるを發見すべし、是れ此書たる原文と聖書とを基き編成せられしを以てなり、予は此編輯者を指して宇宙神教徒なりと謂ふも非ず、否寧ろ反對者たりしならん、然れども斯く間接無意の處に於ても大希望説の噴出する表徴あるを看るゝ又興味あるとなり。

例へハ聖洗禮式を舉ぐ——信仰の告白に要するものは何ぞや、汝ハ死后の永生を信するや、而して其他には一語なく又一暗示なし、又吾人の祈禱集を看るに、吾人は或人の爲めに非ずして万民の爲めに恩恵を神に祈るにあらずや、若し之を實に爲し得べからざる事とせば、斯の如き祈禱を神に捧ぐるは虚偽に等しきに非ずや、是れ恰も宗教裁判所が囚人を普通の裁判所に渡すに當り、彼等に仁恵を與へんとを要求するに異ならざるなり、又全書に耶蘇、基督と、世の罪を取り去る神の業と反復二回記したるにあらすや、聖晚餐に於て一回の祈禱中に三回も耶蘇基督を指して此眞に更大なる詞、世の罪

を取り去り玉ふを唱ふるに非ずや、此に於て吾人は左の如く問はん、此詞は只虚飾なるか、殊に最も神聖なる晩餐式に於て然るや、若し人の罪惡除去せられずして永遠地獄に残るものとせば、基督は如何して世の罪を取り去るべきか、此點に於て吾人の普通祈禱書の殊に語勢を加へたり、何となれば復活祭の序言に吾人に命じて基督ハ如何に世の罪を取去りしか、又彼の死に依り死を滅せしか、を記しめたり、聖書に所謂死を廢するとは實に墮落より人に來したる凡ての事を除くとなり、次に又斷食集の一を舉ぐ、曰く「按手禮を受くべき者には万民の救済を進むべき爾の恩恵を與へよ」と、萬民の救済とは最多の人若くは或る一人の墮落を含むものなりや、又教會が吾人をして世界の救はれし爲めに、又凡ての創造物の爲めに、吾人の墮罪の爲めにするよりも少からざる感謝を爲さしむるに當り、若し確實なる約束に非ずさせば、何ぞ斯の如きとを命ぜんや、若し創造が一事實として地獄の刑罰の恐るべく言ふ可らざる危険を含むものとせば、人類をして自ら無限の苦難に陥らん爲めに感謝せしむるは何ぞや、次に予は諸君が恐らく、記し

ざる一事に注意を乞はん、即ち吾人の教會が熱議の後万民の最終の救済に於る信仰を罰せし箇條(千五百五十二年に採用したる)を削除せし事はなり、(マンチエストルの監督曰く)第四十二條は撤去せられたり、何さなれば教會ハオリジョン、クレメント及ニサのクレゾリーの如き人は皆ユニヴァルサルストたりしを知りしを以て斯の如き問題を獨斷するを拒みたればなり、又我新舊本は有望なる教義を指示するに乏しからず、又葬式書中に萬民の爲めに顯はされたる希望あるを看過する勿れ、又信仰問答及一般の信仰に於る贖罪の廣潤なる範圍に注目せよ、凡て此の眞正の力を知らんざれば、吾教會の禮拜式と他の改革教會の禮拜式とを比較せば最も明ならん、(今茲に之を比較するの餘白なし)之を要するに普通新舊書の語勢は屢々復活祭前の日曜日の新舊に示せるものにして、即ち基督の死の目的を左の如く記せり、凡ての人類は彼の大罪過の例に倣ふべし、又他の新舊書中に唯一の神を指して、其特性は常に慈悲を有すべしと言へり、此等の詞は若し充分なる意味を以て言へば確實に大希望を教ふるものゝ如し。

然れども吾人の教會の教説に就き尙ほ重要なる證據あり、何ぞや、基督の陰府に降る事に就てハ余既之を論し、凡ての靈魂を赦免するを教ふるものなりと言ひしが、是れ論理上少くも宇宙神教を教ふるものなり。——(二百五頁)

而して此万民の赦免ハ思ふに吾人教會の教ふる所のものなるを示すを得べし、何さなれば吾教會が基督の陰府に下り説教せし事實に於る信仰ハ、復活祭日の夜會に彼得三〇九を撰み撒加利亞九〇を第一教課として撰むを以て知るべし、(撒加利亞五〇十一に於て、希望の囚人)を示すを見よ、又復活日に指定せる説教中に基督の陰府に於ける説教の結果を左の如く記せり、曰く、彼は惡魔と凡て其暴虐者を討滅して凡ての俘囚を奪回し、之を擧て彼と共に天上の市民の中に居らしむ、彼の死ハ地獄と其處の凡ての邪惡を滅亡せり、此等の語は余の考ふる如く凡ての靈魂を残りなく陰府より免かれしむるを教ふるものなり。

祈禱書の現はれし以來英國神學に於て大希望論を辯護する有力者少からず、夫の反逆の騷動と復興の暴行との際に在りて、大希望論を主張し又は之に同情を表せし熱信家の一學派勃興して隆盛に赴きしは吾人の注意すべき事なり、此輩は大概ケンブリッジにて教育を受けし者にして、一部の英國教會に屬する者、他の一部は國教に従はざる者なり。

最初に萬物の完全なる復興を教へし一人はセラルド、ウインズメンレー氏にして千六百六十九年に刊行せる「神の秘密」なる書等に於て此説を主張せり、殆んど同時代に有名なる者二人あり、ケンブリッジのプラトー學派のラルフ、カッドウォールス及ヘンリー、モーアの二氏にして明に大希望論を賛成せり、更に忌憚なく此教義を主張したるハケンブリッジの「エマニエル」大學の校友ヒーター、ステリー氏なり、此人はコロンウェルの家庭法教師の一人なりしが、其著書は死后千六百八十三年及千七百十年に出版せられ、頗る秘義に傾き美妙の想像に富みり。次に同派の思想に屬する「ナルビア」の著者

サドラーと、カッドウォールスの友人ホイテョートと、ミルトン及、ゼンミーター、ロルと同時代に在りたる「エマニエル」大學の校友モノアミを舉ぐ、又アール、ユピン(千六百四十九年)及ダブリエー、エル、ブリーも同論者なりしが世に聞ゆるも少なし、此時に當り大希望論を辯護する匿名書の現はれしもの少からず、此等は第十七世紀に於る神學上討究の針路を示す者なれば記載すべき價值あり、即「エノク神」に歩む「永遠福音の黙示」(此二書同作者の手に成る)神の光(千六百五十三年出版)「地獄の礎石、圓柱を揺動する刑罰に就て」(千六百五十八年エス、リチャードソンの作)是なり、更に有名なる大希望論の主張者はゼンミーター、ロルの繼續者にして、デ、ヴェリテート及オリジンの意見に關する一番の著者なる監督ラストなり、之を殆んど同時に有名なるはケンブリッジの「トリニチ」大學の校友にして、コロンウェルの家庭法教師たるゼンミー、ホワイトとす、其著書「萬物の回復」は(彼の死后)千七百十二年に出版せられたり、予は之に加ふるに雄辨熱信にして而も聖書に對し最も深く尊敬を表する一書を以てせん、第十七世紀の末葉に當りてアールスタッフ、オール

ドギンリド出でたり、後者の秘教徒にして其著書たる稀有の名作にして頗る價值あり、以上の人々にテロトソンを加ふべし、此人は神は罪人に加へたる恐嚇を實行するに限らず主唱せしが如し、此意見は尋で監督スチリンゼリートの一層確實に論したる者なり。又特許局長博士パーチット氏も之を主張したり、彼はケンブリッヂに於てテロトソンの門弟たりしが其著書 *De Sicuti Mortuorum* の中に公然宇宙神教を教へたり、大希望論を贊助する運動は十八世紀に於てウヰリヤム、ホイストン及其他數多の人に依り繼續せられたり、ホイストンの千七百七年其脱教及論文を倫敦にて出版し大に氣焔を吐けり、又次に指名すべきはドクトル、チエーン及(多分)監督ヨルバートンとす、チエーンの論文ハ千七百四十二年に出版したり(默示録二十〇十四の註釋を見よ)又監督ニュートンは千七百五十年人間終局の有様に就ての脱教に於て、ウヰリヤム、ホイストンハ千七百六十六年其書簡及神の智識に至るの道なる書に於て大希望を説きたり、英國に於る復興の全運動は恐らくウヰリヤム、ホイストンに基きしならん、此時代に關する二書あり、即ちセーウインヤッ

ト氏の著書 *De Vita Finctorum Sicut* 及 *Principia* クラーク氏の「猶太人及異邦人の福音」の二書は共に千七百六十三年に出版せられ著名ならざりしも共に大希望を辯護せり、其他此世紀中宇宙神教を賛成せる著者の倫敦のセー、クック(千七百五十二年)セー、レリー(千七百五十九年)サー、ダーストン、ハウス(千七百六十八年)ダブリエー、ドットン(千七百六十五年)宣教師シー、ペロー(千七百七十六年)シー、チャーチー(千七百八十四年)エフ、レージェストル(千七百八十六年)セー、ウイヅアー(千七百九十二年)ビー、アラウソ(千七百九十八年)とす、此時代にジョーン、ウエスレーの従弟エルハナン、ウヰンチエストル氏ハ其問答書中大希望論を主張せり、而して實にウエスレー自らも終に此説を分有したるが如し、何となれば彼は千七百八十七年に「彼が讀みたる書中最も感す可き小冊子」の一としてボンチットの *Palingenese Philosophique* の譯書を出版したればなり、此書は宇宙神教を辯護するもの、如し、即ち「人類は各自完全に向ふて(來世に於ても)永久進歩すべし」と教へたり、其他宇宙神教を主張する米國の書籍頗る多し。

現世紀に於ても大希望の方向に於ける同一の確乎たる運動は常々増加する勢力を以て繼續せり、リンラゼンのエルスキンの名聲は多數者の熟知する所ならん、又故監督ウキルバーフォースが終つ、大希望に傾きしことの確證あり、其子今此教を傳ふ、其他有名の人士にして宇宙<sup>ユニヴァース</sup>神教を公然説教し又は之に同情を表したる者少からず、即ちテニソン、ホイチア、ブライアント、ブラウニング、ブラウニング夫人、ホイトマン、エドナライアル、ジョウジ、マクドナルド、ラー、ダブリュー、ホルムス、オリファント夫人、ゼームス、ヒントン、ジーブロンテ、其妹エシリ、ゴルドン將軍、モロツク嬢、フレデリカ、ブレマー、エリス、ホブキンズ、ヘスバ、ストレットン、フロレンス、ナイチンゲール、エス、シユレゲル、デ、クインシー、エマルソン、ロングフェロー、ビーチア、アースト、夫人等なり、茲に驚く可き一事實は英國よても米國にても凡て重なる詩人が大希望論に同意せしと

是れなり、若し眞の詩人的、インスピレーションを眞なりとせば大々注目すべき事實ならずや、神學者中にも大希望を採用し又は少くも之に同情を有せし者少からず、例へばアルジルの前監督エヴイング、カノン、キングスレー、エフ、デーモリス、博士コツクス、バルドウイン、ブラウン、監督ウエスコット、博士リットル、デル、マンチエストルの監督、エフ、ダブリュー、ロバートソン、サー、ジー、ダブリュー、コツクス、エー、ジュークス、アーチャー、ゼルネー、ヒリツクス、ブルツクス、教授メーヨル、カノン、フアラ、校長ケアード、ミーズの監督、デイン、チヨルチ、ニアンドル、マーテンセン、シ、ソラツク、リユース、シユライマー、ヘル、ベングル、エバ、ハード、ラベードル、ゼー、マクレオド、キャンベル、ウエールスの、デイン、カノン、ウイル、バーフォース、牧師ラベルリン、監督ケン等なり、此列名表の大希望論者を悉く網羅したるに非ず、唯是に由り此運動の根原深くして永く繼續し且各種

思想家の間に廣く布及せるを證するに足るべし、此他吾人は口碑的信條が許多の場合に於て、狀態的不滅論の爲めに全く廢せられ、之に反して大希望論が許多の場合に於て、實際上默認せられたることを忘るべからず。人心の變化の實に大なるは今年千八百九十年の教會々議に於て少くも二人の監督が大希望説を主張するの事實を見て知るべし、其一人の會長として他は今尙存する最卓越の英國神學者なり。

予が此數章を記述せしは教會長の憑據を誇らん爲めにあらず、余の目的は歴史上に在り、辨論の爲めに諸教父を最下等の位地と置くとも、彼等は少くも新約聖書の言語の活用せられし時代の基督教教説に對し吾人唯一の確實なる證人なり。夫れ憐憫なく又少許の異説をも強く制止するの時代に於て、百六十四頁大希望説の斯く弘く傳播し、且聖書の憑據に基礎を立てし、此爭論中實に最要なる事實なりとす、一層高等

なる教會長の神學は其死と刑罰と未來の狀態との意見に於て全く吾人近代の説に異なれり、若し吾人凡て此切要を見さるとも反對論者の賢明なる必ず之を認むるに足らん、見よ永遠刑罰説の如きは之を聖書に照して如何に不合理なるや、又宇宙神教ユニヴァーサルリズムを近世の新説なりと唱ふる如き、或は無差別感情的時代の産物なりと云ふが如き、歴史の無知に訴ふるの機會は既又過ぎ去りしに非ずや、反對論者自から之を識別するに足らん。

余は讀者に向ひ此等の紙面は唯真正なる自由教會の爲め、真正有實なる自由主義の爲めに辯論するものなりとの注意を乞ひんとす、予は基督の神聖なる自由教會をして狹隘短矮ならしめざらんことを辯論するものなり、然れども真正の自由を以て基督をして爲めに死せしめたる所の各靈魂を救済的に包含(早晚)せんとを辯論する者なり、是れ則ち古



代聖徒の多数の最深なる確信たりしと余は信するなり。

凡ての注意と盡力とに係らず數年を過ぐれば此書に於て或詳細の誤謬を發見するとあらん、又或句節の誤解せらるゝとあらん、若し然らば余は覺へず罪を犯したるものなれば讀者乞ふ之を信せられよ、余は余を非難する批評家に乞はん、若し余を譴責せざるを得ずんば願くは公平なる精神を以てせよ、愛の神に仕ふるに當り斧を弄する勿れ、耶穌基督に仕ふるよ於て罵詈誶謗を用ふる勿れ、然れども凡て主要の結論の純然たる眞理なりと余は信するなり。

所謂諸教父の矛盾は忌憚なく之を表示したり、今尙は普通なる解釋法の全く不公平なるとは之を發露したり、(百八十六及七頁を見よ)凡ての事實を公平に秤量する時(百六十四及百八十七頁は古代に於て宇宙神教<sup>ユニヴェサル・リリジヤ</sup>の一大体の存在せし證據明々白々にして全く動りす可らざる

なり。

今や事實の觀察を速了したれば茲に古代の來世論を排列せん、蓋し最初には恐らく三種の異説ありたり、或者は惡人の終に滅亡せる説を持し、或者は殊に北亞非利加に於ては永遠刑罰説を持し、或者は(恐らく過半数)宇宙神教<sup>ユニヴェサル・リリジヤ</sup>を教へたり、此第三説はニサのグレゴリーの時代に當り無比の博學天才を有し兼て篤信家たりしオリジンの助勢を得て大に世に行はれ、續て晉に東方のみならず又西方の大部分をも風靡するに至れり、(九十五及九十八)滅亡説の實際上消滅したれども宇宙神教<sup>ユニヴェサル・リリジヤ</sup>は益々其基礎を堅ふしてアレキサンドリア學派又反對せる地方に於ても一般の通説となりたり、然るに永遠刑罰説の衰勢再び蘇生し時を得て勢力を加ふるに至れり、北亞非利加の教會はオーガスチン其人と共に此戰場に入り、希臘語は西方に於て速かに衰微し希臘教父等は世人に

忘却せられ、羅甸基督教は地味馥郁として自から發達し、羅馬風と一致して嚴格なる法廷風を採り、愛なる天父の玉座には今や嚴刻なる法官若座し、(崇重なる羅馬知事の一種)罪の感覺は實際上其他の萬事を萎縮せしめ天父化して審判官となれり。

東方に於ては古代信仰の衰微迅速ならざりしと雖ども終に殆んど全く衰微するに至り、教會の内外に於る爭論は無學と腐敗とを増長せしめ、苛酷なる爭論及他の黨派(三百三十三頁)と相結合して終に古代の大希望論を衰弱せしめ殆んど消滅せしめたり、實又當時の如何に殘忍なりしか、如何に人心の狹隘なりしか、且最も神聖なるものに感應するの如何に遲鈍たりしか(今尙ほ然り)を回想せば斯の如くなりたるは敢て怪むに足らざるなり、眞に驚訝に堪へざるものは(少くも余が)則ち羅馬帝國の末路の如き時代に於て(宇宙神教の觀念の現出したると是れな

り、此現象は古代の諸教父が吾人に語る如く實に新約聖書中よ之を發見せしとの事實を據るの外之を解釋す可らざるなり(百六十五頁)故に余は古代の宇宙神教ユニヴェルサルイズムの記載を結ぶに當り大に余自身の不能と紙幅の限あるとを遺憾とす(例へば獨りニサのグレゴリーのみを擧るも能く此卷を充たすに足るの材料を供すべし)而して之に劣らざる實際の困難は讀者をして初世紀の地位に立て此證據を觀察せしむるとなり、吾人をして當時の事實を其儘に取り吾人をして實際憐憫の感情を知らざる社會の有様を直寫せしめよ、此時代に於ては言ふに忍びざるの惡習を以て万事を浸染し、之に加ふるに假令ひ教會の生存には懸念なきも屢々平和を擾亂する殘酷なる迫害あり、斯の如き境遇に於て此等の兇暴なる處刑者、此等貪慾の願望者に向て(生涯悔改せずとも)未來に於る最終の救済を約するとは基督の事業に殆んど反戾するが如くなら

ん、何となれば只彼等の悔改を禁止するが如きに過ぎざればなり、之に加ふるに當時教會内は流行する道徳の主義に於て明に詐偽を許したるは疑なき事實なり、此の如く宇宙神教をユニヴァーサルイズム隠蔽し或は拒絶するを正當とせしが是れ蓋し其便宜に依りしならん、此時に當り吾人が初世紀に於る大希望を間接に教へ、或は之を暗示するに必要な深き確信の或觀念を得たり、果して然らば墮落せし各靈魂の最終の救済を説示する宇宙神教は更に廣大なりと謂はざるを得ず、今吾人をして注意せしめよ(甲)本書の教義は二個の關係より古代教説の一大体を缺く、即ち本書は復興の確實を説かずして希望を述べたり、(乙)本書は此希望を凡ての理性ありて且墮落せし靈魂に論及せず、此點は予か目下の領分にあらざるなり。

## 第六章 宇宙神教及創造等

「凡ての靈魂は我に屬せり」(結十八〇四)

「願くはなんぢの手のもろもろの事跡をすてたまふなかれ」(詩百三十八〇

八)

「われ限なくの争はじ、我たえずは怒らじ、然らずば人のこゝろ我がまへにお

ころへん、わが造りたる靈はみな然らん」(賽五十七〇十六)

次に宇宙神教の爲めに創造、降生及之に類する教理を説明すべき議論を掲載するは恐らく便宜ならん、殊に余は師父の證言を引用せんと欲するを以て益々其然るを知る、蓋し其證言は前章に尋て記するを適當なりとす、吾人若し人間に關する神の計畫を正しく視察せば、遂に根源に溯りて全体を創造に探り、其自由創造の愛、即ち神に之を索めざる可らざるや疑なし、然らば創造とは何ぞや、創造とは造物者よ對して義務

を取るとにして、被創造とは權利を與へらるゝを謂ふ、其權利は最も柔和なれども最も不變にして、万物は之に依り神を像りて造らるゝなり。故に、人間は全世界の主人たる神の子なり、兄弟なり、夫婦なり、朋友なり。此最も神妙にして驚くべき工事の果して無窮の死の爲めに營爲せらるゝものなりや、ポイレット氏神道論セント聖アムブロス曰く、神の形像は最も貴重なる者あらんやと。斯く創造に於て吾人は人間と神の間に親密有機的、不朽の結合を爲せる一連鎖を有す。吾人の聞く所に據れば神は全人類の父と非ずして唯其創造者たるのみと。此言たる神に像り神に肖せて人間を創造せりとの説に就き全く誤解を爲すものに非ずや。此く視察すれば創造は福音の萌芽を含み神を四海の父とする主義を包有せり。預言者曰く、我儕の父は皆同一なるにあらすや、われらを造りし神の同一なるにあらすや——(馬二〇十)神よ汝はわれらの父なり(中略)わ

れらは皆なんぢの御手のわざなり——(賽六十四〇八) Proteus Solium (古代の福音)は(創世記一〇廿六)我儕に象て我儕の像の如くに人を造らしめよと云へり、ウエストコット氏來一〇二實に創造は父たる本分を擴張せるものなり、そは父たることなり、又之よりも更ニ廣大なるものなりと謂ふも恐らく不可なからん、父たることと其有する義務とは果して何の謂予や、此觀念は必然父の子と於る生活の交通にあり、今や父たるとは吾人に對し多分は不明にして而して天性に出づ、然れども創造は眞に合理不滅の精靈を創造する作用に包含せられたる凡ての責任を取り、凡ての關係を知り、以て神の如く自由に活動する所の愛なり、或人曰く神は其創造物に何事をも爲すの義務なしと、余思ふに神の人に形體を與へしとき之に約束したる諸事を果さる可らず、而して人に觀念を與へ其必要を感せしむるは則ち一善事を之に約束したるなり、